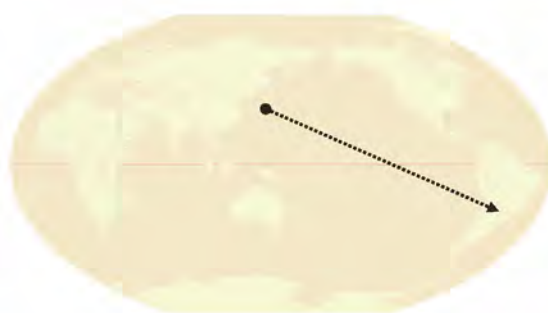


# JICA中部 2018年度教師海外研修報告書



**パラグアイ**  
7/28(土)~8/10(金)  
14日間(現地10日間)



■ **主催**：独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA中部）

■ **後援**：外務省、文部科学省

愛知県教育委員会、三重県教育委員会、岐阜県教育委員会、静岡県教育委員会、  
名古屋市教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会

■ **運営委託先**：特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター

# 2018年度 教師海外研修報告書

## 目 次

### 現地研修で印象に残った2枚の写真

#### I. 教師海外研修の概要

- 1 ● 目的とねらい
- 2 ● 訪問国と訪問先
- 4 ● 研修の受講者
- 5 ● 研修全体のスケジュール

#### II. 出発前後の国内研修・説明会等

- 7 ● 事前研修
- 10 ● 出発前説明会
- 11 ● 事後研修

#### III. 現地研修の様子と受講者の学び

- 13 ● ①JICA パラグアイ事務所プリーフィング+懇親会
- 13 ● ②ニホンガッコウ/青年海外協力隊 (小学校教育) 活動
- 13 ● ③小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクト、小規模農家の輸出農作物安全性向上プロジェクト
- 14 ● ④白沢商工株式会社
- 14 ● ⑤JICA ボランティアとのワークショップ+懇親会 (レスリング、青少年活動、日系日本語教師)
- 15 ● ⑥サン・エンリケ・デ・オソ小学校/青年海外協力隊 (小学校教育) 活動
- 15 ● ⑦サンタ・ロサ・デ・リマ小学校、特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金、Juvensur
- 15 ● ⑧カテウラ音楽団
- 16 ● ⑨サグラード・コラソン・デ・ヘス小学校/青年海外協力隊 (青少年活動) 活動
- 16 ● ⑩カアグアス市職業訓練高校/青年海外協力隊 (野菜栽培) 活動
- 17 ● ⑪イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト、イグアスダム
- 17 ● ⑫イグアス日本人会、同診療所、移住資料館+懇親会
- 17 ● ⑬イグアス日本語学校
- 18 ● ⑭ホームステイ
- 19 ● ⑮東部地域・酪農振興のための農業研修拠点の形成と人材育成支援プロジェクト、近隣酪農家
- 19 ● ⑯イグアス市農協、地方のスーパーマーケット
- 20 ● ⑰チャンドゥティ工房

- 20 ● ⑱ロマ・ピタ母子病院/青年海外協力隊 (看護師) 活動
- 20 ● ⑲JICA パラグアイ事務所報告会+懇親会
- 21 ● ⑳アスンシオン市内見学、教材収集
- 21 ● パラグアイでの食事

#### IV. 帰国後の報告

- 22 ● 現地研修報告書
- 22 ● 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度
- 23 ● 2. 柱 1 「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと
- 25 ● 3. 柱 2 「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと
- 26 ● 4. 柱 3 「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと
- 28 ● 国内研修・実践報告フォーラム 2019 での報告

#### V. 実践報告書

- 29 ● 実践報告書の内容一覧
- 30 ● 石田秀憲「『食』と『貿易』～私たちにできることはゴマんとある！～」
- 36 ● 伊藤聡子「『食』を通して考える世界とのつながり」
- 42 ● 加藤寿恵「開こう！世界へのとびら」
- 47 ● 川合孝弥「環境問題～私たちにできること～」
- 52 ● 梶山紗希「虹～無限の色でみんなスマイル～」
- 57 ● 高橋泉名「世界へ旅に出掛けよう」
- 63 ● 宮川勇作「世界授業『いいね！』っていいね！」
- 69 ● 村上偉代「『わたし』と『社会』はつながっている！」

#### VI. 研修全体のふりかえり・評価

- 75 ● 研修受講者のアンケート結果から
- 75 ● 1. 研修の満足度について
- 75 ● 2. 開発教育・国際理解教育の実践について
- 76 ● 3. 学習者のより良い変化について
- 77 ● 4. 研修内容への評価
- 79 ● 5. 教師海外研修全般を通してのより良くするための提案
- 80 ● 実践内容の評価
- 81 ● 1. 学びの3つの柱についての実践度
- 81 ● 2. 参加型、収集教材の活用の実践度





## ● 石田 秀憲



### 「全身が教材！」

グラウンドでの交流の時間、書く場所に困った！でも、みんなの背中を使えば机がなくても大丈夫！足りないものは、アイデアで補う！全てが教材になる！

### 「地球の反対側の朝」

ホームステイ先の朝、陽が昇ってすぐに撮影。日本の地球の裏側で迎える朝。時差はあるけれど、同じ太陽がこの場所も照らしている。同じ自然環境をシェアしている。つながりを感じた瞬間。

## ○ 伊藤 聡子



### 「生徒の想いがつまったキャベツ」

畑で育てている野菜のことを熱心に語ってくれたカアグアス市職業訓練高校のロメロ・オスカルさん。キャベツの切り口からは水分が溢れ出ていて、みずみずしさが体中に染み渡り、最高のおいしさ！！

### 「お気に入りの『自然』」

「パラグアイのいいところ」として子どもから大人までの誰もが挙げた『自然』。日本の桜に似ているパラグアイの国木「ラバーチョ」と盛んな農牧業。私たち人間は、すべての命と共生していることに気付かされた。

## ● 加藤 寿恵



### 「カテウラの未来」

カテウラ地区の小学校の校長先生、NGO 団体 Juvensur を立ち上げたカテウラ地区出身の青年達、ミタイ・ミタクニヤ子ども基金の齋藤さんとの集合写真。カテウラ地区の子ども達のために活動されている思いに感動した。



### 「マンディオカの収穫」

ホームステイ先の畑でマンディオカ(タロイモ)の収穫体験をさせてもらったときの1枚。芋を収穫し、枝を土に埋め込むと、また芋が育ち収穫することができる。マンディオカは、ゆでたり、揚げてチップスにしたりシンプルな調理方法で芋のうまみを味わえる野菜です。



## ● 川合 孝弥



### 「ゴミ山」

パラグアイ中のゴミが集積されるカテウラ地区では、処分しきれないゴミが山積みになっており、そこで生活する人びとの生活は悲惨である。あの想像を絶するようなゴミ山とその上を舞う鳥の群れ、鼻を突き刺すような臭いはこの研修でもっともインパクトのあるものだった。



### 「第2の家族」

たった2日間のホームステイで本当の家族のように接してくれたことに感謝です。

## ○ 梶山 紗希



### 「つながれ！子どもたち」

日本の子どもたちからパラグアイの子どもたちへの質問を画用紙に書いて、返事をパラグアイの子どもたちに書いてもらった。言葉や場所は違うけど、自分の字で書いた思いはきっと互いに届くはず。



### 「言葉の壁を越えた思い」

スペイン語が理解できなさ過ぎて、壁を感じるとともにもどかしかったホームステイ。それでも、お別れに書いた拙い手紙で、言葉は合っていたか分からないけど、思いが伝わったことは確信できた。

## ● 高橋 泉名



### 「ペットボトルの蓋で作った教材」

◇サン・エンリケ・デ・オソ小学校では、教材や掲示物を教師が自作していた。必要なものがあたら、「買う」という生活をしてきた私は、物がなくてもあるのもで、「作る」という環境に出会い、私の価値観は揺さぶられた。



### 「日本の子どもとの共通点」

研修中、子どもたちと一緒にサッカーや、長縄跳びなどで交流をした。始めは、お互いが緊張していたが、体を動かすとすぐに打ち解けることができた。言葉が通じなくても、体を動かすことで心が通じ合えた瞬間であった。



● 宮川 勇作



「子ども達の笑顔と絆」

日本からの贈り物としてクラス全員で本のしおりを作り、現地でプレゼントした。キラキラした笑顔で嬉しそうにとるサン・エンリケ・デ・オソ小学校の子ども達。日本とパラグアイ。国を超えて子ども達の絆が結ばれた瞬間であった。



「美しい景色とこれからの課題」

ランパレの丘から一望できる緑豊かなパラグアイの景色。街は鮮やかなピンク色のラパーチョで溢れている。その中にあるカテウラ地区は、私たちにこれからの課題を投げかけているように見えた。

○ 村上 偉代



「日本語学校の高校生」

自由さの中にも、軸がしっかりとある子たちだった。「日本の少子化と待機児童の問題って矛盾してない？」と、地球の裏側から日本社会に鋭く切り込む彼らと、もっと話していたかった。



「合奏は練習所の軒下で」

建物の軒下で、情熱あふれる指導のもと合奏が進められる。日光が当たろうとも集中力を失うことなく一音一音に魂を込める彼らの姿には、凜としたオーラがあった。いつかまた、彼らの音に会いに行きたい。



集合写真



上: 青年海外協力隊員とのワークショップ、その後の懇親会



中: サン・エンリケ・デ・オソ小学校

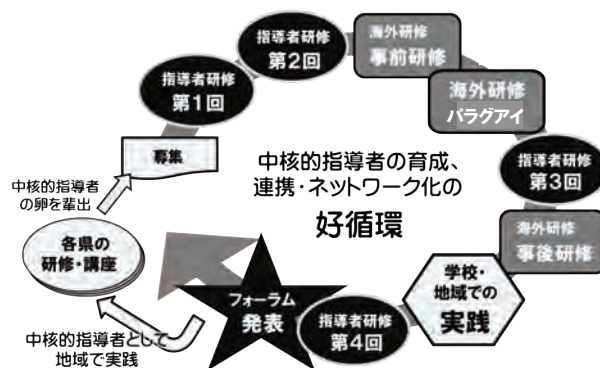


下: カアグアス市職業訓練高校

# 1. 教師海外研修の概要

## ● 目的とねらい

開発教育に熱心に取り組んでいる小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等の教師（以下「教師」という。）を対象に、指導者研修等の国内研修および JICA が支援している国への教師海外研修を有機的に組み合わせた上で実施し、各国の置かれている現状と日本との関係（国際協力を含む）への理解を深め、その成果を、次代を担う生徒の教育に役立てて頂くこと、また、研修参加後、JICA 国内機関と協力し、教育現場で開発教育を推進する中核となるような人材を育成することを本事業の目的としている。



この事業の目的を踏まえた教師海外研修の目的を次のとおり設定している。

海外研修のテーマを「持続可能な開発」とし、教師の皆さんが、パラグアイの暮らしや社会、JICA の協力活動等の体感を通じて、人類の多様性、心の同一性、問題点、課題を解決するために必要なことなどを調べ考え、その経験を共通の教材にし、日本の児童・生徒への開発教育・国際理解教育に活かしてもらうことを目的とする。

### パラグアイ現地研修の学びの視点

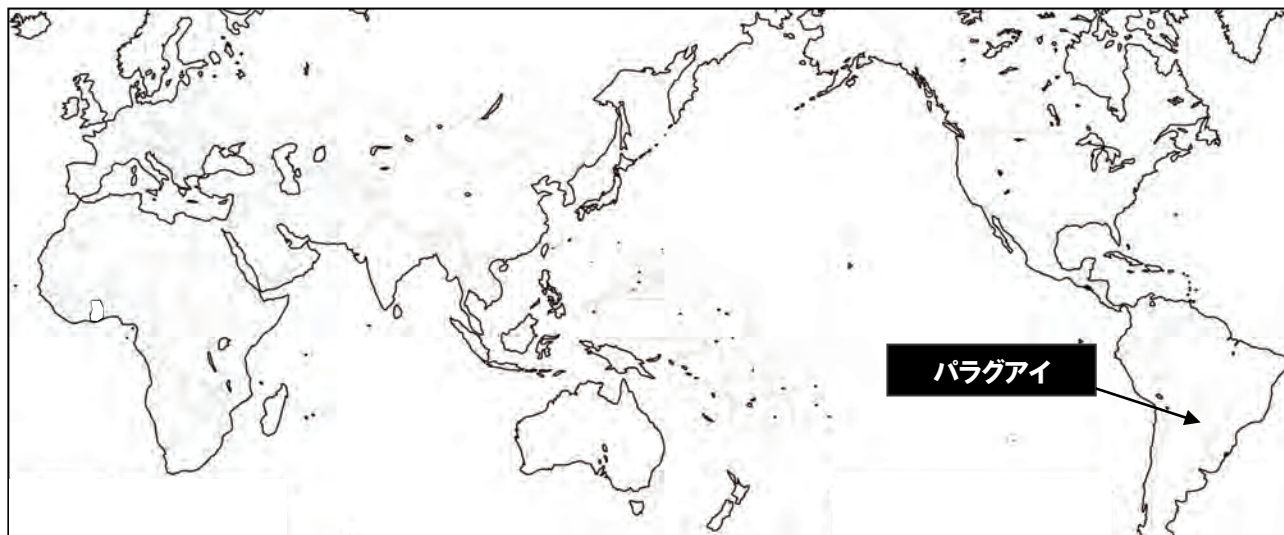
1. 訪問国に肯定的に出会う	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 世界の多様性を知り、多様な人やものと出会うこと・交流することの楽しさを伝える。</li> <li>◇ 多角的に肯定的に相手国と出会い、人の顔が見え、つながりを感じられるようになる。</li> </ul>
2. 日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 地球規模で進むグローバル化の恩恵と課題を理解し、日本とパラグアイとのつながりに気づき、つながりを築く。</li> <li>◇ 国や人の多様性だけではなく、共通するものがあること（同一性）を理解する。</li> </ul>
3. 共に考え・共に越える共通の課題の解決をめざす	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 相手を知ることで自国（自分）をふりかえり、互いの誇りや課題を確認する。</li> <li>◇ 共に学びあい、知り、考え、気づき、よりよい未来を共に築く入り口を提供する。</li> </ul>



## ● 訪問国と訪問先

### (1) 訪問国

本年度の訪問国はパラグアイ 1 カ国である。



### (2) 現地研修における訪問先

現地研修における現地スケジュールと訪問主要都市地図を P.3~4 に示した。

訪問先の選定にあたっては、JICA、運営委託先である NIED・国際理解教育センター、現地研修同行ファシリテーターを交えて検討を行った。

手順としては、現地研修の学びの視点を満たす主要テーマを設定し、各国の概要、過年度の研修の訪問実績および現在の JICA の活動を踏まえ、在外事務所と調整しながら、最終的な主要テーマを下表のとおり設定し、それに沿った訪問先に決定した。

学びの視点ごとの主要テーマ

学びの視点	主要テーマ
1. 訪問国に肯定的に出会う 2. 日本と訪問国の同一性に気づく	A 衣食住 B 衣食住以外の暮らし・分科 C 人々の気持ちや考え D 学校・子どもの生活
2. 日本と訪問国とのつながりを理解する	E 日本とのつながり（貿易など） F 日本とのつながり（移民、JICA の協力）
3. 共通の課題について共に考え・共に越える	G 教育・職業訓練（格差是正の一手段） H 格差是正（社会サービス・基盤の充実、貧困層の生活向上）・持続的経済開発

## 現地研修の訪問スケジュール

期日	訪問先	研修場所
7/28 (土)	15:30 名古屋駅太閤通口発 (連絡バスEK7031/3h20m) →18:50 関西国際空港着 (乗継4h55m) -23:45発- (EK317/10h05m) →	機内
29 (日)	04:50 ドバイ着(乗継3h10m) -08:00発- (EK261/14h55m) → 15:55 サンパウロ着(乗継6h05m) -22:00発-(G37642/2h10m) →23:10 アスンシオン着 →ホテル泊	機内 アスンシオン
30 (月)	① JICAパラグアイ事務所ブリーフィング+懇親会(当日夜) ② ニホンガッコウ(私立の幼稚園~大学)/青年海外協力隊(小学校教育)	アスンシオン
31 (火)	③ 小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクト+小規模農家の輸出 農作物安全性向上プロジェクト/アスンシオン国立大学UNA農学部 ④ 白沢商工株式会社(日系人ゴマ生産者) ⑤ JICAボランティアとのワークショップ&懇親会(レスリング、青少年活動、日系日本語教師)	アスンシオン
8/1 (水)	⑥ サン・エンリケ・デ・オソ小学校/青年海外協力隊(小学校教育) ⑦ カテウラ地区、サンタ・ロサ・デ・リマ小学校 /ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金活動×Juvensur ⑧ カテウラ音楽団 ・陸路(アスンシオン→イタウグア 1.5h)	アスンシオン
2 (木)	・陸路(イタウグア→カアグアス 3h) ⑨ サグラード・コラソン・デ・ヘスス小学校/青年海外協力隊(青少年活動)活動 ⑩ カアグアス市職業訓練高校/青年海外協力隊(野菜栽培)活動 ★中間ふりかえりミーティング	カアグアス
3 (金)	・陸路(カアグアス→イグアス 2h) ⑪ イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト/イグアスタム ⑫ イグアス日本人会、同診療所・移住資料館+懇親会	イグアス
4 (土)	⑬ イグアス日本語学校 ⑭ パラグアイ人宅でのホームステイ 12:00~	イグアス
5 (日)	⑭ パラグアイ人宅でのホームステイ ~13:30 ★ホームステイや全体ふりかえり@福岡旅館	イグアス
6 (月)	⑮ 東部地域・酪農振興のための農業研修拠点の形成と人材育成支援プロジェクト /セタパール財団・近隣酪農家 ⑯ イグアス市農協、移動途中の地方のスーパーマーケット ・陸路(イグアス→カアグアス 2h)	イグアス ↓ カアグアス
7 (火)	・陸路(カアグアス→イタアグア 3h) ⑰ ニヤンドウティ工房+お土産物屋 ・陸路(イタアグア→アスンシオン 1.5h) ⑱ ロマ・ピタ母子病院/青年海外協力隊(看護師) ⑲ JICAパラグアイ事務所報告会+懇親会	イタアグア ↓ アスンシオン
8 (水)	⑳ アスンシオン市内見学・教材収集(コロン通り、文房具屋、ランパレの丘など) 17:11アスンシオン発-(LA1301/2h14m)→20:25サンパウロ着(乗継2h05m)-	アスンシオン
9 (木)	01:25サンパウロ発-(EK262/14h30m)→ 22:55 ドバイ着(乗継4h45m)-	機内、空港内
10 (金)	03:40ドバイ発-(EK316/9h10)→17:50 関西国際空港着(乗継1h40m)-19:30発- (連絡バスEK7032/3h20m) →22:50名古屋駅太閤通口着(解散)	機内

現地研修の訪問先主要都市



Map No. 3760 Rev.3 UNITED NATIONS  
June 2004

Department of Peacekeeping Operations  
Cartographic Section

※ 地図出典：UN(国際連合)ウェブサイト内 <http://www.un.org/Depts/Cartographic/map/profile/paraguay.pdf>

## ● 研修の受講者

### (1) 受講者

同行者を除く 8 名の研修受講者の属性及び同行者を含む名簿は以下のとおりである。

性別：女性 5 名、男性 3 名
年代：20 代 5 名、30 代 3 名
地域：愛知 7 名、三重 1 名
校種：小学校 4 名、中学校 1 名、高等学校 3 名

### 教師海外研修受講者および同行者名簿

五十音順

No.	名前	所属先・教科・学年	県名
1	いしだひでのり 石田秀憲	愛知県立松蔭高等学校 英語 1年	愛知県
2	いとうさとこ 伊藤聡子	大治町立大治中学校 保健体育 2年	愛知県
3	かとうとしえ 加藤寿恵	蟹江町立蟹江小学校 全教科 6年	愛知県
4	かわいたかや 川合孝弥	愛知県立常滑高等学校 外国語 2年	愛知県
5	すぎやまさき 梶山紗希	海津市立下多度小学校 全教科 5年	三重県
6	たかはしいずな 高橋泉名	名古屋市立滝川小学校 全教科 5年	愛知県
7	みやがわゆうさく 宮川勇作	津島市立東小学校 全教科 1年	愛知県
8	むらかみいよ 村上偉代	愛知県立瀬戸北総合高等学校 理科 3年	愛知県
9	ほりかわえみ 堀川絵美	N I E D ・ 国際理解教育センター 同行ファシリテーター	愛知県

### (2) 応募資格等

【応募資格】 次の要件をすべて満たす方

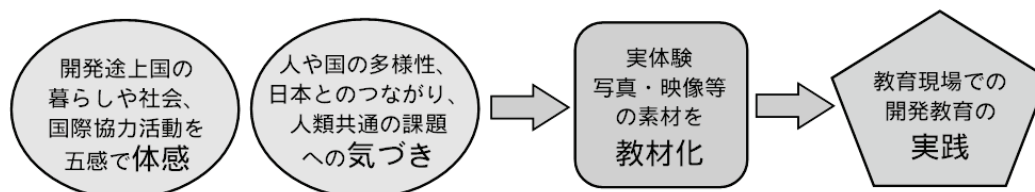
- ① 応募および研修受講時点で愛知県、岐阜県、三重県、静岡県の国公立、私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（児童・生徒に開発教育・国際理解教育を継続的に実践できる立場にある教員）で、所属する学校の校長の推薦があること。
- ② 原則、JICA が実施している教師海外研修、ボランティア、専門家、国際協力レポーター（ODA 民間モニター）等 JICA から海外に派遣された経験がないこと。

【参加条件】 次の条件を満たす方

- ① 教師海外研修の趣旨・目的を十分理解し、同研修の実施および以後 JICA が実施する開発教育支援事業に協力可能であること。
- ② 2018 年度中に授業やクラブ活動で、教師海外研修の経験を活かした開発教育・国際理解教育を実践できること。
- ③ 国内で実施される研修・説明会および現地研修の全行程に参加可能であること。
- ④ 派遣国の事情（道路状況や衛生環境等）を勘案した上で、全研修行程に参加するに耐えうる健康状態であること。
- ⑤ 帰国後、所属長の承認を得たうえで、1) 海外研修に関する報告書を提出すること、2) 所属校における授業実践内容についての実践報告書を提出すること、3) 実践報告フォーラムで実践内容を発表すること、4) これら提出物を報告書冊子や JICA ウェブサイトなどで一般公開されることに同意すること。
- ⑥ 本研修に関わる連絡・情報共有のため、Eメールでの連絡が可能な方。
- ⑦ 受講者・スタッフ間のメーリングリストなどでの情報共有に賛同いただけること。

## ● 研修全体のスケジュール

教師海外研修の各研修等は、以下のような年間を通した日程で行った。



回	日時	内容
事前研修	6月30日(土) 11:00~17:00 7月1日(日) 10:00~16:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>●本研修の概要、派遣国・訪問先の説明</li> <li>●海外渡航手続き、健康・安全管理等の留意事項の説明</li> <li>●研修目標の共有、情報収集・交流の準備、役割分担</li> </ul>
出発前説明会	7月27日(金) 13:00~18:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>●渡航の最終確認、チーム内の各種調整、結団式</li> <li>※ フライトによっては説明会后宿泊となる場合があります。</li> </ul>
パラグアイ 現地研修	7月28日(土)~8月10日(金) (14日間/現地10日間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●開発途上国の現場体験、教材の素材収集</li> <li>●気づきの共有、受講者同士の学び合い</li> </ul>
事後研修①	9月1日(土) 10:00~18:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>●現地研修の気づきや素材の教材化</li> <li>●上記教材を使った学習者主体の授業案の作成</li> </ul>
<p>9月~1月：各自、学校の授業などで実践！ 10月、12月の2日間(休日)：実践のフォローアップ(自由参加)</p>		
事後研修②	2月9日(土) 10:00~18:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実践の内容、成果と課題の共有</li> <li>●フォーラムでの報告の準備</li> </ul>
実践報告 フォーラム	2月10日(日) 10:00~17:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実践の報告(ポスターセッション)</li> <li>●有志チームによる開発教育体験ワークショップ</li> <li>●海外研修の報告</li> <li>●実践者つながりワークショップ</li> </ul>

※ 事後研修②と実践報告フォーラムは、開発教育指導者研修(実践編)受講者と共同で行った。

# ● 事前研修 6月30日(土) 11:00~17:00、7月1日(日) 10:00~16:00

## <ねらい>

- ◇ 教師海外研修の目的・内容を理解し、自分たちの言葉でミッションを立てる。
- ◇ 訪問国の JICA 事業および訪問先の詳細な情報を共有する。
- ◇ 海外研修の経験を授業につなげるための教材のテーマ、収集方法を検討する。
- ◇ 現地で行うチームの役割分担、役割係ごとの内容を検討する。
- ◇ 海外研修の準備・留意事項（フライト、持ち物、健康・安全対策など）を確認する。

## <プログラム>

### ■ 1日目：6月30日（土）

時刻	内容	講師等
11:00	1. 開会 (5分) (1) あいさつ、スタッフ紹介 (同行者の役割) (2) 事前研修のねらいとプログラム	JICA 木村 NIED 川合
11:05	2. 教師海外研修の目的・内容 (15分) (1) 研修の全体概要と受講者への期待	NIED 川合
11:20	3. 海外研修の訪問国・訪問先情報の共有 (40分) (1) パラグアイの概要、JICA 事業の枠組み・概要 (2) 現地行程 (案)・訪問での活動予定、自分の関心事メモ (3) 質疑応答	NIED 川合、堀川
12:00	休憩 (60分)	
13:00	4. 共通基盤づくり(50分) (1) お互いの思いを知り合う (2) 海外で学んでくる私たちが担うミッションとは?→教材チーム	NIED 堀川
13:50	5. 海外研修を生かした教材化の視点の確認 (30分) (1) 学習者の学びの3本柱とねらい (2) 教材づくりのポイントの説明	NIED 伊沢
14:20	6. 海外体験を授業につなげるための計画①/個人作業 (40分) (1) 私たちのミッションと「事前-現地-事後」研修のねらいの確認 (2) 自分の関心事×子どもたちと共に学びたいことの洗い出し (3) 学びの柱ごとの8つのテーマに分類	NIED 久世 堀川、伊沢
15:00	休憩 (15分)	
15:15	7. 海外体験を授業につなげるための計画②/チーム作業 (95分) (1) 教材チームの担当するテーマの決定 (2) 訪問先情報集の担当テーマ部分を分担読解・ネット検索・相談 (3) 個人洗い出し意見の確認とテーマ別教材収集シートの作成 ・ねらい/カテゴリー/収集内容/方法	NIED 久世 堀川、伊沢
16:50	8. 事務連絡 (10分) (1) 海外保険加入手続き (2) その他	JICA 木村 NIED 川合

■ 2日目：7月1日（日）

時刻	内容	講師等
10：00	9. 朝の体操(10分) (1) 自己紹介、アイスブレイキング	NIED 堀川
10：10	10. 海外体験を授業につなげるための計画③／チーム作業(80分) (1) 担当テーマの教材収集シートの作成（続き&重点化） (2) 教材収集シートの教材チーム内での共有 (3) 教材収集で事前準備や工夫が必要なものの検討・計画 (4) ここまでの成果の全体共有、提案会	NIED 久世 堀川、伊沢
11：30	途中お昼休憩（60分）	
12：30	(5) 提案を受けて、再検討(40分) (6) 教材収集の具体的準備	
13：10	11. 子どもたちとの交流&チームでの役割の検討（60分） (1) 子どもたちとの交流についての検討（出し物、グループ活動） (2) チームとして行う各活動の内容把握と役割分担	NIED 久世 堀川
14：10	休憩（15分）	
14：25	12. 参加の準備や注意事項（75分） (1) 海外研修中の留意事項（安全、健康、ルールなど） (2) 持ち物・準備事項、手荷物制限、その他留意事項 (3) 質疑応答	NIED 川合 JICA 木村
15：40	13. 最終調整、事務連絡（20分） (1) 連絡事項 (2) 全体を通しての質疑応答	NIED 川合 JICA 木村

資料 1：事前研修レジュメ

資料 3：JICA 事業の枠組み、パラグアイに対する協力概要

資料 5：訪問先等と活動予定

資料 7：学びの柱に沿った教材テーマ設定

資料 9：教材収集シート

資料 11：安全・健康などの留意事項

資料 13：旅行会社フライト関連資料

資料 2：パラグアイの基礎・生活情報集

資料 4：パラグアイ現地日程案・地図

資料 6：学習者の学びの柱・ねらいの解説

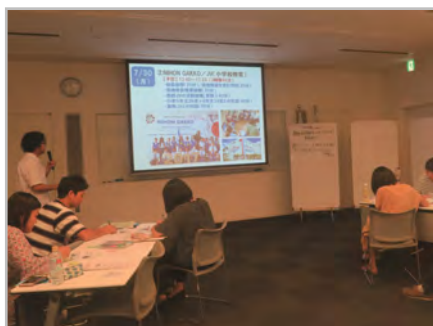
資料 8：パラグアイ訪問先資料集

資料 10：チーム内の係の説明

資料 12：持ち物・準備に関する資料集

資料 14：2017 年度教師海外研修報告書

<開催の様子>



▲研修の全体概要説明と受講者への期待



▲教材収集の具体的準備



▲学び合う仲間になろう！

## <成果物>

### ■ 海外で学んでくる私たちが担っている役割

1) こどもたちの思いを知り、伝える！	6) 人としてのスキルアップ↑↑
2) 「わたし」と「パラグアイ」、もうつながってるYO!!	7) 自分を教材に！
3) わたしたちができること→わたしたちがしたいこと	8) 国際理解教育の橋渡しを
4) 違いの良さを味わおう	9) 違いを愉しむ人の育成
5) ♡「幸せの形」♡	10) 周りを巻き込む

### ■ 学習者の学びの柱ごとに設定したテーマ

学習者の学びの柱	設定したテーマ	
1. 訪問国に肯定的に出会う (多様性と同一性)	A	衣食住
	B	衣食住以外の暮らし・文化
	C	人々の気持ちや考え
	D	学校・子どもの生活
2. 日本と訪問国とのつながりを 理解する	E	日本とのつながり(貿易など)
	F	日本とのつながり(移民・JICA)
3. 共通の課題について共に考え・ 共に越える	G	教育・職業訓練
	H	格差是正・持続的経済開発

### ■ 作成した教材収集シート例

#### ■ 教材収集シート

レインポー (たかや、いずな)

**B. 衣食住以外の暮らし・文化**

● **ねらい** … 子どもたちが、何に興味、どう感じ、考えられるようになるとよい？

自分の当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。[6]  
 多様な中にも人々の暮らしや感情・希望には多くの同一性があることに気付く。[5]  
 訪問国を身近に感じられるようになる。[4]  
 自分たちとは異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ！それもアリ！と思える。[4]  
 自分の中のステレオタイプ/思いこみに気付く。[3]

● **集める方法**…見る・聞く・味わう・におう・さわる～五感で学ぶ体験！

p 写真   m 動画   h 実物   i インタビュー   e アンケート   f 体感

● **具体的な収集物・情報** ※枠付きは重点項目

カテゴリー	収集内容	主な方法
生活	<input type="checkbox"/> 文化・習慣で日本と同じところ/違うところ <input type="checkbox"/> 文化を感じることでできる物を持ち帰る <input type="checkbox"/> 生活文化の良さ <input type="checkbox"/> 音楽 <input type="checkbox"/> スポーツ <input type="checkbox"/> 特に体を使う文化(ダンスなど) <input type="checkbox"/> パラグアイの独自のルールやマナーなど <input type="checkbox"/> 日本にもあるものを購入(服、食材、本、絵本) <input type="checkbox"/> 現地のもの購入→テレシ、ニャンドゥティ工芸品、技術支援で作られたもの <input type="checkbox"/> 家族団らんをどう過ごしている？ <input type="checkbox"/> 休日の過ごし方	p m h i f
生活の前後	<input type="checkbox"/> イグアス市農協・現地スーパー…価格、品数 <input type="checkbox"/> 文房具屋…どんな物が売られているか <input type="checkbox"/> どんなゴミが多い??	p m h i f
自然	<input type="checkbox"/> 自然…どういかにしている？ <input type="checkbox"/> パラグアイの人々の「自然」に対する考え方 <input type="checkbox"/> イグアスダム植林地で空気を感ずる、虫や鳥を見る	i f
製機・理由	<input type="checkbox"/> 工芸品…なぜ工芸品となったかの理由 <input type="checkbox"/> カテウツ音楽…楽器を作ることになったきっかけ <input type="checkbox"/> カテウラ…なぜ、そこにゴミがたまってしまったか	i
その他	<input type="checkbox"/> 医例 (p f) <input type="checkbox"/> パラグアイの税関 (p m i)	左記

● **日本でやっておこう！**

日本の伝統的な行事    日本の文化が感じられる物用意    日本のルールについて改めて考えてみる  
 子ども達にインタビュー…「幸せとは」「将来の夢」「大切なもの」「日本の文化といえは」「パラグアイといえは」  
 子どもの権利シートがあってね…日本の子ども達は自分の権利がどれだけ守られていると思っているかな？  
 パラグアイの気候(四季ってあるの?)



# ● 出発前説明会

7月 27日(金) 13:00~18:00

## <ねらい>

- ◇ 海外研修の最新情報について共有し、出し物・お土産・情報収集などの最終調整を行う。
- ◇ 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけを決め、結団し、出発する。

## <プログラム>

時刻	内容	講師等
13:00	1. 開会、ねらいと内容の説明 (5分)	JICA 木村、NIED 川合
13:05	2. 安全対策ビデオ視聴 (35分)	NIED 川合
13:40	3. 最新情報と確認事項 (60分) ・ マナビノオトの見方、使い方 ・ 海外研修行程の1日の流れ (訪問、ふりかえり) ・ デジカメの時刻設定統一 など	全体説明：NIED 川合 1日の流れ：NIED 堀川
14:40	4. 教材収集の確認 (30分) ・ 教材収集シートでの情報収集内容の確認・共有	進行：NIED 堀川
15:10	休憩 (15分)	
14:25	5. 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ ・ 仲間として/個人として (30分)	進行：NIED 堀川
14:55	5. チーム活動の準備・調整・練習 (65分) ・ 出し物の練習 ・ お土産の仕分け ・ 学校での活動の確認 (チーム別)	進行：NIED 堀川
17:00	7. 結団式 at カフェクロスロード (60分) ・ 主催者からエール→参加者からの抱負	進行：JICA 木村、課長挨拶

## <成果物> 「気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ」

- |                  |                  |               |
|------------------|------------------|---------------|
| ① 違和感も発見もみんなでも共有 | ④ Let's positive | ⑦ 何事にもチャレンジ!! |
| ② 素直でいよう♡        | ⑤ アグイジェ          | ⑧ 時間を伝え合おう    |
| ③ いつも笑顔で         | ⑥ 思いやろう!         |               |

## <開催の様子>



▲教材収集の確認



▲約束・心がけづくり



▲出発時の記念撮影

# ● 事後研修

9月1日(土)10:00~18:00

## <ねらい>

◇ 教師海外研修で学んだこと・得たことを基にした個人の授業実践プログラムを作成し、評価指標の活用、相互提案などを通してより実践的な内容に深める。

## <プログラム>

時刻	内容	講師等
10:00	1. 事後研修のねらいとスケジュールの確認 (10分)	JICA 木村 (挨拶)
10:10	2. アイスブレイキング (20分)	NIED 堀川
10:30	3. 授業実践プログラム作り① (ねらいの設定) (55分) (1) プログラムづくり・参加型手法レクチャー (2) 実践時間・対象に応じた「ねらい」の検討 (3) 全体発表・共有	NIED 堀川
11:25	4. 授業実践プログラム作り② (プログラムの試作) (35分) (1) ねらい・実践時間に沿ったプログラムの流れづくり (2) プログラムへのアクティビティの当てはめ、学習者への「問いかけ」の検討	NIED 堀川
12:00	休憩 (60分)	
13:00	2. アイスブレイキング (10分)	NIED 堀川
13:10	6. 指標による授業実践プログラムの相互提案 (30分) (1) 6つの指標による相互提案	NIED 堀川
13:40	7. 授業実践プログラム作り④ (最終まとめ) (60分) (1) プログラムの作成、個別相談 (2) 全体発表用模造紙への記入・プログラム完成	NIED 堀川、伊沢、久世
14:40	8. 授業実践プログラムの展覧会 (15分) (1) プログラム模造紙を壁に貼り、全体共有	NIED 堀川、伊沢、久世
14:55	9. 授業実践プログラムの発表&提案会① (35分) (1) 発表者：プレゼンテーション×4人 (5分) (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案 (3分)	NIED 堀川、伊沢、久世
15:30	休憩 (10分)	
15:40	10. 授業実践プログラムの発表&提案会② (35分) (1) 発表者：プレゼンテーション×4人 (5分) (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案 (3分)	NIED 堀川、伊沢、久世
16:15	休憩 (10分)	
16:25	11. 授業実践プログラム改善 (60分) (1) よかった点/提案をふまえてプログラムの改善、個別相談	NIED 堀川、伊沢、久世
17:25	12. 実践に向けての私宣言! & エール (10分)	NIED 堀川
17:35	13. 実践報告フォーラム 2019 での報告検討 (20分)	NIED 堀川
17:35	14. 事務連絡 (5分)	JICA 木村、NIED 川合

## ■ 授業実践プログラムの6つの評価指標

### ● 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

- 指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」学びがあるか。
- 指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」学びがあるか。
- 指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」学びがあるか。

### ● 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

- 指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。
- 指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。
- 指標⑥ 現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

## <成果物>

### ■ 授業実践プログラム例

テーマ ① 違いを楽しむことができるようになる。→視野を広げる  
② 自分たちが身近な生活で実行できることについて、

高橋 泉名

70分

世界を旅しよう! ~ 帰国後に感じたこと? ~

対象 小学校5年生 36名 1クラス 45分×8?9?

① 違いと面白い、知っていると嬉しい。② 自分たちができることを見つけ、行動できる。

起: 身近な人、遠くにいる人との違い、共通点を体感する。  
承: 面白く感じない、違いについて考える。  
転: 世界の課題から日本の課題を知る。  
結: 自分たちができること、しごとを考える。

1/9 ① 身近なところから、遠いところまで多面的に見てみよう! ~ 思い込みを気付け~

2/9 ② パラグアイに旅に出掛けよう

3/9 ③ 自分だけの、パラグアイのイメージの遠い共通点

4/9 ④ 他の国にも旅行に行こう

5/9 ⑤ 面白く感じない、違いについて

6/9 ⑥ 世界の問題から日本の課題をのぞいてみる?

7/9 ⑦ 人権、環境、食について

8/9 ⑧ できることって何だろう?

9/9 ⑨ 私たちにできることって何だろう? ~ 企画書をお家の人に提出しよう! ~

① アダルト大切なもの、ビンゴゲーム  
② 四つの隅ゲーム  
民芸品、写真、動画、国旗、民族衣装、音楽  
③ 他国の衣装、カクテル、自給自足、17アスレ  
④ (貿易ゲーム) 不平等? もしも流行り、香の車作り、天ぷらうどんから  
⑤ SDGsから考え、分類法  
⑥ 私、私、私、重なり、タビヤン

テーマ 『人権』(他者と関わり合う)

70分

虫工~無限の色でみんなスマイル~

ねらい1 パラグアイの文化や食を通じたつながりを知ること、世界の中の自分に気付く。  
ねらい2 他者と気持ちよく過ごすために自分ができることを考え、行動力をつける。

対象: 小学校5年生13名 所要時間: 45分×5時数

起: パラグアイの文化に再会し、日本と異なる良さや面白さを知る。  
承: 輸入品やその生産者を知り、自分と世界のつながりに気付く。  
転: 特定のグループに異なる背景をもつ人がきた場面を想定し、他者と関わり合う。必要なことに気付く。  
結: 他者と気持ちよく過ごすために自分ができることを考え、実行しようとする。

時間 アクティビティ・プログラム

第1回(外国語) <パラグアイの文化を知ろう>

第2回(学芸) <パラグアイのよき見つけ>

第3回(社会) <食べ物のルーツをたどろう>

第4回(道徳) <もしもこのクラスに○○が来たら?>

第5回(国語) <他者と気持ちよく過ごすためにできること>

参考教材 動画、写真、実物(BOX?)、アンケート結果、写真、実物、エピソードカード

## <開催の様子>



▲6つの指標による相互提案



▲作成したプログラムの発表



▲実践に向けての私宣言&エール

## III. 現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

なお、訪問先の番号は、4 ページの現地行程表の番号と一致させています。

[ 7/30 (月) ]

### ① JICA パラグアイ事務所ブリーフィング+懇親会

海外経験豊富な米崎所長、近藤次長、村上さんであるが、決して今までの経験からパラグアイという国やパラグアイ人を決めつけることなく、パラグアイをもっと知って、目の前の人たちと共に同じ目線で活動していきたいという熱意をもっていった。米崎所長の「国際協力を日本の文化に」という言葉が印象的であった。そのために、私たち教師がすべきこともたくさんある。子ども達の視野を広げ、国際協力とは何かを考えさせるため、教師が体験したことを子ども達だけでなく、親にも発信し理解を深めることが必要だと言われた。大石さんのブリーフィングは分かりやすく、かつ課題と現状について詳細に、資料以上の情報が伝わってきた。具体的にはパラグアイの基本情報や日本との関係、JICA が関わった各プロジェクトのねらいと成果、今後の課題などである。大石さんは「日本とパラグアイを繋ぐことが日系人としての私の使命だ」と言っていた。丁寧な説明の随所で、大石さんの想いが伝わってきた。(石田秀憲)



[ 7/30 (月) ]

### ② ニホンガッコウ (私立幼稚園～大学) / 青年海外協力隊 (小学校教育) 活動

最初の訪問先ということもあり、緊張していた私たちだったが、日本とパラグアイの国旗を持った子どもたちに歓迎され、すぐに気持ちがあほぐれた。まず、オルテガ校長から 25 年もの歴史あるニホンガッコウの概要を聞いた。日本で研修を受けたパラグアイの教員が、日本式の教育に感銘を受けたことから創設された私立学校である、学校に通う子どもたちの 95% 以上はパラグアイ人であるということに驚いた。小学生の算数の学力向上を目的に活動している青年海外協力隊の西野宏明さんからは、日本式の算数指導を現地の先生方に取り入れてもらうまでの苦労、子どもたちが黙々とプリント学習を行うことができるようになるまでの苦労などを聞くことができたとともに、西野さんの教育に対する熱意に感銘を受けた。訪問した日はパラグアイの「友情の日」であり、嬉しそうにプレゼント交換をする子どもたちの姿があった。私たちとの交流の時間に見せたパラグアイの子どもたちの笑顔と、日本の子どもたちの笑顔が重なった。(伊藤聡子)



[ 7/31 (火) ]

### ③ 小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクト、小規模農家の輸出農作物安全性向上プロジェクト / アスンシオン国立大学 UNA 農学部

日本は、ゴマをほぼ100%海外からの輸入に頼っている。その約30%がパラグアイからだ。アスンシオン大学では、リーデルさんと滝本専門家からプロジェクトが始まった経緯や内容を聞いた。このプロジェクトでは、種子の研究や商品化に向けて研究、残留農薬の研究に取り組んでいる。そして、ゴマを生産している小規模農家が自立し、貧困が改善されることを目指している。生産現場だけでなく、輸出まで見通した対応ができるように会議が行われているようだ。ゴマの生産に関わっている行政や業者、大学、そして滝本専門家で会議をすることで、お互いに意見交流し、問題を特定から解決に向けて取り組んでいるようだ。話を聞いて、普段食事をしていても食材がどのように日本まで届いているのか考えたことはなかった。しかし、現在、品質の整ったゴマを日本に届けられているのは、パラグアイ人の努力と海外でパラグアイ人と共に課題解決に向けて取り組む滝本専門家のような方のおかげであると痛感した。輸入する側だけの利益だけでなく、輸出する側にも利益がある両方のWin-Winな関係が不可欠であると痛感した。(加藤寿恵)



[ 7/31 (火) ]

#### ④ 白沢商工株式会社 (日系人ゴマ生産者)



白沢商工株式会社の社長が当時、非常に貧しい家庭にゴマの栽培を推奨し、はじめは少数の生産者しかいなかったが、徐々に噂が広まり、多くの人々がゴマ栽培を始めるようになった。それにより生活水準が高まり、病気になっても薬が買える等と生活が向上した。白沢社長との意見交換では白沢社長の生い立ちを聞いた。白沢社長は日本で生まれ育ったのだが、戦前に家族がブラジルにいたこともあり、子どもの頃から南米に憧れを抱いていた白沢社長と兄弟の南米に帰国したいという思いから、パラグアイに住むこととなった。白沢社長との意見交換で印象に残っているのは、「何十万人の貧困層が病気になったら薬が買える等といった、生活向上をすることが使命である」という言葉であった。人々を救いたいといった熱い思いが伝わってきた。また、現地の人々とゴマ栽培をするにあたっては、現地の目線に立って考えることが大切であるということであった。どんな活動においても、現地の人々が何を必要としているのかを感じ取り、協力していくことが大切だと思った。(川合孝弥)

[ 7/31 (火) ]

#### ⑤ JICA ボランティアとのワークショップ+懇親会 (レスリング、青少年活動、日系日本語教師)



ワークショップでは、日本の良さや課題、そしてパラグアイの良さや課題を青年海外協力隊の方と見つめた。私は特に「優しさ」についての捉えが深まり、とても興味深かった。例えば、日本の「礼儀正しい」「おもてなしの精神」は他者への優しさの表れと考えていたが、見栄を張っていたり他者の目を気にしすぎたりすることもあるのではないかと。また、パラグアイの「家族を大切に」「知り合いは家族同然に過ごせる」も、優しさというよりこれが当然のこととして生活しているのではないかと。もちろん全員が当てはまるわけではないが、「優しさ」1つとっても多様な優しさがあり、多様な価値観があることに気付かされた。私たちはまだ数日しかパラグアイのことを知らないが、パラグアイに滞在し、現地の方と仕事を

し生活する中で、多くの気づきや考えがあったことが分かった。奮闘しながらも任務の遂行に全力を注いでいる青年海外協力隊の方から、多くの刺激をもらった。(梶山紗希)

[ 8/1 (水) ]

## ⑥サン・エンリケ・デ・オソ小学校／青年海外協力隊（小学校教育）活動

サン・エンリケ・デ・オソ小学校では就学前教育から基礎教育課程1年生～9年生への授業を行っている。小学校に訪問すると、パラグアイならではの踊りや、歌などを披露し、私たちを歓迎してくれた。その後、子ども達と新聞ダンスやしっぽ取りをして交流をした。始めは緊張しているように見えた児童たちであったが、体を動かすことによってすぐに打ち解けられた。その点は日本と共通しているのではないだろうか。「教育が義務だからではなく、思いをもって子ども達と接しています」という校長先生の言葉が印象的である。その言葉の通り、子ども達の、先生を見る表情はとても柔らかく、先生方が普段から愛情深く子ども達と接していることが垣間見えた。教室に入ると、自作の教材が多数置いてあった。布やペットボトルの蓋など、身近にあるものを使った、子ども達の理解を助ける教材であった。ふと日本のことを考えてみる。最近は、百円ショップなど格安で物が手に入ることもあり、物が壊れればすぐに捨て、新しいものを安値で買う。物を大切にすることが薄れてはいないだろうか、と考えさせられた。(高橋泉名)



[ 8/1 (水) ]

## ⑦サンタ・ロサ・デ・リマ小学校、ミタイ・ミタクニヤ子ども基金、Juvensur（現地 NGO）／カテウラ地区

今回の研修で最も多くのことを考えさせられたカテウラ地区の訪問。パラグアイ中の大多数のゴミが運搬されてくるこの地区に住む家庭は、そのほとんどが埋立地からリサイクル品を採集して売買することで生活を営んでいる。Juvensur の青年は「この地域に住んでいたわたし達が、この地域に対して根付いている差別や偏見を無くすための働きかけをしていきたい」と力強く語っていた。鼻を刺すような匂いと居住区を取り巻くあの悲惨な光景は、実際に現地に足を運ばなければ知り得ないことであった。国際機関からも改善要求が出されているようだが、明らかに政治的解決が必要だと感じた。この居住区の片隅には、ここで暮らす子ども達が通うサンタ・ロサ・デ・リマ小学校がある。ミタイ・ミタクニヤ子ども基金は現在、この小学校に校庭を作るための活動をはじめ、たくさんさんの活動をされている。サンタ・ロサ・デ・リマ小学校の校長先生はご自身もこの居住区出身である。「子ども達には卒業したら少しでも偉くなってほしい。この学校に教師として戻ってくる子がいれば、本当に幸せである。」と語っていた。(宮川勇作)



写真提供：特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金

[ 8/1 (水) ]

## ⑧カテウラ音楽団

真剣に楽譜と向き合い合奏に臨むこどもたちの表情に、鳥肌が立った。ゴミ山に溢れる金属から作られたという楽器たちは、カテウラの人々の知恵と工夫が結集したものであり、人々の思いを紡ぐように優しい音を響かせていた。活動を始めた当初は、団員も少なく、こども同士で楽器を奪い合ったり、楽器で相手を叩いたり

してしまうこともあったそうだ。しかし年月が経ち、団員も大幅に増え（現在約400人）、活動の幅も広がり、集団の中で規範意識や責任感が身につき、リーダーシップを発揮できるこどもが増えてきたという。「音楽を通して彼らに『価値観』を伝えたい」というファビオ団長の信念は、確実にこどもたちの心に根付いていると感じた。訪問の最後に受講者8名で「上を向いて歩こう」（歌+リコーダー）を披露した。途中、弦楽器(アリア)のメンバーがアドリブで伴奏に参加してくれて、演奏を華やかに盛り上げてくれた。演奏後には盛大な拍手と歓声。音楽で心が通じ合ったと感じられた瞬間だった。（村上偉代）



[ 8/2 (木) ]

## ⑨ サグラード・コラソン・デ・ヘスス小学校／青年海外協力隊（青少年活動）活動

サグラード・コラソン・デ・ヘスス小学校はカナダのキリスト教団体が設立し、同団体からの支援で運営ができています。政府からの支援はほぼないそうである。運動場も整備されているわけではなく、サッカーボールも空気の抜けたペコペコの状態であったが、子ども達とサッカーをしたり、大縄跳びをしたりして楽しく交流することが出来た。校長先生自らサッカーに参加し、子ども達と一緒にボールを追う姿も印象的であった。環境に関係なく、私も児童・生徒と過ごす時間を大切にできる教師でありたいと思った。また、情報の授業も参観させてもらった。コンピュータは使用済みのもを寄付してもらった。コンピュータは使用済みのもを寄付してもらった。情報の時間と外で遊ぶ時間のどちらが好きか尋ねたところ、半分ずつくらいで手が上がったのも興味深かった。情報の授業には、大学生が「夢を育てるプロジェクト」の一環で、ボランティアとしてプログラミングの知識を教えに来ていた。（石田秀憲）



[ 8/2 (木) ]

## ⑩ カアグアス市職業訓練高校／青年海外協力隊（野菜栽培）活動

パラグアイに764校ある職業訓練校の一つで、8学科で構成され、約1,000名の生徒が在籍する中高一貫校である。私たちは、青年海外協力隊の太田至さんが行っている農牧科の野菜栽培の活動を見せてもらった。太田さんが赴任してきたころは雑草だらけの更地だった場所。そんな場所が想像できないほど立派な畑になっていた。スコップや鍬を使って畑の畝を作る姿、大きな袋をもって肥料を撒く姿など、生徒たちの姿を見ただけで野菜栽培に対する想いを感じ取ることができた。将来の夢は「農業エンジニア」「大学で農業の勉強をもっとしたい」「獣医師になりたい」と語るなど、彼らの眼差しはきらきらと輝いていた。派遣期間が残り2か月となった太田さんは、「生徒たちは自主的に活動することができているから安心して任せられる。後悔はない」と話していた。この活動を通して太田さんが生徒たちに伝えた想いを、今後はさらに後輩たちへと受け継いでいってほしいことを願う。（伊藤聡子）



[ 8/3 (金) ]

## ⑪ イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト、イグアスダム



電力公社「ANDE」の方々から、イグアス湖流域の環境保全の取り組みについての話を聞いた。ここでは、イグアス湖周辺の森林を保全するために、植林活動や教育関係者に対する技術移転を行っている。最終目標として、安定的に水を供給すること・持続的に電力を供給すること・森林保全をすることが挙げられていた。目標を達成するために特に印象的だったのは、子ども達への環境教育だ。「子ども達は、魚を見たら捕れる。森を見たら、狩りができるというイメージをもっている。」そうだ。目先のことだけを考えるのではなく、

持続可能な社会になるように、子どもの頃から学ぶことによって、波及効果が高いということに共感した。信念をもって、活動されている様子に心打たれた。イグアスダムは、あいにくの雨模様だった。ダムからは、勢いよく水が放水されていた。ダムの勢いとは対照的に、湖はとても静かだった。岩場には、鳥たちが羽を休めており、立ちこめる霧の織りなす風景はとても美しかった。この広大な自然がいつまでも続くように願うばかりである。(加藤寿恵)

[ 8/3 (金) ]

## ⑫ イグアス日本人会、同診療所、移住資料館＋懇親会



イグアス日本人会は日系の人の会費で診療所、日本語学校が運営されている。診療所の経営は非常に厳しいようだが、日系の方やその地域に住むパラグアイ人にとってはなくてはならないものである。また、日本語学校も教員のなり手がいない等の問題を抱えている。そのなかでも、イグアス日本人会が中心となってこのコミュニティを支えている。移住資料館では、移住の歴史を知ることができた。戦後、日本は国策としてパラグアイに多くの移民を送った。当時、パラグアイとしても労働力が欲しかったため、

移民の受け入れを行った。日本人の多くは異国の地で成功を収めるという大きな希望を抱いて、パラグアイに渡った。しかし、当時のパラグアイは木々で覆われており、開拓から始めなければならなかった。なかには、日本へ帰国する人もいたようだが、移民をした人たちは土地を開拓し、農業を始めた。いつかは日本に帰ると思っていたため、子どもへの日本語教育も大変熱心にする家庭が多かったようである。現在の日系3世、4世の世代とは日本語を勉強する意味合いが大きく異なっているようである。(川合孝弥)

[ 8/4 (土) ]

## ⑬ イグアス日本語学校

日本人移住地内にある日本語学校からは、日本語の挨拶が聞こえてきた。朝礼では君が代の斉唱があり、授業も基本的に日本語で進んでいた。授業では、辞書を片手に読み方や意味を調べる姿、原爆や移住の歴史の文章から日本語を学ぶ姿が多くあった。日本の文化や習慣も大切につつ、言葉を少しでも多く教えようとする姿勢が感じられた。子どもたちと話してみると、カレーライスが好きだったり家族のことを笑顔で話したりするところは日本人と通じるものを見つけた。しかし、友達同士で話すときにスペイン語の方が話しや





すい様子も見られた。現地教員との対話の中でも、家庭でのスペイン語の使用が多いことや、日系2世3世と世代が進むごとに日本語が薄れていくことに課題を感じているようで、日本と同じ国語の教科書を使っているが、「国語」ではなく「日本語」を教えているということが印象的だった。世代が進むことには逆らえないが、その中で少しでも日本人としての読み書きの力を付けようとするところに、考えさせられるものがあった。(相山紗希)

[ 8/4(土) ~ 8/5(日) ]

## ● ⑭ホームステイ

1泊2日のホームステイは、パラグアイの人々の大らかな優しさの源を知ることができた時間だった。わたしがお世話になったイリさん一家は、お父さんが獣医で、お母さんは音楽の元教師というご家庭であった。自宅の裏にはヤギやニワトリの小屋があり、さらに奥には畑があった。訪問直後に振る舞ってもらった昼食に鶏肉の煮込み料理があり「とてもおいしいです。」と頬張っていると、「この鶏肉は、庭で育てたニワトリの肉よ。」と教えてくれた。日本では、食品の半分以上を輸入に頼っているのに食べ残しや残飯が減らない。食べものはもともと生きていた命であることを再認識させられ、自らの価値観を揺さぶられた。夜は、マテ茶を飲みながら楽しく語り合い、日本から持っていった浴衣をお父さんに着てもらって、一緒に盆踊りを踊った。とてもゆったりとした笑いの絶えない贅沢な時間であった。帰国後もお母さんから「家族は元気にしている？」と連絡があり、一生の宝物のような出会いをさせてもらった気持ちになった。(宮川勇作)



一瞬一瞬がとても尊く感じた。見ず知らずの日本人をハグで迎えてくれた。お母さんは、「私がもう一人の母親よ」と歓迎する気持ちを、言葉にしてくれた。初めて会ったはずなのに、安心感に包まれた。受け入れてもらっていることを言葉や行動に起こして表現してもらえることは、こんなにも嬉しく、心豊かになるのだということを感じた。私がお世話になった家族は、朝、起きてきた人からリビングに集まり、マテを回す。何を話すわけでもなく、ただ同じ空間で同じ時を共有する。そうするうちに、お母さんが用意した朝ごはんができ、食べ終わったら、全員外のテラスに出て音楽を聴きながら、また同じ時を共有する。日本だと、何かしようとしてしまいがちな私にとって、こういった時間は新鮮であった。日本でも同じ形でなくとも、忙しさの中にほっとする時間を作りたい。また、ホームステイ先の家族が私に尊いと思える時間をくれたように、私も自分だけでなく、周りの人の時間も同じように尊いものであることを忘れずに生活していきたい。(高橋泉名)



ホストファミリーは、「あれこれやってみよう」という好奇心旺盛な私たちをとにかく温かく受け入れてくれた。連れて行ってもらった繁華街では車の往来にドギマギし、モンダウの滝ではその迫力に圧倒され、明け方の牧場では人生初の牛の乳搾りにはしゃいだ。牧場を駆け回る鶏たちを見て、前の晩の食事を思い出し、「ここにある命を戴いたのだ」と感謝の気持ちが湧いた。搾りたての牛乳は、今までの人生で一番美味だった。雄大な自然の中で「生かされている」ことを実感した。二日目は、留学するホストシスターの送別会。彼女の友人らとその家族が大集合していて、つながりを大事にする現地の人々の温かさを感じた。図らずして現

地の高校生と交流できる機会となり、日本の文化や学校の様子を紹介したり、夢や価値観について語り合ったりした。夢を語る高校生のエネルギッシュな様子に、活力をもらえた。ホームステイの最後は、集まった人みんなとハグをしてお別れ。無性に寂しくて泣けた。短い時間だったが、温かな雰囲気の中過ごせて本当に幸せだった。(村上偉代)



私は父親がパン屋さんで母親が校長先生という家庭にホームステイした。到着し父と話をしていると、早速テレレが始まった。スペイン語が全く分からず、ものすごく高い言葉の壁に一瞬でぶつかった。しかし、分からな過ぎてジェスチャーや指差し会話帳を駆使し何とか返事をしようとすることに楽しさを感じた。外国語の授業での子どもの気持ちを痛感するとともに、コミュニケーションについて考えさせられた瞬間だった。また、娘の15歳の盛大な誕生日パーティーの招待状を配りに回るのに同行し、訪問した

知人宅には、所狭しと鶏や鴨、豚がいた。全てが食用だと聞き、命をいただくということを感じた瞬間だった。お別れでは手紙を読むと家族が涙目になり、みんながハグしてくれた。1泊しかしていないのに、私まで涙が込み上げてきた。私たちを家族として迎え入れてくれたこと、何とか思いを伝え合おうとしたこと、一緒にご飯を食べたこと、全てに温かさを感じた。(相山紗希)

[ 8/6 (月) ]

## ⑮ 東部地域・酪農振興のための農業研修拠点の形成と人材育成支援プロジェクト、近隣酪農家／セタパール財団

セタパール財団では、草の根技術協力事業として、帯広畜産大学とともに東部地域・酪農振興のためのプロジェクトを行っている。このプロジェクトの目的は、農協技術者の酪農に関する専門能力の向上と適切な農家指導の実践・財団がアルトパナラ県の農業研修拠点として機能すること・農業大学対象の酪農研修の強化である。私たちは、このプロジェクトに携わっている小川専門家に話を聞いた。小川専門家は「ニーズに合わせる」「次につながる」ということを大切に、活動を行っていた。財団にあるデモ農場に、機械を導入したりすれば、もっと効率がよくなるかもしれない。しかし、そのようなことは、普通農家で行うのは難しいため、デモ農場で行っても意味をもたなくなってしまうのだ。あくまでも、普通農家のニーズにあった技術協力を目的としている。また、次に繋げるため、モデル農家への訪問は必ず酪農技術者を一緒に連れて行くそう。そうすることで、酪農技術者の技術が向上し、次の技術者の育成に繋がるのだ。「育てることの大切さが分かれば、食べるということが変わってくる」という小川専門家の言葉は、自分たちの食についても考えさせられた。(高橋泉名)



[ 8/6 (月) ]

## ⑯ イグアス市農協、地方のスーパーマーケット



イグアス市内のスーパーメルカドには、たくさんの品物が所狭しと並べられていた。日用品や食料品まであらゆる生活用品が一遍に揃いそうな品揃えであった。日系社会があるイグアスだからなのか、日本で売られているお菓子や即席商品など馴染み深いものも多かった。食料品は日本の業務用スーパーに近いものがあり、野菜や肉、米などは一つ一つのサイズがかなり大きかった。ペットボトル飲料

は1本5リットルのものもあり、その大きさに驚いた。パラグアイでは、特に週末になると自宅に多くの友人を招いて食事をするのが日常的である。そういった機会には、大きいものを買って用意しないとすぐになくなってしまふのだそうだ。地方の大型スーパーでは、会計途中の方がわたし達に話しかけてくれる一場面があった。驚いたのは、つい話に夢中になり、支払いをせずに話し込んでいたその方に、列に並んでいた周囲の人が誰も急かすようなことを言わず、むしろ微笑みながら一緒に聞いてくれていたことである。心にゆとりがある人達が多いパラグアイだからこそ垣間見られた一幕であった。(宮川勇作)

[ 8/7 (火) ]

## ⑰ニヤンドゥティ工房



伝統工芸が長く次の世代に伝承され続けるということは、単にその地域に技術が残るということだけではなく、そこに暮らす人々の思いが残っていくということなのかもしれない。ニヤンドゥティやアオポイなどに触れ、手に取ったり工芸体験を試みたりしたことで、その繊細さに圧倒され、守られてきた伝統の重みを実感した。驚いたのは、ニヤンドゥティには図柄が300種類以上あって、その1つ1つが、歴史の中で少しずつ編み出されてきたものだということ、そしてその技術が全て口承で残ってきたものということ。デザインのモチーフには小麦やかまどの形が使われていて、パラグアイの人々の家族愛や自然を愛する心が伝わってくる。日本にも様々な伝統工芸があるが、その多くは後継者問題などで途切れつつある。モノに溢れた社会の中で、人々の工芸品そのものへの関心が薄くなっているのも要因かなと思う。日々を丁寧に過ごしていくことが、ヒトやモノとの温かいつながりを思い出すための大切な手立てなのかもしれない。(村上偉代)

[ 8/7 (火) ]

## ⑱ロマ・ピタ母子病院／青年海外協力隊（看護師）活動

ロマ・ピタ病院の名前は母子病院であるが、実際は総合病院として機能していて、多くの患者が訪れる。数年前から診察室が足りなくなったため、敷地内には現在診察室として使われている中古のコンテナがいくつも立ち並んでいた。ロマ・ピタ病院は訪問介護を実施したり、高齢者の診察待ち時間が短くなるように、スマートフォンのアプリケーションを用いた予約システムを導入したりしていた。青年海外協力隊の塩川さんは常に患者の意思を尊重していて、その姿勢にも心を打たれた。患者が治療されることによって元気になる時だけでなく、望む最期を迎えられるように心がけていた。「高齢者は私たちよりも生活してきた時間が長いから、彼らの文化や生活習慣を尊重しながら接することが大切だ」と言っていたので、常に相手の視点で接していることが伝わってきた。日本にいても外国にいても、あるべき姿は変わらない。目の前の一人一人と丁寧に向き合っていくことが大切なのだと感じた。(石田秀憲)



[ 8/7 (火) ]

## ⑲JICA パラグアイ事務所報告会＋懇親会

JICA パラグアイ事務所の近藤信孝次長をはじめ、青年海外協力隊や専門家の方々、私たちを含め総勢30名での報告会と懇親会。まず、私たち受講者8名が「価値観を揺さぶられたもの」「今後、子どもたちにどう選

元していくか」についてのスピーチをした。それぞれの学んだことや感じたことを共有することで、より学びを深めることができた。何かを学ぶためには、五感で学ぶこと以上のものはないと改めて感じた2週間となった。懇親会では、アサードをはじめパラグアイ料理を食べながら、アルパの生演奏を聴いたり、パラグアイダンスを見たりするなど、お世話になった方々と充実した時間を過ごした。さらに、私たちもアルパの演奏やダンスをすることができ、パラグアイの文化も体感することができた。何よりも私たちの励みになったのは、みなさんからのエール。たくさんの方々からの言葉を胸に刻み、今後の実践に向けての決意を固めた会となった。この研修でお世話になった方々への感謝の気持ちを、日本の子どもたちへの実践という形で恩返ししていきたい。(伊藤聡子)



[ 8/8 (水) ]

## ● ⑳アスンシオン市内見学、教材収集／コロ南通り、文房具屋、ランバレの丘

ホテルの窓から外を眺めると、ところどころに高層ビルが建ち、ラパーチョ（日本の桜に似た花）がきれいに咲き誇っていた。至る所にラパーチョが咲いていて、それを見る度に元気になった。アスンシオンの町は、田舎にどこまでも広がる農地ののどかさ比べて、人の活気があった。コロ南通りには、マテ茶のポットを始めとして革細工やパラグアイの衣装であるアオポイ、シルバーのアクセサリーなど様々なお店が軒を連ねていた。どれを子ども達に見せたら、パラグアイでの経験が伝わるのかと考えながらお店を見ていると、とてもわくわくした。ランバレの丘からは、アスンシオン市内やカテウラを見渡せた。カテウラのゴミの埋め立て地周辺には、街中に咲き誇っていたラパーチョは、あまり見当たらなかった。カテウラを眺めながら、目の前の課題に目をそらさず取り組もうとこれからの決意をした。(加藤寿恵)



[ 全般 ]

## ● ㉑パラグアイでの食事

パラグアイの食事での第一印象は、肉文化であるということである。アサードはパラグアイの代表的な食事の一つであり、パラグアイの家庭では週末に食べられることが多いようである。実際に、本研修でもアサードを食べる機会が多く、レストランではさまざまな部位を味わうことができた。また、ホームステイでもアサードを作り、家族で食べた。アサード以外にもミラネッサ、ソパ・パラグアージャ、マンジョーカ、チパ、エンパナーダ等とさまざまな食事がある。一般的には、朝晩は軽く済ませ、昼にしっかりと食べる家庭が多いようである。日本食に比べると油をよく使うせいか、胃もたれをすることもあった。飲み物では、マテ茶はパラグアイでは欠かせないものである。どの人も水またはお湯の入ったポットのようなものと、マテ茶の茶葉の入ったコップを持っている。街中では、薬草をすり潰したものがよく売られていた。肉文化であるということもあり、このマテ茶がよく飲まれるようだ。(川合孝弥)



# IV. 帰国後の報告

## ● 現地研修報告書

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

### 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

#### ● 石田 秀憲

近年、私たち日本人の日常生活において、外国との関係は至る所に存在している。食べ物は外国から輸入されているものが多く、服や電子機器なども海外で生産されているものが多い。しかし、普段の私はそこまで外国とのつながりを意識して生活しておらず、生徒にも日本と外国とのつながりを感じさせるような指導ができていない。生徒たちが外国へ行く機会だけでなく、日本で生活をしていても外国の方と接する機会があるはずである。日頃から日本と外国のつながりを意識できる大人、そして海外で起こっている問題も他人事ではなく、自分にも関係のある問題だと考え行動できる大人を育成していきたい。この研修で感じたことを授業実践で活かし、英語教師としてだけでなく、生徒にとっての身近な大人としてロールモデルに近づきたい。その目的を達成するために、授業実践の構想も意識して研修に参加することができていたので、現時点では目標点に達している研修だといえる。

#### ● 伊藤 聡子

地球の未来を担う子どもたちを育てるために、教育者のひとりとして何ができるのだろうか。まずは、私自身が視野を広げること。ひとりの人間として、そして教育者として、ひと回りもふた回りも成長したいという思いをもって臨んだ研修であった。本研修では、パラグアイの歴史や自然、日本とパラグアイとのつながり、国際協力をしている人々の想いなど、さまざまなことを五感で体感することができた。さらに、日本文化の魅力、日本人としての誇りをパラグアイで暮らしている人々から学んだ。そして、日本人だから…パラグアイ人だから…ではなく、ひとつしかない地球で暮らす仲間として、世界共通の課題に向かって共に解決していかなければいけないことを再認識した。また、本研修を共にした仲間からは、さまざまな角度から物事を捉えることの大切さを学ぶことができた。これらの学びは、私の一生の財産となった。本研修で学んだことを周りに広め、教育を通して持続可能な社会を築いていく人を育てていきたい。

#### ● 加藤 寿恵

本研修に参加するにあたって、「共生」という視点で現地の状況を視察したいという思いがあった。特にパラグアイでは、日系移民を多く受け入れているという歴史的な背景から日系人がどんな思いで暮らしているのか関心があった。現地で起業している白沢社長や日本人会の方々から、実際に話を聞くことができた。「パラグアイ人の生活を良くしたい」や「私た

ちを受け入れてくれたパラグアイ人に感謝している」という話が特に印象的であった。パラグアイのことを愛し、敬い、そして使命感をもって過ごしているという熱い思いに感動した。そして、パラグアイ人と良好な関係を築いていくために大切なことを聞くと「パラグアイ人の目線に立って伝えること、相手のことを知ること」と話していた。同じ目線に立ち、相手の立場に立って考えることで、互いに歩み寄り、良好な関係を築くことができたのではないかと感じた。人種や国籍などに関係なく、「人として」関わり合うこと、これは学校教育でも同様に大切だと思う。このような日系人の思いも織り交ぜながら授業実践に取り組んでいきたい。

#### ● 川合 孝弥

本研修への参加の目的は大きく二つあった。開発教育・国際理解教育への理解を深めることと、実際にパラグアイを訪れ、自らが目で見て、感じたことを生徒たちに伝えることによって、還元していくことである。現地研修では、一つの途上国の教育、農業、環境、日系社会、医療の視察をしたり、そこで活躍している青年海外協力隊の方や日本人の方と意見交換したりした。青年海外協力隊の方の活動を通して、国際理解とは何なのか、自らに問いかけ、考えることができた。そして、理解を深めることができた。また、さまざまな分野の現場を視察することができ、専門科目の授業のみならず、進路等の総合的な学習の時間や部活動でも授業実践ができると考えている。生徒たちが興味関心を持ってもらえるような、きっかけを作ったり、進路実現に役立てたりすることができるよう授業を実践していく。

#### ● 梶山 紗希

私の現地研修での目的は、学校や子どもたちに還元する内容をたくさん持ち帰ることだった。出発前は、帰国後に何をアウトプットできるのか自分に必要以上にプレッシャーをかけ、楽しみな反面不安がものすごく大きかった。しかし、現地研修は分刻みでたくさんのスケジュールがあり、その分、単に学ぶことが多いだけでなく多様であり、より多くの分野について学べた。だから、当初抱いていた不安とは裏腹に、学ぶことが多すぎて「何を」ではなく「どのように」アウトプットするかに視点を移せたことは、私にとって大きな成果であった。また、訪問先での学びももちろんあるが、移動中や途中のワークショップでの仲間の発言が私に新しい気づきや視点を与えたことも多くあり、とても有意義だった。そのため、目的の達成度は予想以上の学びがあり100%を大きく超えていると感じている。ただし、どのようにアウトプットしていくのかまだまだ工夫を凝らす必要がある。今後の研修

をもとに学んだ情報を整理し、授業実践に生かしていきたい。

### ● 高橋 泉名

本研修に参加した理由は2つある。一つ目は、自分自身が見て感じ、子どもたちが他国を五感で感じることでできる生きた教材を持ち帰りたいと思ったからである。二つ目は、教師として視野を広げ、新しい価値観をもって子ども達と関わりをもちたいと思ったからだ。五感を使ってパラグアイを感じたことで、インターネットからでは分からないことをたくさん得ることができた。日本が何故海外支援をしているのか、現地ではどのような教育が行われているのか、パラグアイの人はどのような生活を送っているのか、なぜ日本からの移民がたくさんいるのかなど、多くの人と出会うなかで生の声から学ぶことができた。知識だけでなく、そこに住む人々の気持ちを知ることができたことは、とても貴重な体験となった。また、多くの出会いは私を教師としてだけでなく、人としても成長させてくれた。

### ● 宮川 勇作

私は、今回の研修が人生初の海外渡航だった。これまでは、「日本人らしさ」といっても、周囲から聞く話やメディアなどの情報を介して受け取ることが全てで、自分自身の体験からそれを感じたことがなかった。一教育者として、今後、目の前の子ども達を国際的な視野を持つひとりひとりに育てていきたいという観点から、この研修で学ぶことを子ども達に還元することができたら、これ以上ない喜びであると感じていた。実際に本研修に参加することで、一言では言い表すことができないぐらいのとても大きな学びを得た。異国の文化や習慣、国民性やさまざまな環境、懸念されるたくさんの課題。そのどれもが先進国の日本に住む私にとって、非常にインパクトのあるものだったが、一番感銘を受けたのは、現地に生きる人々の寛容的でらかな人格、そして、「教育」に対する甚深たる思いである。その一端を担う教育者として、本研修にてまさに「五感で得たこと」を子ども達や同僚、周囲の人達に伝え抜いていきたい。

### ● 村上 偉代

現地の文化や人々の暮らしに触れて、仲間とともにさらに学びを深めたい。そして「幸せとは何か」を、子どもたちと一緒に考えていきたい。申込当初の私の思いである。日々子どもたちと接していて感じる彼らの生きづらさ、幸せの感じにくさの背景は、どのようなところにあるのか。海外研修を通して、新たな視点を得ることができればと考えていた。参加してみても達成度は、100%と表すにはあまりにも少な過ぎる。多くの訪問先で出会う、使命感に燃えて活動される方々、子どもたちの屈託無い笑顔と澄んだ瞳。現地研修を通して、ともに学んだ仲間たちはかけがえのない存在となり、語り尽くせないほどの貴重な経験ができた。生物の教員である私にとって、ゴマの品種改良や酪農、植林活動の現場を訪問できたことも有難かった。家族を愛し、友達を愛し、すべての命に感謝して生きるパラグアイの人々の表情を、日本の子どもたちに伝え共有し、「幸せとは何か」を考える活動につなげたいと考えている。

## 2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



### ● 石田 秀憲

「訪問国に肯定的に出会う」ということを出発前から随分と意識してきた。生徒たちにも国際理解教育をする上で、この態度を伝えていきたい。しかし、滞在中に各訪問地へ行くにつれ、意識する必要がなくなっていった。なぜなら、訪問先の現地の方々が私たちの訪問を温かく迎えてくれたからである。人と肯定的に出会うには、訪問する側だけでなく、出迎える側の態度も重要な要素であると感じかされた。私は普段の生活の中で、現地の方々のような温かな対応を、職場や家などの訪問者にしているだろうか考えるきっかけになった。「国と肯定的に出会う」ということは、非常に基本的な部分では「その国の人たちと肯定的に出会う」ことなのだと思った。国際問題や各国の抱える問題に目を向け、知識を深めることも重要であるが、その知識によって偏見や疑いをもって接するのではなく、目の前の一人一人を温かく受け入れられる人でありたい。また、生徒たちにはそのような大人になってもらいたい。

### ● 伊藤 聡子

「ここがあなたたちの家だと思って、いつでも帰ってきてください」どこの訪問先でも言われた言葉。「あなたは私の娘だよ」ホームステイ先で言われた言葉。「パラグアイに一人の友達がいることを忘れないで」私たちを各訪問先まで送ってくれた運転手さんの言葉。全く知らない人同士がすれ違っただけでも笑顔で「オラ！」。パラグアイの人々は、行く先々で私たちを歓迎してくれた。そして、私たちのことを肯定的に受け入れてくれた。パラグアイの人々のあたたかさや寛容さを肌で感じたことで、短い滞在期間ではあったがパラグアイのことが好きになり、「また来たい」という気持ちになった。パラグアイの人々は、出会いや人と人とのつながりを大切にしている。訪問国であるパラグアイやそこに住んでいる人々と肯定的に出会うことで、人と人とのつながりの大切さを実感することができた。本研修で出会った仲間、そして、いつも私を肯定的に受け入れてくれている家族や友達をこれからも大切にしていきたい。

### ● 加藤 寿恵

学校・企業・団体・病院などたくさんの場所を訪れた。訪問したり、ホームステイをしたりする中で、パラグアイ人の

人柄や生活を実感することができた。どの訪問先でも、「来てくれてありがとう」や「またいつでも来てね」など、とても暖かく迎え入れてもらった。初対面の相手に対して、誠意をもって迎え入れようという気持ちは、言葉の違いはあっても、表情や態度などからも伝わってきた。私は、パラグアイで外国人だからということ嫌な思いをすることが一度もなかった。それは、パラグアイで出会った人達が私たちのことを大らかに受け入れてくれたからなのではないかと思う。日本とは異なり、マテ茶を親しい人同士で回し飲みをする文化があった。はじめは、「同じコップで？」と驚いたが、人との関わりを大切にすることこそ、この文化が生まれたのではないかと思った。私自身がパラグアイに肯定的に出会った訳ではなく、パラグアイの方が肯定的に出会わせてくれた。

#### ● 川合 孝弥

私がパラグアイを訪問して最初に感じたことは、パラグアイの人たちが私たちをとて歓迎してくれ、日本人を尊敬しているということである。とりわけ、日本式教育を導入している学校や青年海外協力隊の方が活躍している学校では手厚いおもてなしを受けた。今思えば、訪問国に肯定的に出会うために、そのような行程になっていたのではないかと考えることもできるが、訪問国に肯定的に出会うということとはとても大切なことであると思った。なぜならば、ある国に対して否定的に出会ってしまうと、その国には否定的な先入観が生まれてしまうからである。また、肯定的に出会うことにより、その国の課題を目の当たりしたときにインパクトが強くなったり、その国の課題を解決したりするためにはどうすればよいのかを前向きに考えることができるようになる。さらに、自国の課題にも目を向け、客観的に考えることができる。

#### ● 梶山 紗希

私がパラグアイに対して肯定的に感じたことのうち、特にパラグアイで出会った人たちの温かさと日本の知名度は印象が大きかった。人々の温かさでは、あくまで10日間の中で出会った人たちについてしか言えないが、訪問先の人から「私たちはあなたたちの友達だよ。」「いつでもこちらに来てください。」と声をかけていただいた。また、私たちに対してだけでなく、パラグアイの人がレジでお金を払うのを忘れていても、後ろで並んでいる人やレジの人は温かく見守っていて苛立つ気配がなかった。心にゆとりがあり、初めて訪れた人をも受け入れる受容力があることを感じた。また日本の知名度では、日本ではパラグアイのことをあまり知らないのに、地球上で遠く離れた日本のことを知ってくれていることに感動した。しかも知っているだけでなく、日本人は時間を守る・きちんと仕事をする・正直など、良い印象をもっていた。国の歴史なども関わってくるのかもしれないが、他者を受け入れる・他者を知る気持ちは相手をこんなにも安心させることに気づけた。

#### ● 高橋 泉名

パラグアイという国は、自然が豊かで、街には多くの鳥が気持ちよさそうに飛んでいる。そんな自然で育っている牛や鶏などは瞳が美しく、とても健康的であるため、食事もおい

しい。一方で、教育を受けられる子どもが少ない、働き口が少ないといった課題もある。パラグアイの滞在はわずか10日程であったが、パラグアイの「人との出会いを大切にす文化」が素晴らしいと感じた。数時間しか関わりがなくても「またここに帰ってきてね」など温かい言葉もらった。近くのスーパーに出掛ければ、行く道で会う人に挨拶をしたり、何をしているのかを尋ねたりし、同じコミュニティと一緒に生活していることを実感でき安心感を得た。ふと日本での自分自身の行動を思い返してみた。最後に近所の人と話したのはいつだろう…。日本が、パラグアイが間違っている、正しいという判断をするのではなく、課題は課題として受け入れ、違いや共通点を「知りたい!」「面白い!」「取り入れたい!」と思うことができると、どの出会いも尊いものとなるだろうと感じた。

#### ● 宮川 勇作

日本には「一期一会」という言葉があるが、パラグアイに住む人々の振舞いはまさにその言葉を体現しているようであった。どの訪問先に行っても、私たちを心から歓迎してくれた。その表情は、まるで「肯定的に出会うこと」を意識している様子がなく、私たちを元からあった我が家に帰ってきたような姿勢で受け入れてくれているような印象であった。そこには、警戒心や疑念などはなく、とても温かな雰囲気と安心感があり、一瞬にしてパラグアイの心の豊かさに魅了された。それぞれの場所では、別れ際、必ず「いつでも戻ってきてください。あなた達の帰りを待っています。」と言ってくれる。国や人種を越えて、どんな人でも受け入れる心の大きさに感動して、何度も目を熱くした。パラグアイの人達のように、偏見や固定概念を抱くことなく、ひとつひとつの出会いに感謝することができれば、こんなにも相手の心を柔らかくすることができるのだと学んだ。

#### ● 村上 偉代

パラグアイに着いた瞬間から、現地の方々が私たちを肯定的に受け入れてくれていた。その雰囲気は社交辞令のような堅苦しいものではなく、心の底から安心できる優しく温かいものだった。道行く人が、ふと目が合った時に「¡Hola!」と声をかけてくれる。研修の行程でお世話になった方々が、「ここをあなた方の家だと思って」「パラグアイに友人が1人いると思って」「また帰っておいで」と優しい言葉をかけてくれる。言葉が音のシャワーになって、優しく心に染み込んできた。学校の子どもたちやカテウラ音楽団とのひとときでは、言葉を越えた心の交流ができたと感じた。同じ空間で遊んだり、優しい音のエネルギーを共有したりして、気づけば自然と笑顔になり心が喜びでいっぱいになった。相手を信頼し受け容れる気持ちで接すること、「大切だよ」という気持ちをありのまま言葉にすることの大切さを、パラグアイで教えてもらった。空気を読んで相手の心を「察する」ことも優しさの形かもしれないが、大切な人たちに素直に言葉を紡ぐこともこれから心がけたいと思っている。

### 3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



#### ● 石田 秀憲

日本とパラグアイのつながりを最も感じたのは、アスンシオン大学で小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクトと、小規模農家の輸出農作物安全性プロジェクトの説明を受けた時である。日本で食べる時、その存在すらあまり意識していなかったゴマだが、その一粒一粒に日本人の専門家、パラグアイの研究者と農業関係者の想いが詰まっていると気がついた。また、パラグアイには日本車が多く走っていて、日本で使われた車が中古車としてパラグアイでまだ動いている光景にも、日本とパラグアイの繋がりを感じた。「同一性を理解する」ということには直接繋がらないかもしれないが、子ども達の純粋な笑顔は日本もパラグアイも変わらないと感じた。子ども達の笑顔を守ることは、自然環境を守っていくことでもあり、彼らが大人になったときに、より良い社会や世界を自分達で築けるように、教育者として子ども達と真摯に関わっていくことでもある

#### ● 伊藤 聡子

日本から約 18,000 kmも離れたパラグアイ。こんなに離れた国で、日本という国や日本人を愛する心をもっている人がたくさんいるとは想像もしなかった。日本式の教育を取り入れ、日本の伝統文化を受け継いでいる学校があることに驚いた。日本へゴマを輸出することで、パラグアイの人々が貧困から抜け出し、生活を安定させることができることが分かった。さらに、ゴマの安全を守ることは、日本とパラグアイ国内の食の安全を守ることもつながるということも知った。学校を訪問した際に感じたことは、「育てたい子どもの姿は万国共通」ということである。カテウラ地区のサンタ・ロサ・デ・リマ小学校の校長先生から聞いた「自尊心を育てたい」という言葉。学ぶ環境は違っても、育てたい子どもの姿は同じである。私たちは同じ教育者として、自他ともに大切に子どもを育てていかなければならないと改めて思った。そして、何百年先も子どもたちのきらきらとした眼差しや笑顔が見られるような世界にしていきたい。

#### ● 加藤 寿恵

私は、人の感情は万国共通だと思う。人によって個人差はあるかもしれないが、嬉しいときや、楽しいときには自然に笑顔になることが多い。本研修で、たくさんの人の笑顔に出

会った。小学校でサッカーを楽しむ子ども達の笑顔。大縄が跳べたときの喜んだ笑顔。算数の問題で全問正解したときの達成感に満ちた笑顔。学校で見られた笑顔は、教育活動に関わっている教員だからこそ見ることができるとは思えないかと思つた。教科書を読んでやり方を教えられる一方的な教え込みの授業だけでは、子ども達は退屈をする。だからこそ「子ども達がわくわくする」、「なるほど！と納得する」、「この方法でやってみたらどうなるだろうと、試してみたいくなる」そんな授業づくりの工夫をしていきたいと思つた。学びを楽しみ、笑顔でいられる子どもを増やしていきたいと思つた。

#### ● 川合 孝弥

パラグアイに訪問する前は過去のサッカーワールドカップで日本が決勝トーナメントで対戦した相手というくらいイメージしかなかった。実際にパラグアイに訪問して同一性を感じたものとして、ゴマがある。日本人の食卓にはなくてはならないゴマはほとんどがパラグアイからの輸入であることを知った。また、日系人のゴマ生産者である、白沢商工株式会社は何十万人の現地の貧困層の人びとにゴマの栽培を勧め、生活向上の手助けをしていたり、ゴマの種子を改良したりする大学もある。このような同一性に気づくことによって、他国の存在がなければ、今の日本は存在しないということがわかった。パラグアイのみならず、多くの国からの輸入により、日本の食糧自給率を補っているのである。研修を通して、パラグアイの人と触れあうことで、訪問前とのイメージとは異なるところもある。例えば、パラグアイの人たちは非常に真面目で、勤勉で、少しシャイに思えることがあり、日本人の気質と似ているように感じた。

#### ● 梶山 紗希

つながりという観点では、アスンシオン国立大学でのゴマの貿易について印象に残った。貿易が世界をつないでいることは容易に想像できるが、安全管理の面で、実際に外国でできたものが自分の体の中に入ってくるということまで具体的に気づけていなかった。食料自給率が低い日本においては切っても切り離せない課題をいただいた。そして、実際の輸出入品目だけでなく、海外で働くことの意義の一つとして、日本の国益につながるからという要因が私にとっては新鮮だった。海外で働くことは、貧しい人たちのためとか、他国の発展のためとか、日本以外のためであり、郷土愛と国際理解は対照にあるように考えていたが、「日本の国益につながる」ということで両者が一致したように感じた。また、同一性という視点では、各学校関係の訪問先で教員からお話を伺ったときに、子どもに願うことが「自信をもって大人になってほしい」「価値観を学んでほしい」などという意見を聞いた。このような願いや思いには同一性があると感じた。

#### ● 高橋 泉名

小規模農家支援に携わっている滝本さんは「教育はお金より大事」だと言っていた。ゴマの栽培方法について教育を受けてゴマを作ることができるようになって、作ったゴマで稼いだお金の使い方を知らず貧困を生んでしまうことがある



そうだ。日本とパラグアイに共通することは、「教育は国を作る」ということだと思う。万国共通の考えなのかもしれない。カアグアス市職業訓練高校で青年海外協力隊の方から農業についての教育を受けている生徒に話を聞いた際「教えてもらったことがすぐに生きるのが楽しいです」と学ぶ楽しさを語ってくれた。また、酪農振興プロジェクトを進める小川さんは「技術者に教え込むのではなく、一緒に考えていくことで、意識が変わり自分から学ぶようになってほしい」と言っていた。自分自身を振り返ってみる。教え込むだけの授業になっていないだろうか。知識の習得だけでなく、その知識をどう生かしていくのかまで意識させることができているだろうか。課題が見えてきた。教員という仕事の責任の重さを改めて感じるとともに、そのような職業に出会えたことを誇りに感じた。

#### ● 宮川 勇作

訪問前にパラグアイのことを調べてみると、「地球の反対側のもう一つの日本」という言葉があった。現地ではその言葉通り、およそ日本の反対側とは思えないほど、「日本」を感じることが幾度となくあった。研修中に訪れたイグアスは、日本からの移民を受け入れた地域で、日系社会があり、イグアス日本語学校をはじめ、そこで働く人達は当たり前のように日本語を話す。イグアス日本人移住資料館には、日本人がパラグアイに移住した当時の歴史が所狭しと示されていて、芳名録を見るとたくさんの日本人が訪れていることが分かった。資料館の案内人である園田さんのお話は博学さとさまざまな感情が調和してとても引き込まれた。「パラグアイで生きる日本人のことを語り継いでいくのが、わたしの使命です。」と語り、心から感銘を受けた。また、教育環境が日本のように整っていないパラグアイでは、規律を重んじる日本式の教育法に非常に関心が高く、ニホンガッコウも設立されているほどである。

#### ● 村上 偉代

最初に感じたことは「日本の素晴らしさ」である。イグアス日本人会を訪ね移民の歴史について学び、日本人の勤勉さやひたむきさがパラグアイの農業に大きな影響を与えていたことを知った。また、ニホンガッコウやイグアス日本語学校など、日本とのつながりの深い教育現場に実際に入ってみたことで、自国ではない場所で大切にされている日本の価値を知ることができた。パラグアイで日本の良さを感じられたのと同じように、日本でももっとパラグアイの素晴らしさを共有していきたいと思った。もう一つ実感できたことは、「人々の使命感が日本とパラグアイの強固なつながりを作ってきた」ということ。小規模農家支援にしても教育活動にしても、困難な状況があっても諦めずに進み続けてきた人がいたからこそ人同士のつながりが生まれ、それが二国間のつながりに発展していったのだと思う。信念を持つこと、諦めないことの大切さもまた、日本で伝えていかなければと思う。

## 4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと



#### ● 石田 秀憲

滝本専門家や小川専門家の活動視察やお二人との対話を通じて、お二人は現地の方々へ寄り添う姿勢で農業や酪農の問題に取り組んでいると感じた。日本の技術や方法をいきなり伝えたりせず、パラグアイの人々が持っている道具や施設で、彼らのやり方を尊重しながら、無理なく続けられる方法を共に考えて普及活動に努めていた。「共通の課題について共に考え・共に越える」という姿勢は、まさにお二人のように相手の立場や考えを尊重しながら模索していくものであると気づかされた。まずは日本（自分達）と相手国（相手の人）をよく理解し、共通点や相違点をしっかり理解しようとするのが大切である。世界の問題を他人事ではなく自分事として捉えることは勿論、日本で自分ができることや、現地に居たら（もし自分がその状況の中で生活していたら）どんなことができるか、ということまで考え行動できる大人を育成していきたいし、私もそうでありたい。

#### ● 伊藤 聡子

「相手の目線や立場に立って、共に考え、共に解決しようとする」とパラグアイで活動している青年海外協力隊や専門家の方々から口を揃えて言っていた言葉である。こちらの押し付けではなく、相手の目線や立場に立つことで信頼関係を築くことができ、課題解決へと歩み始めることができる。ロマ・ピタ母子病院で在宅療養・介護支援プロジェクトに携わっている青年海外協力隊の塩川更紗さんの「文化や生活スタイルが異なるパラグアイでは、まずは相手を認めること。その上で、少しでも何かが変わるような種を蒔いていければいい」という言葉が印象に残っている。日本とパラグアイの共通の課題は、貧富の格差や環境問題など…。課題を解決していくための基本は、「教育」であるということさまざまな訪問先で学んだ。心に残っている言葉「教育はお金より価値がある」「教育が人を変える」「教育者の偉大さが国をつくる」。ひとりの教育者として、未来を担っている子どもたちと共に、世界共通の課題について考え、共に越えていきたい。

#### ● 加藤 寿恵

首都のアスンシオンから郊外に向かう車の中。道路沿いに捨てられた無数のゴミ。共通の課題と聞かれてすぐに思い浮かんだのは「環境問題」だった。カテウラ地区を見たときの

衝撃は、今でも鮮明に思い出すことができる。そこは、近隣地区から出たゴミが24時間休みなくトラックで運び込まれる。ゴミが高く積まれたこの場所も、もうすぐいっぱいになるとのことだった。これらを見た時の衝撃は容易に忘れることはできない。そのことを聞いて、日本の現状を思い出した。日本もあと何年かすれば国内の埋め立て地がいっぱいになる。買い物をしたら、持ちやすいようにレジ袋に入れる。誰かにプレゼントをするときには、美しく見えるように包装する。これらの袋や包装紙は、全てが本当に必要なものなのだろうか。より豊かな生活ができるようになってはいるものの、地球に還らない物を必要以上に生産し続けることは、持続可能な開発になるのだろうか。子ども達と一緒に考えたい課題となった。

### ● 川合 孝弥

研修で訪問した、教育、農業、環境、日系社会、医療のさまざまな訪問先で課題を抱えている。例えば、ゴミ問題を挙げるのであれば、パラグアイではゴミをゴミ箱にいれるといった習慣が浸透していないことが多い。そのため、街中でもゴミが捨てられているのをよく見かける。パラグアイ中のゴミが集積されるカテウラ地区では、処分しきれないゴミが山積みになっており、そこで生活する人びとの生活は悲惨である。しかし、このゴミ問題は日本や世界にも共通する課題である。最近、ニュースで海洋ゴミの話題をよく見聞きする。特に、分解されない細かいプラスチックが多く、海に住む生き物がそれらを誤食し、死に至るといったケースも起きている。これらのゴミ問題は日本のみならず、世界規模で対応をしなければならぬ大きな問題である。あるコーヒー会社ではプラスチック製のストローの使用を数年後に廃止するといった対策がなされているが、私たちもこのゴミ問題にしっかりと目を向け、私たちができることから始めなければならない。

### ● 梶山 紗希

柱2の項目でも挙げた、食料自給率と貿易については子どもたちと考えたいと感じている。農業を主要産業としている国と食料自給率が低下している国は相互依存の関係になるし、その関係が多くの国と結ばれるため、どうしても自分の国だけが良ければいいとはいかない。互いに良い面で刺激し合うことや良い面を生かすことを大切にしながら、授業実践に移していきたい。また、カテウラの状況も日本の課題と通じるところがあり、ともに解決策を考えていかななくてはいけないと感じた。衛生状況は悪く、生活することは容易ではないが、実際にそこで生まれ育った人からすると「何と言われてもここが私たちの故郷なんです。」という言葉が刺さった。日本もごみや核燃料の埋め立て地が少なくなってきている現状がある。また、自然災害で住んでいた土地が土砂で埋まってしまうこともある。最初はカテウラの町の風景と日本は正反対のように感じたが、そんなことは全くなく、共に考えていく課題の一つだと感じた。

### ● 高橋 泉名

本研修で、青年海外協力隊や日本から派遣されている専門

家の方から様々な話を聞いた。みなさんのプロジェクトはどれも、知る、計画する、準備する、周りを巻き込みながら行動するというプロセスを辿っていた。中でも大切にしていたのは「知る」ことである。パラグアイのことは、パラグアイの人が良く知っている。日本の技術をただ導入するのではなく、パラグアイの人の気持ち、生活、歴史・伝統、課題を把握して、相手を理解して進めていた。押し付けたり、どこかと比較したりするのではなく、パラグアイにあった方法を共に考えていこうとしていたのである。酪農振興プロジェクトを進める小川さんから、課題解決の方法を提案する際に「必要だから」「いまよりもこの方法の方がいいから」ではなく「なぜ必要なのか」「どうしてこの方法がいいのか」を伝える姿勢を忘れないようにしていると聞いた。ただ真似をしたり、新しい取り組みをしたりして解決をしようとするのではなく、実態にあった取り組みをするために「知る」ということを大切にすることが「共に考え・共に越える」ことであり、結果的に課題の解決へ近づくと考える。

### ● 宮川 勇作

日本でも昨今、「格差是正」が声高に叫ばれている。だが、日本のそれにも増して、パラグアイでも貧困の差が激しい。誰もが一つの命を懸命に生きている。それぞれの個性や人格の違い、文化や習慣の違いがあっても、生まれる場所や環境によって、生きることすら困難を強いられることのある現代の課題を決して見過ごしてはいけなと思った。本研修の訪問地では、青年海外協力隊の方々をはじめ、現地で活動されている方のお話をじっくり伺うことができた。どの現場にも、今まさに直視しなければならない課題や中長期的な展望にたったときに明らかに生じる課題を数多く抱えていた。共通の課題に対して、解決の糸口見出すために対話を重ね、具体的な行動に移していくとき、先進国や途上国という組み分けはもはや不要だと感じた。一国の前進が、やがて地球規模の変革につながる。そのために今を生きるわたし達が「知り、考え、行動する」というサイクルを繰り返すことが出来るようにマインドシフトしなければならない。

### ● 村上 偉代

青年海外協力隊の皆さんとワークショップをした際に、パラグアイは人が温かく優しいという素晴らしい国民性を持ちながら、人材育成や教育の面で大きな課題を抱えていることがわかった。政治の世界では汚職が横行し、先頭に立って国の教育に力を入れていこうという政治家がいないということも、大きな原因ということだった。一方日本では、世界から見ても質の高い教育が展開されているにも関わらず、どの世代においても「孤立」が進み、学校で学んだ知識や技術を用いて、誰かと協力して何かを作り上げていこうという力が発揮できていないと感じることが多い。「よりよい教育とは何か」という課題について、「人と人とのつながりの温かさ」というパラグアイの良さ、「充実した教育体制」という日本の良さを持ち寄り人々が繋がっていくことで、それぞれの国が抱える課題が解決に向かうためのいい流れが生まれるのではないかと感じている。国際協力の目指すところは、このようなところにもあるのかもしれない。

## ● 開発教育指導者研修(実践編)第3回での報告

### <現地研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、①パラグアイダンス、②パラグアイの概要、③訪問先の紹介、④受講者一人ひとりの印象に残ったこと、⑤研修を通して気づいたことについて、現地の写真および音楽と共に紹介した。



## ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2019 に向けた準備

- ◇ 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2019 内で行う現地研修報告の内容検討会を、次の日程で行った。

第1回：2018年10月20(土) 10:00~12:00

第2回：2018年12月16(日) 10:00~12:00

## ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2019 での報告

### <現地研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、次の流れで、現地の写真と音楽と共に研修報告を行った。

- ① パラグアイダンスと音楽
- ② パラグアイ基本情報クイズ
- ③ 各訪問先の紹介と印象に残っていること
- ④ 本研修の目的と現地研修で得た学び、気づき、自分自身の変化



### <ポスターセッション(実践報告)>

- ◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラム参加者へ42分間(14分×3セッション)の報告を行った。



# V. パラグアイ実践報告書

パラグアイ実践報告書の内容一覧

No.	名前	対象	時間数	タイトル
1	石田 秀憲	高等学校1年生 (40名)	3時間	『食』と『貿易』 ～私たちにできることはゴマンとある！～
2	伊藤 聡子	中学校2年生 (40名)	6時間	「食」を通して考える世界とのつながり
3	加藤 寿恵	小学校6年生 (100名)	2 4時間	開こう！世界へのとびら
4	川合 孝弥	高等学校2年生 (32名)	6時間	環境問題～私たちにできること～
5	梶山 紗希	小学校5年生 (13名)	6時間	虹～無限の色でみんなスマイル～
6	高橋 泉名	小学校5年生 (36名)	9時間	世界へ旅に出掛けよう
7	宮川 勇作	小学校1年生 (29名)	9時間	世界授業 “いいね！” っていいね！
8	村上 偉代	高等学校1年生 (40名)	7時間	「わたし」と「社会」はつながっている！

## 『食』と『貿易』 ～私たちにできることはゴマんとある！～

学校名	愛知県立松蔭高等学校	授業者氏名	石田 秀憲
対象学年 (人数)	高等学校1年生(40名)	実践年月 (時数)	2018年10月～11月 (3時間)
担当教科等	外国語(英語)		
単元名 (活動名)	国際問題を知り、自分たちのできることを考えよう		
実践する 教科・領域	総合的な学習の時間		
学習領域	[A] 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流( ) / 多文化共生( ) [B] グローバル社会 … 相互依存(○) / 情報化( ) [C] 地球的課題 … 人権( ) / 環境(○) / 平和( ) / 開発( ) [D] 未来への選択 … 歴史認識( ) / 市民意識( ) / 社会参加(○)		
単元目標	・ゴマ(食物)を通して貿易や環境問題を自らの関わることだと理解する。 ・国際問題を解決するために国・企業・個人という3つのレベルで取り組むべき課題を見つける。 ・外国の方や異文化にルーツをもつ方々と共に課題に向き合う態度を身につける。		
単元の 評価規準	知識および技能	・食や貿易に関する国際問題について、扱う言葉の意味や数値を正しく理解している。	
	思考力、判断力、 表現力等	・食や貿易に関する国際問題の学びを通して、国や企業、個人という異なる視点から、課題解決に向かうための具体的な行動案を提示できる。	
	学びに向かう力、 人間性等	・書く活動や発表する活動に積極的に参加し自分の意見を表現でき、グループ活動では他者の意見に耳を傾けることができる。	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	・学習に対して概ね前向きな生徒たちではある。しかし、例えば英語の授業等で国際問題を取り上げても、その内容というよりは英語自体の知識を増やすために学習に取り組む姿勢の生徒が多い。試験のためだけではない学びの動機を見つけ、国際問題への関心に繋げたい。 ・自身の進路やキャリアについて、まだまだ真剣に考えていない生徒が多い。国、企業そして個人という異なる3つの視点から国際問題への取り組み方を考えることで、高校卒業後に何を学びたいか、どんな大人になりたいか、自分には何ができるかなどを想像し、キャリア意識の涵養に努めたい。 ・課題解決に向けた話し合いや議論、交渉の中で、それらにはスキルが関係していて、トレーニングが必要であることを実感できるような展開をしていきたい。基本的なことではあるが、相手の立場になって考え自分の発言を顧みたり、どのような姿勢や言葉遣いで話し合いに臨むべきかを考えたりすることで、コミュニケーションスキルの向上に加え、他者と共に課題解決に取り組む姿勢を醸成したい。		

## [単元計画 (全3時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラグアイという国がどんな国なのか、そして特にゴマを通して、日本とのつながりを知る。新しいものと出会う時には『肯定的に出会う』という姿勢の重要性に気づく。</li> <li>・私達の身体の半分以上が外国産のものでできていることを知り、国際問題を自分たちに関係するものだと自覚する。</li> <li>・パラグアイ産のゴマの残留農薬の問題から、食料自給率の低い日本には、食と貿易に関する問題が存在し、問題解決の為に良好な関係を他国と築くことの重要性にも気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・【バースデーラインナップ】でのグループ作り。</li> <li>・教師の準備した物を見ながらパラグアイがどんな国かを想像し、思い付いたことや頭に浮かんだ単語をどんどん書き出していく【ブレンストーミング】。</li> <li>・グループで各自のアイデアを共有した後、教師の話聞く。</li> <li>・カロリーベースでの日本の食料自給率を予想し、その後具体的な数値を教師から聞く。</li> <li>・自分たちの身体の半分以上が外国産の食品で出来ているということを図にする。【イメージ図】</li> <li>・日本が輸入するパラグアイ産のゴマが近年減ってしまったという事実を知り、原因を想像する。カルバリルなどの残留農薬が原因であるという事実を知り、食料自給率の低い日本には、考えていかなければならない食と貿易の問題が多く存在していることに気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・民族衣装【実物】</li> <li>・写真、動画、土産</li> <li>・現地の伝統的音楽</li> <li>・配付プリント</li> <li>【アクティビティ参考】</li> <li>「参加型アクティビティ集 コミュニケーション編」(特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター)</li> <li>【資料作成参考】</li> <li>農林水産省ホームページ</li> <li>財務省 貿易統計</li> <li>滝本浩司氏(JICA 専門家)提供資料</li> </ul>
2 本時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食と貿易の問題を解決する為に日本はどのように外国と関わっていくべきかを考える。同時に、話し合いや交渉にはスキルが必要であるという事実に基づき、周囲の意見をよく聞いた上で自分なりの意見をもち、そして自分の発言がどのように相手や周囲に影響するかを考えられるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の授業を振り返り、グループで共有する。</li> <li>・配付された仮想国A国～E国に関する資料を読み、読みとれることや各国の課題をグループで共有する。</li> <li>・各グループに仮想国が割り当てられる。各グループはその国の代表者として国際会議の場でどんなことを提案すべきかを考える。その後、実際に他国(他グループ)に向けて提案をする。全ての国(グループ)の1回目の提案が終了した後、もう1度各グループで他グループからの提案にどう反応するか考え、2回目の発言の時間を設ける。これを何度か繰り返す。</li> <li>・日本とパラグアイの間でのゴマの残留農薬の問題に関して、専門家が派遣されていることを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配付プリント</li> <li>【資料作成参考】</li> <li>農林水産省ホームページ</li> <li>財務省 貿易統計</li> <li>滝本浩司氏(JICA 専門家)提供資料</li> </ul>
3 本時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本が国際協力の一環として専門家を開発途上国に派遣している事実から、国際協力は単に相手の国のためだけに行っているのではなく、日本のためにもなっていることを知る。</li> <li>・フードマイレージ、テーブルフオーツ、フェアトレード、食品ロスなどの考え方や取り組みを知る。</li> <li>・国際問題を解決するために、自分にもできることがあると気づき、その上で国や企業、個人という3つの異なる視点から具体的な行動計画を練られるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴマの残留農薬の問題解決のため、日本からパラグアイに専門家が派遣されていることの意義を考える。「専門家が派遣されて残留農薬の問題が解決されると、どんな良いことが起こるか」という教師からの問いかけに対し、グループで1つの【派生図】を作り、書き込んでいく。</li> <li>・左記の4つの考え方や取り組みについてそれぞれ書かれた4種類のプリントをグループで1人1種類読み、その後要点をまとめて同グループの他のメンバーと伝え合って共有する。</li> <li>・食や貿易に関する国際問題の解決のために、国や企業、個人レベルでできることを個々で考え、グループでアイデアを共有する。更に個人レベルでできることに関しては、クラス全員ができそうなものをグループで3つずつ選び、クラス全員への提案として発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配付プリント</li> <li>【資料作成参考】</li> <li>農林水産省ホームページ</li> <li>政府広報オンライン</li> <li>財務省 貿易統計</li> <li>滝本浩司氏(JICA 専門家)提供資料</li> <li>フェアトレード・ラベル・ジャパンホームページ</li> <li>特定非営利活動法人 ローハスクラブホームページ</li> <li>TABLE FOR TWO 公式サイト</li> </ul>

## [本時の展開 (2時間目)]

ねらい	<p>・食と貿易の問題を解決する為に日本はどのように外国と関わっていくべきかを考える。同時に、話し合いや交渉にはスキルが必要であるという事実に気づき、周囲の意見をよく聞いた上で自分なりの意見を持ち、そして自分の発言がどのように相手や周囲に影響するかを考えられるようになる。</p>		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
10分	<p>1. 前回の授業を振り返り、考えたことや感じたことをグループで共有する。</p> <p>2. メンバーを入れ替えてもう一度共有の時間をもつ。(4名のグループのうち2人がそれぞれ前後のグループへ移動し、4人中2人が最初と別のメンバーになるようにする)</p>	<p>・話し合いのヒントになるよう、前回のキーワードを黒板に書く。(肯定的に出会う、パラグアイ、ゴマ、食料自給率、残留農薬)</p> <p>・話し合いがスムーズに行っていないグループを把握し、会話を促進する働きかけを行う。</p>	
35分	<p>3. 配付された仮想国A国～E国に関する資料を読み、読みとれることや各国の課題をグループで共有する。(配付プリントには5カ国の輸出入品、取引相手国、輸出入額、カロリーベースの食料自給率、食料品国内残留農薬規定、食料輸入品残留農薬規定、その他の特徴が書かれている)</p> <p>&lt;生徒の気づきの例&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A国は自動車や機械を多く輸出して貿易黒字だが、食料自給率が低い。食料輸入品に対する残留農薬規定がとても厳しい。</li> <li>・B国は食料やエネルギーを輸出しているが財政が厳しい。</li> <li>・C国は輸入額も輸出額も一番だが、かなりの貿易赤字である。国民から輸入超過財政に対しての不満がある。</li> </ul> <p>4. 各グループに仮想国が割り当てられる。各グループはその国の代表者として国際会議の場でどんなことを提案すべきか考える。その後、実際に他国(他グループ)に向けて提案をする。全ての国(グループ)の1回目の提案が終了した後、もう1度各グループで他グループからの提案にどう反応するか考え、2回目の発言の時間を設ける。これを何度か繰り返す。</p> <p>&lt;生徒発言例&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A国はかなりの貿易黒字だから、貧しい国にお金が回るように食料をもっと買うべきだ。残留農薬規定も緩めてほしい。</li> <li>・貿易黒字の国は機械を作る技術を教えるべきだ。</li> <li>・せめて農薬を使わずに安全に食物を生産できる方法を共有してほしい。</li> </ul>	<p>・まずは1人で静かに資料を読む時間を設けてから話し合いの時間にする。</p> <p>・司会役を指定し、必ず全員が発言できるように注意を促す。</p> <p>・話し合いがスムーズに行っていないグループを把握し、会話を促進する働きかけを行う。</p> <p>・発言者が毎回同じにならないように、グループ内で交代することを伝える。</p> <p>・他のグループが発言している間は静かに聞き、内容をメモするように促す。</p>	<p>・配付プリント 【資料作成参考】 農林水産省ホームページ 財務省 貿易統計 滝本浩司氏(JICA 専門家)提供資料</p>
5分	<p>5. 本日の振り返りを行う。</p> <p>6. 日本とパラグアイの間でのゴマの残留農薬の問題に関して、専門家が派遣されていることを知る。</p>	<p>・意見をしっかりと伝えることと、相手の話をしっかりと聞くこと、同じ内容を伝えるにもどのような言葉遣いや話し方で発言するかが重要であると伝える。</p>	
<b>評価規準に基づく 本時の評価</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料を読み取り、グループの一員として自分の意見を伝えることができる。</li> <li>・他者の意見に耳を傾け、質問や提案に対して適切な応答ができる。</li> <li>・国際問題に対して、外国の立場も踏まえた上で日本の関わり方を考えることができる。</li> <li>・話し合いでの態度やスキルの重要性に気づき、日頃の自分を振り返ることができる。</li> </ul>		

## 〔本時の展開（3時間目）〕

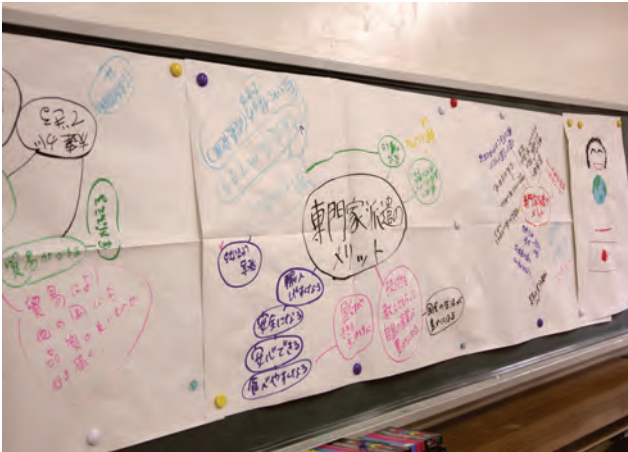
<b>ねらい</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際協力は単に相手の国の為だけに行っているのではなく、日本の為にもなっていることを知る。</li> <li>・フードマイレージ、テーブルフーズ、フェアトレード、食品ロスなどの考え方や取り組みを知る。</li> <li>・国際問題を解決するために、自分にもできることがあると気づき、その上で国や企業、個人という3つの異なる視点から具体的な行動計画を練られるようになる。</li> </ul>		
<b>過程・時</b>	<b>教師の働きかけ・発問および学習活動</b>	<b>指導上の留意点(支援)</b>	<b>資料</b>
10分	1. 前回の授業を振り返り、考えたことや感じたこと、日本が国レベルで国際社会のためにできることをグループで共有する。  2. メンバーを入れ替えてもう一度共有の時間をもつ。(4名のグループのうち2人がそれぞれ前後のグループへ移動し、4人中2人が最初と別のメンバーになるようにする)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いのヒントになるよう、前回のキーワードを黒板に書く。(話し合いの場で大切な事は何だろう)</li> <li>・話し合いがスムーズに行っていないグループを把握し、会話を促進する働きかけを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【アクティビティ参考】</li> <li>「参加型アクティビティ集 コミュニケーション編」(特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター)</li> </ul>
15分	3. 残留農薬問題解決のためのJICAの専門家派遣の意義と様々なメリットを考え、グループで【派生図】を作成していく。  4. グループで作成した派生図をその場に残し、1人1本ペンを手に持ち次のグループへ移動する。移動先に残っている派生図に自分なりの考えを書き加えていく。【ギャラリー方式】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門家を派遣することは、途上国の技術発展のためにもなり、日本が安全な食物を輸入できるようになるという2つの大きなメリットがあることを生徒が気づいているか確かめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【資料作成参考】</li> <li>・配付プリント</li> <li>農林水産省ホームページ</li> <li>政府広報オンライン</li> <li>財務省 貿易統計</li> <li>滝本浩司氏 (JICA 専門家)提供資料</li> <li>フェアトレード・ラベル・ジャパンホームページ</li> <li>特定非営利活動法人 ローハスクラブホームページ</li> <li>TABLE FOR TWO 公式サイト</li> </ul>
10分	5. 残留農薬の問題に加え、食と貿易に関する問題は他にも様々あることを知る。各グループに配付された4種類のプリント(フェアトレード、フードマイレージ、テーブルフーズ、食品ロスについて)を1人1枚受け取り、読む。  6. 要点をまとめ、グループ内の他の生徒に2分でプリントの内容や感じたことを伝える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導を行い、支援が必要な生徒が居ればグループ内での発表を手助けする。</li> </ul>	
15分	7. 日本が国としてできることや、日本の企業や個人ができることを3つずつ考え、グループで発表する。【ビンゴ】  8. グループ内でクラス全員ができそうなことを3つ見つけ、発表する。  9. 3時間の振り返りを行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導を行い、支援が必要な生徒が居ればグループ内での発表を手助けする。</li> </ul>	
<b>評価規準に基づく本時の評価</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えと他者の考えの繋がりに気づくことができる。</li> <li>・国際協力は相手国の為だけでなく、自国や自分にも影響があると気づくことができる。</li> <li>・資料を読み取り要点をまとめ、聞き手に伝わりやすいように発表することができる。</li> <li>・自分にもできることを考え、異なる視点から具体的な行動計画を練ることができる。</li> </ul>		



## [総括・まとめ]

<b>学習方法および外部との連携</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・【バースデーラインナップ】でグループを作り、今までの友人関係に囚われず誰とでも交流するきっかけを与えた。</li> <li>・【イメージ図】では参加型授業を楽しむ雰囲気作りを意識し、グループで1枚の絵を完成させることで、その後の話し合いに進む前に、グループ内での安心・安全の場を作った。</li> <li>・仮想国を各グループに割り当て国際会議を行うことで、個人レベルだけでなく国レベルでも物事を考えると共に、話し合いの場での伝え方や聞き方のスキルアップにも結びつけた。</li> </ul>
<b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の宣伝を校内で積極的に行い、3回の授業で20名以上の方に見に来ていただいた。</li> <li>・愛知県高等学校国際教育研究協議会で海外研修と授業実践の報告をさせていただいた。</li> <li>・勤務校から教師と生徒合わせて20名程度を JICA 中部訪問プログラムへ引率した。</li> </ul>
<b>苦労した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際会議ゲームをするための資料作りに大変苦労した。農林水産省や財務省のホームページをはじめ、様々なところからデータを集め、生徒が理解しやすいように実際の数値を少し変更したり、単現のねらいに必要なものだけ取捨選択したりして資料を作った。</li> </ul>
<b>改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際には3時間で実践を行ったが、同じ実践を行うならばもう少し時間的に余裕をもった方がよい。時間が少なかったため話し合いの時間が短かったり、作業の時間が短くて成果物の質が低かったり、自分自身が焦ってしまって生徒の気づきを促すための発話や働きかけが誘導尋問のようになってしまった場面があった。</li> </ul>
<b>成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの生徒からもっとこの単元を続けて欲しいという声を聞いた。</li> <li>・特別に用意していただいた総合学習の3時間を使って実践を行ったが、見に来ていただいた先生方からも好評で、来年度は英語の教員が通年で総合学習に携わることになった。</li> </ul>
<b>学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「国の問題はすべて企業や政府が改善するのではなく、自分たち、一人一人が小さなことから始めることもあるのだと知った。さらにそれが大事だとも思った。」</li> <li>・「食料を外国からの輸入に頼っている日本が、他国との国際協力を大事にするべきだと思いました。少し難しい内容の授業でしたが、グループで話し合うことで楽しく理解することができました。」</li> <li>・「自分が、いろんな国の人間の立場になって、相手国に意見を言う授業で、自国の利益だけじゃなく、それが相手国にとってどんなメリットがあるのかを考えながら、グループで話し合うのがとてもおもしろかった。」</li> <li>・「私は正直、英語が苦手だし、他の言語を学びたいとも思わないし、そもそも外国にまったく興味がありませんでした。初めにどう思う？とかイメージは？と聞かれてもそんなに思うことはなくて、大体みんなはこう考えるんじゃないか、などの他の人の意見しか考えられませんでした。しかもそれはほとんど日本を基準に考えた否定的なことばかりで、それに違和感を覚えることもありませんでした。でも今はそれを恥ずかしいことだと思っています。それくらい石田先生の肯定的に出会うというのが心に残っていて、本当にためになりました。またそれは外国に対してだけではないと思います。すべての人、物に肯定的に出会うことで生まれる何か絶対にあると思います。」</li> </ul>
<b>授業者による自由記述</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単現計画には予定していなかったが、もう少し生徒自身ができることを考えたり、身近なものでフェアトレードのものなどを見つけてきて発表する場を設けられたりすると良かった。更に、フェアトレードのものを消費者に買って貰うには企業はどんな取り組みや努力ができるか考えてポップ作りや陳列の計画を立てるのも良いのかも知れない。</li> </ul>
<b>単元構想・実施における参考資料等</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「参加型アクティビティ集 コミュニケーション編」 NPO 法人 NIED・国際理解教育センター</li> <li>2. 農林水産省ホームページ      3. 政府広報オンライン      4. 財務省 貿易統計</li> <li>5. 滝本浩司氏(JICA 専門家)提供資料      6. NPO 法人 ローハスクラブホームページ</li> <li>7. フェアトレード・ラベル・ジャパンホームページ      8. TABLE FOR TWO 公式サイト</li> </ol>

[ 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど) ]



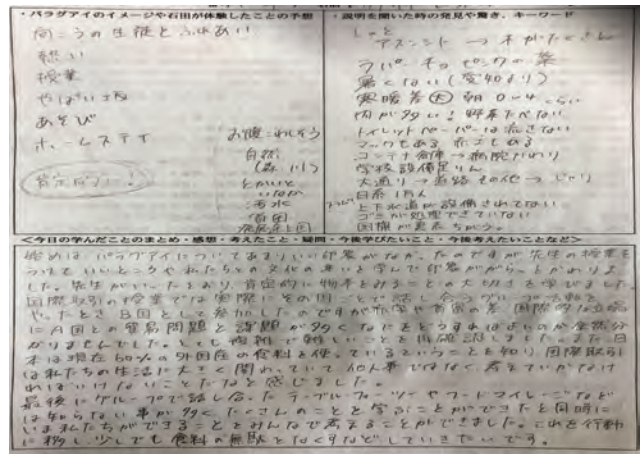
▲ 生徒の成果物の一例(専門家派遣のメリットを考える)



▲ 生徒の活動の様子1



▲ 生徒の活動の様子2



▲ 生徒の振り返りシートの一例

## 「食」を通して考える世界とのつながり

<b>学校名</b>	愛知県海部郡大治町立大治中学校	<b>授業者氏名</b>	伊藤 聡子
<b>対象学年 (人数)</b>	中学校2年生(40名)	<b>実践年月 (時数)</b>	2018年11月～12月 (6時間)
<b>担当教科等</b>	保健体育		
<b>単元名 (活動名)</b>	持続可能な社会のために私たちにできること ～ 一人の百歩より、百人の一步 ～		
<b>実践する 教科・領域</b>	総合的な学習の時間		
<b>学習領域</b>	[A] 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流( ) / 多文化共生( ) [B] グローバル社会 … 相互依存(○) / 情報化( ) [C] 地球的課題 … 人権(○) / 環境( ) / 平和( ) / 開発(○) [D] 未来への選択 … 歴史認識( ) / 市民意識(○) / 社会参加( )		
<b>単元目標</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラグアイと肯定的に出会い、「世界をもっと知りたい」という思いをもつ。</li> <li>・自分の食生活に関心をもち、自分の生活が世界とのつながりの中で成り立っていることに気づく。</li> <li>・世界の国々とのよりよいつながりのために、自分たちにできることを考えて行動する。</li> </ul>		
<b>単元の 評価規準</b>	<b>知識および技能</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界には多様な文化や習慣があることに気づくことができる。</li> <li>・自分自身の生活を振り返り、自分の生活が世界とのつながりの中で成り立っていることを理解することができる。</li> </ul>	
	<b>思考力、判断力、 表現力等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分や世界の国々の食生活に関心をもち、普段、食べているものがどんな道のりを通ってきたのかを考えることができる。</li> <li>・「食」に関するデータを整理・分析し、日本で作られた食料のみのメニューを考えることができる。</li> </ul>	
	<b>学びに向かう力、 人間性等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・持続可能な社会を実現するために自分にできること、仲間とできること、国のできることの3つの視点から行動できることを考え、自分にできることに取り組もうとすることができる。</li> </ul>	
<b>単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地研修で私自身が一番印象に残った体験である「食事＝動植物の命をいただいている」ということを教材にしたいという思いから、「食」から世界とのつながりに気づくことができるような単元計画を立てた。</li> <li>・本実践前に、生徒たちは道徳の授業の中で、「パラグアイの人たちが日本人のよさをたくさん知っている」ということを知り、「パラグアイのことをもっと知りたい」という思いをもち始めた。そこで、パラグアイを切り口に世界のことに興味関心を広げていけるような授業展開をしようと考えた。</li> <li>・本単元では、まずは自分の生活を振り返ることで、自分の生活と世界がつながっているということ、そして、日本は世界の国々に支えられているということに気づけるようにしたい。世界とのつながりを知った上で、もし世界とのつながりがなくなったらどうなるのかを考えると、さらに考えが深まるのではないかと思う。その中で、日本や世界が抱える課題に気づき、課題を解決するために自分たちにできることを生徒自身が考えられるようにしていきたい。</li> </ul>		

## [単元計画 (全6時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・パラグアイを肯定的に受け入れ、他国の習慣や文化に関心をもつ。	①パラグアイのイメージを出し合う。【ブレンストーミング】 ②Si? No? クイズを行う。 ③パワーポイントでクイズの答え合わせをする。 ※国旗、テレセット、コイン・紙幣、民族衣装の実物を見せる。 ④①のブレンストーミングの模造紙に、分かったことを付け加える。	・クイズ(16問) ・パラグアイで撮影した写真や動画 ・パワーポイント ・パラグアイで購入したもの
2	・パラグアイと日本とのつながりに気づく。	①パラグアイと日本のどちらの写真かを考える。 【フォトランゲージ】 ②どちらの国と思ったのかプリントの国名に○をつけ、なぜそう思ったのかを付箋に書いて貼る。 ③どちらの国と予想をしたのか、理由と合わせてペアグループで考えを共有する。 ④パワーポイントでどちらの国の写真を確認する。	・パラグアイで撮影した写真16枚(日本とのつながりが分かるもの)  ・パワーポイント
3	・身の回りのものから、自分と世界とのつながりに気づく。 ・世界の食卓の様子から、多様な食生活を知る。	①この一週間お世話になったものを書き出す。【リスト】 ②リストを見て分かったことや気づいたことを書く。 (どんな種類のものが多い? 海外とつながっているものは? なくなると困るもの TOP3は?) ③9枚の食卓の写真がどこの国のものなのか、なぜそう思うのかを考える。【フォトランゲージ】 ④写真の食卓がどこの国かを世界地図で確認する。	・9か国の食卓の写真(中国、ブータン、オーストラリア、ドイツ、トルコ、マリ、アメリカ、エクアドル、アイルランド) ・世界地図(黒板用)
4 本時	・国や地域によって、一日の摂取カロリーに違いがあることを知る。 ・自分たちが食べているものが、どのように食卓まで運ばれてくるのかを考える。	①写真の人物になりきって、一日の食事を紹介する。 【ストーリーづくり】 ②写真の人物の一日の摂取カロリーを予想し、4枚の写真を摂取カロリーが低い順に並び替える。【フォトランゲージ】 ③原料と加工されたものを組み合わせる「『食』マッチングゲーム」をする。(例:小麦-パン、カカオ-チョコレート) ④マッチングゲームで組み合わせたものが、食卓に届くまでの道のりを考える。 ⑤考えたことを全体で発表し、共有する。	・4か国の一日分の食事の写真(ケニア、バングラデシュ、チャド、スペイン) ・原料の写真カード、加工されたものの写真カード各9枚
5	・「食」に関するクイズなどから、日本は世界の国々に支えられていることに気づく。	①「食」に関する3択クイズを解く。 ②お好み焼きの材料がどこからきているのかを考える。 ・豚肉、えび、かつおぶし、小麦粉の4つの食材の日本の自給率を予想する。 ・4つの食材がどこの国から輸入されているのかを予想し、4つの円グラフから選ぶ。 ③輸入が止まった半年後のメニューを考える。 (朝昼タのいずれか一食分) ④考えたメニューを全体で発表し、共有する。 ⑤日本で作られた食料のみの食事を知る。 ⑥ほとんどがパラグアイ産のもので作られた食事を知る。	・3択クイズ(10問) ・4つの円グラフ ・品目別自給率のプリント ・日本で作られた食料のみの食事のイラスト(朝昼タ) ・パラグアイのホームステイ先で食べた食事の写真(朝昼タ)
6	・自分の生活が世界と密接に関わっていることに気づき、世界の国々とのよりよいつながりのためにできることを考える。	①パラグアイの食事に関する写真から物語を作る。 【ストーリーづくり】 ②世界とのつながりがなくなったらどうなるかを書き出す。 【派生図】 ③模造紙の回し読みをして、「なるほど」と思ったものに☆印をつける。 ④世界の国々とのよりよいつながりのためにできることを、「自分」「仲間」「国」の3つの視点から考える。 【行動計画づくり】 ⑤全グループの「自分」に関する行動計画の中から、自分が行動していこうと思うもの一つを選び、シールを貼る。	・パラグアイの食事に関する写真4枚

## [本時の展開（4時間目）]

<b>ねらい</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国や地域によって、一日の摂取カロリーに違いがあることを知る。</li> <li>・自分たちが食べているものが、どのように食卓まで運ばれてくるのかを考える。</li> </ul>		
<b>過程・時</b>	<b>教師の働きかけ・発問および学習活動</b>	<b>指導上の留意点(支援)</b>	<b>資料</b>
導入 5分  展開 40分  まとめ 5分	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 写真の人物になりきって、一日の食事を紹介する。 【ストーリーづくり】                         <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 各グループ4枚の写真の中から、一人一枚を選ぶ。</li> <li>(2) 写真の中の人物の食生活を想像する。</li> <li>(3) 写真の人物になりきって、想像した食生活をグループ内で伝え合う。</li> </ol> </li> <li>2. 写真の人物の一日の摂取カロリーを予想し、4枚の写真を摂取カロリーが低い順に並び替える。 【フォトランゲージ】                         <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ケニア 800kcal</li> <li>・ バングラデシュ 1800kcal</li> <li>・ チャド 2300kcal</li> <li>・ スペイン 4200kcal</li> </ul> </li> <li>3. 原料と加工されたものを組み合わせる「『食』マッチングゲーム」をする。                         <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 18枚の写真カードを机の上に並べる。</li> <li>(2) 普段、食べているものが何からできているのかを考え、写真カードを組み合わせる。                                 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ マグロ - マグロの寿司</li> <li>・ ニワトリ - 唐揚げ</li> <li>・ 小麦 - パン</li> <li>・ 米 - せんべい</li> <li>・ アブラナ - 菜種油</li> <li>・ カカオ - チョコレート</li> <li>・ 牛 - チーズ</li> <li>・ 大豆 - みそ</li> <li>・ スケトウダラ - かまぼこ</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>4. 「『食』マッチングゲーム」で組み合わせたものが、食卓に届くまでの道のりを考える。                         <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 原料から食卓に届くまでに、どのような工程があるのかを考えて、プリントに書き込む。</li> <li>(2) 一人一つのヒント資料を担当し、大切だと思うところに下線を引く。</li> <li>(3) 下線を引いたところをグループ内で伝え合い、プリントに付け加える。</li> </ol> </li> <li>5. 考えたことを全体で発表し、共有する。</li> <li>6. 本時の感想をグループで伝え合う。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食事だけではなく、写真に写っている人物の生活背景も読み取る。</li> <li>・中学生に必要な一日の摂取カロリーが 2000kcal～2750kcalであることを押さえる。</li> <li>・チャドは難民の少年であり、国際援助団体から配給されている食事であることを知らせる。</li> <li>・写真カードを組み合わせるだけではなく、原料と加工されたものの名前も確認しながら組み合わせるようにする。</li> <li>・「食事＝動植物の命をいただいている」ということを9組のカードで確認する。</li> <li>・全部で9組のカードがあるので、各グループに1つを割り当てる。</li> <li>・困っているようであれば、途中でヒントになる資料を配付し、資料から分かったことを付け加える。</li> <li>・付け加えがあれば付箋に書き、発表グループに渡すことを説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピーター・メンツェル、フェイス・ダルージオ『地球のごはん』TOTO 出版より、4か国の一日分の食事の写真(ケニア、バングラデシュ、チャド、スペイン)</li> <li>・原料の写真カード、加工されたものの写真カード各9枚</li> <li>・山本茂『もったいない！感謝して食べよう』少年写真新聞社より、「食べ物はどうしてつくられる」「食生活を支える人たち」など</li> </ul>
<b>評価規準に基づく本時の評価</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フォトランゲージを活用することによって、写真の隅々までに目を向け、一日に摂取できるカロリーは国や生活背景などによって差があることに気づくことができた。</li> <li>・原料と加工されたものを組み合わせる「『食』マッチングゲーム」では、写真カードを組み合わせることはスムーズにできたが、食卓に届くまでの道のりを考えるのは戸惑っていた。しかし、グループで話し合っていていくうちに、たくさんの人々が関わって食卓まで運ばれていることに気づき、「これからは残さずに食べたい」「感謝の気持ちをもって食べよう」という思いをもつことができた。</li> </ul>		

## [総括・まとめ]

<b>学習方法および外部との連携</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎時間、参加型学習を取り入れたので、活動が円滑に進むようなグループ編成を行った。</li> <li>・行動計画を立てる前に、「もしも〇〇がなかったら…」と派生図を用いて考えたことで、より考えを深めることができ、具体的な行動計画を立てることができた。</li> </ul>
<b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学年の先生に授業(第1・2時)を参観していただいたり、授業公開(第5時)で保護者の方に見ていただいたりして、国際理解教育の取り組みを知ってもらった。</li> <li>・本実践の他にも、道徳の授業実践の中に現地研修で体験してきたことを取り入れた。『明るい人生』の資料「ガランチード」(愛国心)では、パラグアイで暮らしている人々が思う日本人のよさを紹介し、「引き継いでいきたい日本人のよさ」としてピラミッドランキングを作成する活動を行った。その後、全校朝礼のクラススピーチで、「引き継いでいきたい日本人のよさ」を紹介した。</li> </ul>
<b>苦勞した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加型学習にあまり慣れていなかったため、活動を進めるのに時間がかかってしまった。</li> <li>・生徒の興味関心が広がるように、毎時間の生徒の反応を見ながら計画を考え直して進めた。</li> <li>・生徒の考えが深まるような資料を選んだり、資料を簡潔にまとめて分かりやすく提示したりした。</li> </ul>
<b>改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度当初に計画を立てて学年全体で取り組んだり、各教科(本実践の場合は社会科と家庭科)と関連させて取り組んだりしていく。また、各教科でも参加型学習を取り入れていく。</li> <li>・行動計画を立てた後、計画だけに終わらないよう行動するまでの手立てを考える。</li> <li>・食べものが自分たちの食卓に届くまでの道のりを、教師側が一つ一つ把握しておく。</li> </ul>
<b>成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・回数を重ねるごとに日本にも世界にも興味をもつ生徒が増え、世界とのつながりに気づくことで身の回りの人やものへの感謝の気持ちをもつようになった。</li> <li>・給食の時間には、給食当番が必ず食缶が空になるように付け分け、「毎日、残さいゼロにする」という意識が学級全体で高まったように感じた。</li> </ul>
<b>学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</b>	<p>&lt;生徒が書いた振り返りの抜粋&gt;</p> <p>第1時…クイズの答えが思っていたことと違い、自分が勝手に思い込んでイメージを作ってしまった。日本では当たり前のことが、パラグアイでは当たり前ではないことに驚いた。</p> <p>第2時…日本とパラグアイの関わりやの深さを感じた。パラグアイの人が日本のことを知っているように、日本人もパラグアイのことをもっと知らなければいけない。</p> <p>第3時…いつも使っているもののほとんどがなくなったら困るものだったり、外国のものだったりした。当たり前にものが使え、食べものが食べられることへ感謝したい。</p> <p>第4時…いつも食べているものが何からできているのかは分かっても、その間にどんな工程があつてどんな人が関わってどんな想いでいるのは分からなかった。他のグループの発表を聞いて感心することがたくさんあった。これからは感謝して食事をしたい。</p> <p>第5時…輸入が止まってしまうと和食が食べられなくなり、みそ汁が飲めなくなってしまう。自分たちにできることは、食べられることに感謝して残さずに食べることである。</p> <p>第6時…世界とは食べもののつながり以外にも、文化やスポーツなどのつながりがたくさんある。オリンピックが近いので、世界の国々とのつながりをもっと大切にしていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本実践を通して、自分と世界がつながっている、日本と世界がつながっていることに気づき、食べものはじめ身の回りにあるものに感謝する気持ちをもつ生徒が増えた。これからの国際化に向けて、自分たちにできることに取り組んでいきたいという思いをもつことができた。</li> </ul>
<b>授業者による自由記述</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「食」から世界とのつながりを考えることで、自分の生活と世界が密接に関わっていることに気づくことができた。身近なところから入ることで、生徒の興味関心を広げることができたのではないかと思う。</li> </ul>
<b>単元構想・実施における参考資料等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『写真で学ぼう！地球の食卓 学習プラン10』開発教育協会</li> <li>・『地球のごはん』ピーター・メンツェル、フェイス・ダルージオ/TOTO出版</li> <li>・『もったいない！感謝して食べよう』山本茂/少年写真新聞社</li> <li>・『世界の食料』『どうなってるの？世界と日本』JICA冊子</li> <li>・『につぼん食べもの事情』『ニッポン食べもの力見つけ隊』『食料自給率の推移』『諸外国・地域の食料自給率等について』農林水産省ホームページ</li> </ul>

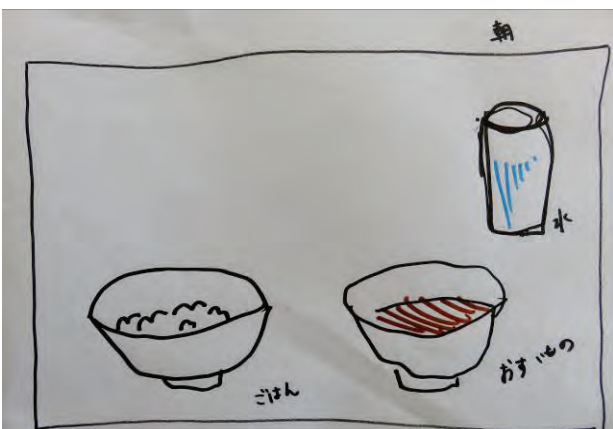




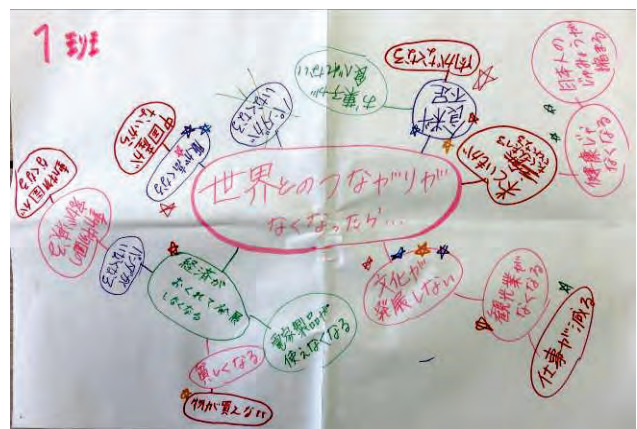
▲ 第4時 『食』マッチングゲームの活動の様子



▲ 第4時 「唐揚げ」が食卓に運ばれるまで



▲ 第5時 日本で作られた食料だけで作る「朝食」



▲ 第6時 もしも世界とのつながりがなくなったら…【派生図】

自分にできること	仲間とできること
<ul style="list-style-type: none"> <li>節水を心がける。</li> <li>外国人への差別をなくす (減らす)</li> <li>世界の流行や情報を多く取り入れておく。</li> <li>世界各国から輸入したものを大切にする</li> <li>食の中毒を大切にする</li> <li>日本産を大切にする</li> <li>日本を大切にする</li> <li>外国語を勉強する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イングリッシュキャンプなどの外国と交流できるイベントに積極的に参加する。</li> <li>日本の文化を伝える活動に取り組む。</li> </ul>
	国のできること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本産を輸出する。</li> <li>食の物の表示をわかりやすくする。</li> <li>輸入にたよりにしない。</li> <li>外国人に人気が出る商品をつくる。</li> </ul>

▲ 第6時 世界の国々とのよりよいつながりのためにできること



▲ 第6時 行動計画の中から私にできそうなことは…

世界とのつながりが無くなったら、おちちが今普通に生活している、生活ができなくなったり、貿易ができなくなると、肉や家具など、絶対に生活で必要な物が買えなくなったり、もし買われても、とても高価な物しかなくて、生活が不自由になってしまうことを知ったので、外国とのつながりを大切にしてほしいと思いました。今まで、黒い人が通ると、高層をかくしている人を見ると、か見せましたので、これからは絶対に、人種差別をしないようにしていきたいです。

▲ 第6時 「世界の国々とのよりよいつながりのために私たちにできること」の振り返り



## 開こう！世界へのとびら

<b>学校名</b>	愛知県海部郡蟹江町立蟹江小学校	<b>授業者氏名</b>	加藤 寿恵
<b>対象学年 (人数)</b>	小学校6年生(100名)	<b>実践年月 (時数)</b>	2018年5月～2019年2月 (24時間)
<b>担当教科等</b>	全科		
<b>単元名 (活動名)</b>	開こう！世界へのとびら		
<b>実践する 教科・領域</b>	総合的な学習・外国語活動		
<b>学習領域</b>	[A] 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流(○) / 多文化共生(○) [B] グローバル社会 … 相互依存( ) / 情報化( ) [C] 地球的課題 … 人権(○) / 環境( ) / 平和( ) / 開発( ) [D] 未来への選択 … 歴史認識(○) / 市民意識( ) / 社会参加( )		
<b>単元目標</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の国々に興味をもち、それぞれの国について進んで調べる。</li> <li>・世界の国々について調べたことをまとめ、発表する。</li> <li>・世界には、異なる文化や考え方があることに気づき、その違いを認め、尊重しようとする心情を育む。</li> </ul>		
<b>単元の 評価規準</b>	<b>知識および技能</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界には、異なる文化や考え方があることに気づき、その違いを認め、尊重しようとする。</li> </ul>	
	<b>思考力、判断力、 表現力等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当する地域について調べた内容をもとに、発表の内容や方法を考え、発表をすることができる。</li> </ul>	
	<b>学びに向かう力、 人間性等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の国々に興味をもち、様々な国について意欲的に調べようとする。</li> </ul>	
<b>単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6年生の児童は、100名が在籍している。その中には、外国にルーツをもっている児童もいる。そのため、世界には日本と異なる文化をもつ国があるということを学校生活で友達と関わるなかで無意識のうちに感じている児童もいる。また、友達との交流から世界の国々について興味をもつようになっている。その一方、近年のニュースでは、国同士の戦争やテロリズムなど世界の国々について否定的な報道を目にする機会が多く、外国に対して恐怖心を抱いている児童も少なくない。</li> <li>・本単元では、世界には様々な文化や生活習慣などがあることを知り、その良さや課題に気づくことで、自分にできることがないか考えることができる。世界の国々について調べたり、実際に外国に住んでいる(住んでいた)人の話を聞いたりすることによって、世界の国々の良さも感じることができる教材である。</li> <li>・指導にあたっては、JICA中部「国際協力出前講座」やパラグアイのピラポ日本語学校との交流を行い、世界の国々の良さを感じられるようにすることで、外国の出来事が自分事として捉えられるようになると考える。</li> </ul>		

## [単元計画 (全24時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1・2	・外国語活動で学習した表現を使って、外国人にインタビューをする。	・インタビューで使用する英語表現を練習する。 (名前・出身地・お土産に買いたいものなど) ・修学旅行で、外国の人に英語でインタビューをする。 ・インタビューを振り返る。	・PPT (録音した音声で練習できるようにしたもの) ・ワークシート①②
3	・知っている国を確認し、これからの学習の見通しをもつことで、学習への意欲を高める。	・知っている国名を書き出す。 ・国や地域について知っていることを書き出す。 (食事・気候・文化など) ・「世界」と聞いて、イメージすることを書き出し、学級で共有する。 ・総合的な学習で調べてみたいことを考える。	・ワークシート③
4	・世界には、十分な教育を受けられない子どもがいることを知る。	・「世界一大きな授業」クイズをする。 ・文字の読み書きができない体験をする。 読めない文字が書かれた、3種類の液体を見て、どれが「薬」なのか考えて選び、実際に飲んでみる。 ・世界で使われているお金(必要な援助額・ゲーム・軍事費)をリボンの長さで比べる。 ・学習の振り返りをする。	・JNNE「世界一大きな授業」 ・ワークシート④
6	・エチオピアの文化や生活習慣について知る。	・元青年海外協力隊の隊員による、エチオピアの出前講座を聞く。 (歴史・食べ物・学校生活・街の様子など、エチオピアの様子を写真や映像で見たり、講師の体験談を聞いたりする)	・国際協力出前講座 (山本光恵氏による)
9～20	・担当する地域について、発表する内容や方法を考え、調べたことを伝える。	・5つのグループに分かれて、担当する地域について調べる。(言葉・食べ物・世界遺産など) ・調べたことをもとに、発表原稿・小物作りをする。 ・発表の練習をする。 ・歌「小さな世界」の練習をする。 ・学習発表会で発表する。 ・発表の振り返りをする。	
21	・住んでいる地域の良さを伝え合い、楽しく交流をすることができる。	・ピラポ(パラグアイ)の児童に、質問をする。 ・ビデオレターを制作する。 (学校紹介、蟹江町・愛知県紹介、ピラポの児童への質問に答える、学年合唱「小さな世界」) ・ピラポ日本語学校のビデオレターを見る。 ・ピラポ日本語学校とビデオレター交流をした感想を書く。	
22	・日本人がパラグアイに移住した歴史を知る。	・ビデオレターを見て、生まれた疑問を共有する。 ・戦後の日本の人口増大により、パラグアイに移住をした歴史を知る。 ・日系人が築いた、日本とパラグアイの繋がりについて知る(ゴマの輸入)。 ・国籍とは何か考える。	・JICA Paraguay「パラグアイへの日本人移住の歴史」映像 ・パワーポイント
23・24 本時	・住みやすい蟹江町・日本にするためにできることを考える。	・国籍の意味を知る。 ・自分が移住するとしたら、「楽しみなこと・心配なこと」について考える。 ・蟹江町の人口減少に関するグラフを読み取る。 ・住みやすい蟹江町・日本にするためにできることを考え、行動計画を作成する。 ・学習を振り返る。	・厚生労働省「外国人雇用状況」の届出状況まとめに基づく集計 ・RESAS(地域経済分析システム)「将来人口推計・蟹江町」 ・ワークシート⑤

## [本時の展開 (24時間目)]

ねらい	・住みやすい蟹江町・日本にするためにできることを考える。								
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料						
3分  12分  25分  5分	1. 前時の復習をする。 ・もし、移住をしたら「楽しみなこと」・「心配なこと」に どのようなことがあったのか、確認する。  2. 人口減少についてのグラフを読み取る。 (1) 「外国人労働者の推移」のグラフを読み取る。 「なぜ、外国人の労働者が増えているのでしょうか。」 (2) 「愛知県蟹江町の総人口の推移(1980～2040年)」の グラフから分かることをグループで話し合う。 (3) 「愛知県蟹江町の年少人口、生産年齢人口、老年人口 の推移(1980～2040年)」のグラフから分かることを グループで話し合う。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">                         &lt;児童の反応&gt;                          ・2005年の人口が一番多い。                          ・将来、年少人口より、老年人口が倍以上になる。                          ・働ける人口が減ってしまう。                     </div> 3. 住みやすい蟹江町・日本にするためにできることを考 える。 (1) 「私にできること」・「仲間とできること」・「蟹江町・日本が できること」の3つに分けて考えたことを付箋に書き、行 動計画をグループで表にまとめる。 (2) グループで話し合った内容を学級で共有する。 ・グループで話し合った内容を発表し合い、似ている内容 を近くに貼り、分類をする。 (3) 表から、分かったこと・気づいたことを発表する。  <行動計画> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 33%;">私にできること</th> <th style="width: 33%;">仲間とできること</th> <th style="width: 33%;">蟹江町・国ができること</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>                             ・外国語を覚える。                              ・あいさつをする。                              ・ゴミ拾いをする。                         </td> <td>                             ・困っている人が                              いたら、助ける。                              ・蟹江町をPRす                              る。                         </td> <td>                             ・愛知にイベントや                              遊ぶところを作っ                              て、人を呼ぶ。                              ・英語が話せるカ                              ウンセラーを学                              校にやと。                         </td> </tr> </tbody> </table> 4. 1年間の学習を振り返る ・これまでに学習した内容を振り返り、感想(考えたこと・気 づいたこと)を書く。	私にできること	仲間とできること	蟹江町・国ができること	・外国語を覚える。 ・あいさつをする。 ・ゴミ拾いをする。	・困っている人が いたら、助ける。 ・蟹江町をPRす る。	・愛知にイベントや 遊ぶところを作っ て、人を呼ぶ。 ・英語が話せるカ ウンセラーを学 校にやと。	・学習していない言葉を確認することで、「年少人 口」、「生産年齢人口」、 「老年人口」推移の関係に ついて読み取れるように する。  ・前時の学習で考えた、「移 住するとしたら「楽しみな こと」・「心配なこと」のプリ ントを見ながら考えること で、自分が移住する気持 ちと、外国人が日本に来 る時の気持ちに共通点 があることに気づけるよう にする。  ・「私にできること」は、すぐ に始められるような、普段 の生活でできることを考 えるように声をかける。	・厚生労働省「「外 国人雇用状況」の 届出状況まとめ」に 基づく集計 ・RESAS(地域経済 分析システム)の統 計資料(蟹江町版)
私にできること	仲間とできること	蟹江町・国ができること							
・外国語を覚える。 ・あいさつをする。 ・ゴミ拾いをする。	・困っている人が いたら、助ける。 ・蟹江町をPRす る。	・愛知にイベントや 遊ぶところを作っ て、人を呼ぶ。 ・英語が話せるカ ウンセラーを学 校にやと。							
<b>評価規準に基づく 本時の評価</b>	・人口の推移のグラフから、蟹江町(日本)の人口減少について読み取ることができる。 ・住みやすい町にするために、自分にできることを考えることができる。								

## [総括・まとめ]

<b>学習方法および外部との連携</b>	<p>【学習方法】 体験や交流（インタビューやビデオレター交流）を通して、外国の文化を知り、人と繋がることで、世界の出来事が自分事として捉えられるように単元を構成した。また、学習では、グループワークを取り入れることで、意見を交流しながら考えを深められるようにした。</p> <p>【外部との連携】</p> <p>① JNNE「世界一大きな授業」</p> <p>② JICA 中部 青年海外協力隊元隊員（山本光恵氏）による国際協力出前講座 ・事前に「ねらい」を伝え、エチオピアの国の概要や文化・習慣、協力隊の活動についても話していただいた。</p> <p>③ パラグアイ ピラポ日本語学校6年生との交流（ビデオレター） ・パラグアイ現地研修にてお会いした、青年海外協力隊澤田千秋隊員と学校間の交流を進めた。互いの学校や地域について紹介した。</p>
<b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習発表会で保護者による参観。</li> <li>・授業実践を他学年の教員にも参観してもらうとともに、授業で使用したパワーポイントや成果物を学年の掲示板に掲示し、校内でもより多くの人たちに見てもらえるようにした。</li> <li>・教師海外研修と本実践について、職員に対して報告会を行った。</li> </ul>
<b>苦勞した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の展開を考える中で、学校行事との関係で日程を調整することが困難であった。そのため、単元計画が前後する場合もあり、児童の思考に合った構成を考えることに苦勞した。</li> </ul>
<b>改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習発表会が11月にあり、学習の成果を保護者に見てもらうことができなかったため、今後は保護者に活動を見てもらえるような授業参観の場や、通信などで紹介することで、保護者にも世界のつながりについて伝えていきたい。</li> </ul>
<b>成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合的な学習の振り返りでは、約8割の児童が意欲的に学習に取り組むことができたと回答した。</li> <li>・現地の写真や資料を見せたことによって、児童の興味を引き出すことができた。また、実際に同年代の児童と交流することによってパラグアイについて興味をもち、その国の歴史や日本の歴史についてより詳しく調べようとする児童の姿が見られた。</li> </ul>
<b>学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国は外国、日本は日本でそれぞれ独自の文化があるからおもしろいんだなと思った。これからは伝統・文化を大切にしようと思いました。</li> <li>・外国を学ぶ前は、外国人なんてしょせん部外者だと思ったけど、学んだ後は、外国人との交流は、とても大事だということがわかった。</li> <li>・ピラポ日本語学校の人たちとの交流や、移住して不安なことや楽しみなことを考えました。みんなの意見を聞いて、同じ意見や違う意見があり楽しく活動できたのでうれしかったです。</li> <li>・私は、外国人にインタビューをするのは、初めてで少しドキドキして怖かったけど、相手はとても優しく、外国人の印象が変わりました。</li> </ul>
<b>授業者による自由記述</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・移住や国籍についてなど、小学生の児童にとっては難しい内容だったが、パラグアイの日本語学校の児童とビデオレターで交流したことがきっかけとなり、世界との関わりが自分事として考えられたのではないかと考える。</li> <li>・日本の歴史や政治について学んだ、6年生の3学期だからこそ理解できる内容であったと考える。</li> </ul>
<b>単元構想・実施における参考資料等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・JICA中部2018年度開発教育指導者研修（実践編）資料</li> <li>・JICA中部2017年度教師海外研修報告書</li> <li>・『世界一大きな授業2018』教育協力NGOネットワーク（JNNE）</li> <li>・厚生労働省 ホームページ</li> <li>・RESAS（地域経済分析システム）の統計資料</li> <li>・JICA Paraguay 映像資料</li> </ul>

## [ 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど) ]



▲ 「パラグアイの子と交流しよう」で制作したしおり

3. 総合的な学習の感想を書こう。

(学んだこと、これからの生活で生かしていきたいこと、調べてみたいことなど)

外国と前より外国人はよくはかたがたに交流して  
けい、学んだ後、外国人との交流は、とても大事  
なことか、わかった。

▲ 児童の振り返り①

3. 総合的な学習の感想を書こう。

(学んだこと、これからの生活で生かしていきたいこと、調べてみたいことなど)

ヒラホ日本語学校の人たちの交流や、  
初住して不安なことや、楽しみなことを  
考えました。 みんなのたくさんの意見聞いて、  
同じ意見やちがう意見があり楽しく活動でき  
たのでうれしかったです。 これからも色々な意見を  
出し合いたいです。

▲ 児童の振り返り③

3. 総合的な学習の感想を書こう。

(学んだこと、これからの生活で生かしていきたいこと、調べてみたいことなど)

総合的な学習で、日本との文化の違い、日本では当  
たり前なこと、違い、日本だけ見ていたけれど、  
外国の問題など、目を広げようになり、また、  
外国の人と会ったり声をかけられたりしたら、  
助けて、日本にいいイメージを持てました。  
日本だけの文化ではなく、色々な不思議な文化が  
あって、とてもおもしろいと思いました。

▲ 児童の振り返り④



▲ 「住みやすい蟹江町・日本にするためにできることを考えよう」

3. 総合的な学習の感想を書こう。

(学んだこと、これからの生活で生かしていきたいこと、調べてみたいことなど)

私は、外国人にインタビューをするのは、初めてで少しドキキ  
して怖かったけど、相手はとても優しく、外国人の印象が変  
わりました。かたがたに発表会では、世界の国々の文化を学ば  
ました。外国人にインタビューしたことを生かして、外国人に会  
たらあいさつをしようと思いました。また、もっと英語を勉強して、  
困っていたら声をかけてみようと思いました。他の国の文化も調  
べてみたいと思いました。

▲ 児童の振り返り④

3. 総合的な学習の感想を書こう。

(学んだこと、これからの生活で生かしていきたいこと、調べてみたいことなど)

いろんなことを勉強して、私たちは何かとつながっている人だ  
てことがよく分かりました。また、未来では、さらに交流がも  
と深まっている人だと思っています。私も、これまで勉強したこと  
を生かして、人と人が何かとつながるようになりたいです。いつまでも  
何かとつながっていることが切れないように、毎日を生きていこう  
と思っています。

▲ 児童の振り返り⑤

## 環境問題 ～私たちにできること～

学校名	愛知県立常滑高等学校		授業者氏名	川合 孝弥
対象学年 (人数)	高校2年生(32名)		実践年月 (時数)	2018年10月 (6時間)
担当教科等	外国語			
単元名 (活動名)	Lesson 5 How Climate Changes Are Affecting Us (教育出版)			
実践する 教科・領域	コミュニケーション英語Ⅱ			
学習領域	[A] 多文化社会 … 文化理解(O) / 文化交流( ) / 多文化共生( ) [B] グローバル社会 … 相互依存( ) / 情報化( ) [C] 地球的課題 … 人権( ) / 環境(O) / 平和( ) / 開発( ) [D] 未来への選択 … 歴史認識( ) / 市民意識( ) / 社会参加( )			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本とパラグアイの同一性に気づく、つながりを理解する。</li> <li>・パラグアイや世界の環境に関する課題について、共に考え、共に越える。</li> <li>・環境問題に対して、自分たちにできることは何か考え、行動する。</li> </ul>			
単元の 評価規準	知識および技能	・地球温暖化をはじめとする、さまざまな環境問題を知る。		
	思考力、判断力、 表現力等	・ペア・ワークの相手や他のグループの考えを理解することができる。また、自分の考えなどを表現することができる。		
	学びに向かう力、 人間性等	・単元で扱われている内容に関心を持つとともに、ペア・ワークやリーディング活動に、積極的に取り組むことができる。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年の成績上位者が集まっており、習熟度別に3展開したうちの1クラスである。習熟度の高いクラスを2つ作り、このクラスは習熟度の高いクラスである。多くの生徒が教員による簡単な指示や説明を理解できている。ペア・ワーク等の活動を多く取り入れ、生徒が積極的にコミュニケーションできるように促している。</li> <li>・現地研修でのカテウラ地区のゴミ問題と関連のある単元を扱いたかったため。</li> <li>・環境問題に対する知識がない生徒が多いため、生徒のレベルに合った読み物を用意したり、参加型手法を使ったりすることで生徒の興味関心を引き出したい。</li> </ul>			

## [単元計画 (全6時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	パラグアイに肯定的に出会う	①仲間探し、名刺で自己紹介(「好きな色」、「幼少期の遊び」、「野望または夢」、「好きなかき氷の味」) 【アイスブレイキング】 ②パラグアイの基礎情報 (クイズ形式) パラグアイの人口、面積、主要産業、また、現地研修での訪問先を紹介した。 ③日本とのつながり ゴマ、日系社会について知る。 ④パラグアイが抱える課題 【フォトランゲージ】 カテウラ地区のゴミ問題やカテウラ音楽団の写真を見て、それがどんな写真なのか考える。また、その写真について説明する。	・現地教材 ・パワーポイント
2	世界の環境問題を知る	①4人1グループに分かれ、海洋ゴミ、森林伐採、地球温暖化、フードマイルについての記事をそれぞれ読む。【ジグソー法】 ②同じテーマを読んだ人同士が集まり、4人1グループで、理解を深める。 ③最初の4人1グループになり、上記の4種類の記事の内容を共有する。	・写真 ・資料①
3	世界の環境問題を知る	①上記の4種類のテーマから自分たちが調べたいテーマの一つを選び、原因を考える。【因果関係図】 ②原因を解決するために自分たちに何をできるかを考え、模造紙にまとめる。また、原稿を書く。	・資料①
4	世界の環境問題を知る	①原因を解決するために自分たちに何をできるかを考え、模造紙にまとめる。また、原稿を書く。(3時間目の続き) ②発表の練習をする。	・資料②③
5 本時	発表①	①グループでポスターセッションをする。他のグループの発表を聞き、質問する。	・評価シート
6	発表②	①生徒全員の前でプレゼンテーションを実施する。発表を聞いている生徒は評価シートに基づいて評価する。	・評価シート

## [本時の展開（5時間目）]

<b>ねらい</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア・ワークやグループワークに積極的に参加し、相手の考えなどを聞いたり自分の考えなどを主体的に話したりする。</li> <li>・気候の変化に対して、自分たちにできることは何かを考える。</li> </ul>		
<b>過程・時</b>	<b>教師の働きかけ・発問および学習活動</b>	<b>指導上の留意点(支援)</b>	<b>資料</b>
導入 1分	1. 本時の流れとねらいを確認する。 本時の授業の展開とねらいを伝える。	・板書を用いて、説明する。	・評価シート
Small Talk 5分	2. 与えられたテーマについてペアで話す。	・対話の前に注意すべき点を伝える。	
発表の練習 10分	3. グループで発表の練習をする。 発表時間を確認しながら、練習をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の練習の前に注意すべき点を伝える。</li> <li>・採点基準を確認し、アイコンタクトや意欲的に発表をするように伝える。</li> </ul>	
発表 32分	4. グループでポスターセッションをする。他のグループの発表を聞き、質問する。 (4人グループを2人1組にし、前後半分かれ、それぞれ2分間の発表を7回)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のグループの発表に対して、質問ができるように、しっかり聞くように伝える。</li> <li>・生徒の様子を見ながら、時間の管理をする。</li> </ul>	
まとめ 2分	5. 本時の内容をふりかえり、次回までの予告を聞く。 次回の発表に向けて、発表のよかったところ、改善できることを伝える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・顔をあげて聞いているか。</li> <li>・ポスターセッションに際して、発表者の良かったところや改善できることを全体に共有する。</li> </ul>	
<b>評価規準に基づく 本時の評価</b>	<p>[知識および技能]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地球温暖化をはじめとする、さまざまな環境問題を知ることができた。具体的には、海洋ゴミ、森林伐採、地球温暖化、フードマイルについてジグゾー法を用いて知ることができた。</li> </ul> <p>[思考力、判断力、表現力等]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「2. Small Talk」では、ペア・ワークの相手やの考えを理解したり、自分の考えなどを表現することができた。</li> <li>・「4. 発表」では、他のグループの考えを理解することができた。また、自分の考えなどを表現することができた。但し、他のグループの考えを理解した上で、即興で質問をしたりすることが難しかったため、授業の創意工夫が必要である。</li> </ul> <p>[学びに向かう力、人間性等]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元で扱われている内容である、環境問題に関心を持つとともに、ペア・ワークやリーディング活動に、積極的に取り組むことができた。具体的には、教科書の内容である、地球温暖化だけでなく、海洋ゴミ、森林伐採によりオラウータンの生息地が減少している問題、地球温暖化による珊瑚の白化現象、フードマイルについてジグゾー法を用いて知ることができた。</li> </ul>		



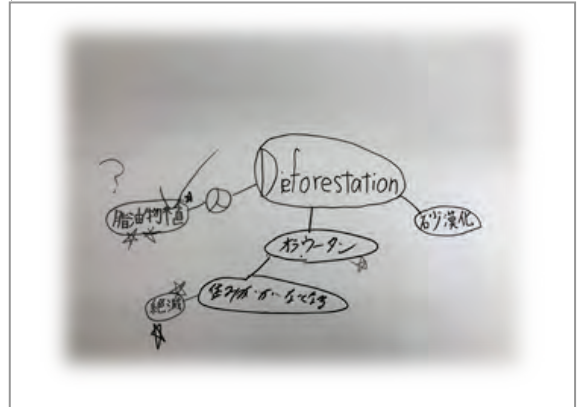
## [総括・まとめ]

<b>学習方法および外部との連携</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加型手法を用いて、生徒が主体的に学習することを促した。限られた時間数であったものの、現地の方との交流等の外部との連携があればさらによかった。</li> </ul>
<b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2018年度愛知県事業「あいちスーパーイングリッシュ・ハブスクール」知多地区第2回地区別授業研修        上記の研修において、研究授業を実施した。また、その後の研究協議では、授業者の感想及び反省、授業に対する質疑応答、協議、助言者からのご指導をいただいた。</li> <li>・愛知県高等学校国際教育研究協議会(AKK)2018年度研究大会        上記の研究大会の分科会において、JICA主催教師海外研修(パラグアイ)報告者による報告として、研修に参加した他2名の教諭と報告をした。</li> </ul>
<b>苦労した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師海外研修で学んだことと授業をどのように関連づけるかが課題であった。研修のなかで、カテウラ地区のゴミ山の光景が非常に印象的であったことと、教科書の内容に環境問題、とりわけ地球温暖化の単元があったため、上手く関連づけることができた。</li> <li>・世界の環境問題を知る上で、教科書以外の海洋ゴミ、森林伐採、地球温暖化、フードマイルについての記事を準備するのが大変であった。生徒のレベルに合う記事を探すのに他の教員からも支援をいただき、大変助かった。</li> </ul>
<b>改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より多くの言語活動を英語で行うことがさらに良かった。しかし、語学力以上に海洋ゴミ、森林伐採、地球温暖化、フードマイル等の環境問題の背景知識が少ないため、さらなる授業の創意工夫が必要である。</li> <li>・ポスターセッション、プレゼンテーションの発表において、発表者に対して即興で質問ができるとさらに良かった。即興で日頃からのトレーニングが必要である。</li> </ul>
<b>成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな参加型手法を用いることにより、学習者が主体的、対話的で深い学びをすることができた。また、自己肯定感や他者理解にもつながった。</li> <li>・環境問題に対して、他人事ではなく、自分事として、自分たちにできることは何か考えることができた。</li> <li>・授業以外の学級においても協同的に学校行事に取り組むことができるようになった。</li> </ul>
<b>学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業者の一方的な授業に比べて、生徒が積極的に授業に参加する様子が見られるようになった。生徒のなかには、グループワーク等の協同的探求学習が好きであるといった意見を聞くことができた。</li> </ul>
<b>授業者による自由記述</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本実践報告以外においても、選択科目である異文化理解の授業においても同様の授業を実施した。そこでは、映画「クロスロード」を鑑賞し、青年海外協力隊の活動を知り、映画を通じて印象に残ったことを共有した。</li> <li>・担当学年の修学旅行では、事前学習として、総合的な学習の時間を用いて、生徒が興味のあるテーマについてグループで調べ、発表した。この際にもマインドマップやポスターセッション等の参加型手法を用いることができた。このように、参加型手法は開発教育国際理解教育以外においても協同的探求学習として活用することができた。</li> </ul>
<b>単元構想・実施における参考資料等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NEW ONE WORLD(東京書籍)</li> <li>・BIG DIPPER(数研出版)</li> <li>・クロスロード(東映ビデオ株式会社)</li> </ul>

## [ 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど) ]



▲ カテウラ地区のゴミ山【フォトランゲージ】



▲ 背景知識が少ないグループ【因果関係図】



▲ 発表の模造紙、原稿を作成する生徒たち



▲ ポスターセッションをする生徒たち

## 虹 ～無限の色でみんなスマイル～

学校名	岐阜県海津市立下多度小学校		授業者氏名	栢山 紗希
対象学年 (人数)	小学校5年生(13名)		実践年月 (時数)	2018年9月～12月 (6時間)
担当教科等	全科			
単元名 (活動名)	社会科「これからの食料生産とわたしたち」 国語科「明日をつくるわたしたち」 学級活動、外国語活動			
実践する 教科・領域	国語科「明日をつくるわたしたち」 社会科「食料生産とわたしたちの生活」 外国語科・異文化理解、学級活動・よりよい人間関係の形成			
学習領域	[A] 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流( ) / 多文化共生( ) [B] グローバル社会 … 相互依存(○) / 情報化( ) [C] 地球的課題 … 人権(○) / 環境( ) / 平和( ) / 開発( ) [D] 未来への選択 … 歴史認識( ) / 市民意識( ) / 社会参加( )			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラグアイの文化や食を通じた世界とのつながりを知ることで、「世界の中の自分」に気付く。</li> <li>・自分とは異なる価値観や背景をもつ人たちの存在を通して、様々な人と気持ちよく過ごすために自分にできることを考えて伝え合う。</li> </ul>			
単元の 評価規準	知識および技能	・日本が抱えている食料生産における課題を知り、他国とのつながりを理解する。		
	思考力、判断力、 表現力等	・パラグアイを題材にした活動を通して、言葉や文化の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることに気付き、共存するために自分ができていることを考える。		
	学びに向かう力、 人間性等	・日本と世界、または仲間同士の思いを受け止め、相手の立場や考え方を理解しようとする。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学級の児童は、互いのことを理解し合い、男女とも思ったことは素直に言い合う児童が多い。しかし、世界に対する関心が低く、初めて出会う出来事に抵抗感をもつ児童もいる。そこで、固執した人間関係にとらわれず、広い視野をもち、他を受け入れられるような児童の育成を目指している。</li> <li>・本実践では、教師海外研修で得た学びを教材化し、児童にとって身近な大人の一人である担任が児童と世界をつなぐことで、世界への関心をもち、自分と世界との関わりを実感できるようにする。また、複数の教科の学習を関連付けて授業を仕組むことで、児童の思考や発達段階に応じた学びとなり、児童の抵抗感を少しでも低くして学習に臨めるようにする。そのために、単元の導入で、児童がクイズの掲示まで動いて答え合わせを進める形式を工夫し、主体的に世界と出会う環境を用意する。中盤では、社会科の食料自給率の問題と関連させて、自分と世界とのつながりを実感できるようにする。終末では、学級内の意見交流の場を位置付けて、自分が世界とのつながりの中でできることを現実的かつ具体的に考えられるようにする。</li> <li>・本時では、パラグアイの良さを考えることを通して、初めて出会う物事に対して良さを見出し、互いの良さを尊重しようとすることを目標とする。その中で、世界に関心をもち、日本の良さとも照らし合わせながら、他国の良さに気づけるようにしたい。</li> </ul>			

## [単元計画（全6時間）]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・パラグアイの文化を知ることを通して、日本とは異なる文化の良さや面白さに気づき、異文化について理解することができる。	『パラグアイってこんな国！』 ・パラグアイ動画を視聴する。 ・パラグアイクイズラリーを行う。 …教室中にパラグアイに関する3択クイズを貼り、児童が解答用紙をもってクイズを解いていく。 ・答え合わせをして、感想を共有する。	・現地研修時の動画、写真 ・クイズ(壁面掲示) ・解答用紙(個別)
2 本時	・パラグアイの良さを考えることを通して、初めて出会う物事に対して良さを見出し、互いの良さを尊重しようとする事ができる。	『日本と世界の良さ見つけ』 ・エピソードカード(体験談が書かれたカード)の交流 ・2色の付箋にパラグアイと日本の良さをそれぞれ書き出す。 ・模造紙に付箋をグループ分けして貼る。 ・気づいたことを共有する。	・現地研修時の体験談
3	・自分の体をつくる食と世界とのつながりを知ることを通して、食料生産に関わる日本の課題に気づくことができる。	『食べ物のルーツをたどろう』 ・半年後(日本への食料の輸入が途絶え、備蓄も尽きるころ)に食べたい夕食のイメージを描く。 ・食料自給率表をもとに描いた夕食の何割ほどが食べられるのか知る。 ・感想を共有する。	・食料自給率表 2017
4	・異なる価値観や背景をもつ人と関わる場面を想定して接し方を考えることを通して、誰にでも感情面で通じるものがあることに気づき、自分にとっても相手にとってもよりよい言動をしようすることができる。	『ようこそ転入生』 ・ミッションカードに書かれた背景や状況の児童になりきり、転入生として学級の仲間に入ろうとする。 ・架空の転入生に対してどんな言動をすべきか考え、実際にやってみる(ロールプレイ)。 ・ミッションカードを引く児童を交代し、様々な状況でロールプレイを行う。 ・それぞれの立場で気づいたことを共有する。	・ミッションカード
5	・様々な人と気持ちよく過ごすためにできることを考えることを通して、自分・学級・行政の視点で解決方法を見つけ、自分にできることを提案することができる。	『気持ちよく過ごすために』 ・これまでの学習を踏まえて、互いに気持ちよく過ごすためにできることを付箋に書き出す。 ・書き出したことを「自分ができること」「学級でできること」「社会ができること」にグループ分けをする。 ・「自分ができること」の中から実際に自分が行動に移すことができる項目を1つ決めて、行動宣言用紙に書く。 ・全体で発表し、行動宣言する。	
6	・これまでの学習と身近な問題をつないで、自分にできることを提案書にまとめることができる。	『明日をつくるわたしたち』 ・新聞記事から関心のあるものを選ぶ。 ・記事から得た情報や既習事項を生かして仲間と話し合う。 ・解決方法を提案書にまとめる。	・新聞記事

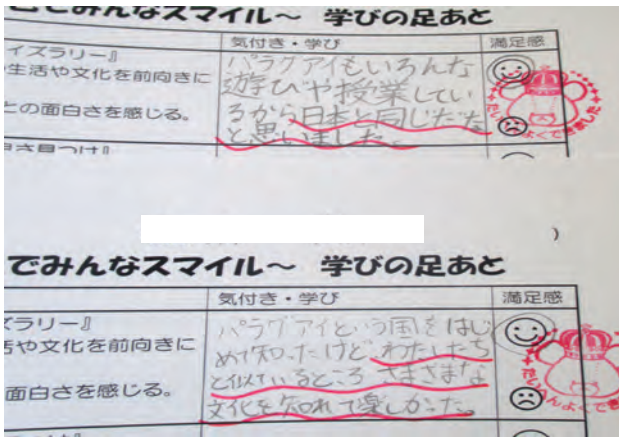
## [本時の展開（2時間目）]

<b>ねらい</b>	・パラグアイの良さを考えることを通して、初めて出会う物事に対して良さを見出し、互いの良さを尊重しようとする事ができる。		
<b>過程・時</b>	<b>教師の働きかけ・発問および学習活動</b>	<b>指導上の留意点(支援)</b>	<b>資料</b>
導入 5分	1. 前時のパラグアイクイズラリーで知ったパラグアイの文化を振り返る。 「前回行ったクイズラリーで、1番印象に残っているのは何ですか。」 ・印象に残っているクイズは、伝統の刺繍のニヤンドウティです。カラフルできれいだけど、由来がクモの巣だということに驚きました。 ・パラグアイの子どもたちの1番人気な食べ物が焼肉だということを知っています。ぼくも焼肉が好きだから、同じだなと思いました。また、肉の塊がすごく大きくていいなと思いました。	・パラグアイがどんな国だったのか想起しやすいように、前時使用したクイズの掲示と答えのカードを黒板に貼る。 ・良さについて印象に残っていることを取り上げ、課題につなぐ。	・クイズ ・答えのカード
展開 35分	2. 課題を確認する。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">日本とパラグアイの良さを見つけよう。</span> 3. 活動1: パラグアイについてのエピソードカード(研修で出会った人との関わりや言葉からまとめたエピソードが書かれたカード)を読んで、クイズにはなかった良さを知る。 ・パラグアイには日本の物事を知っている人がたくさんいること ・初めて出会ったのに家族のように受け入れてもらったこと ・農業をしている人が多く、命の大切さを身近に感じること ・困ったことがあっても、心を広く相手を待つことができる人と出会ったこと 4. 活動2-1: 2色の付箋に日本とパラグアイの良さをそれぞれ書き出す。 ・パラグアイの良さ…きれいな刺繍、日本のことを知っている 等 ・日本の良さ…自然豊か、礼儀正しいことで有名 等 5. 活動2-2: 付箋を模造紙にグループ化し、気付いたことを交流する。 ・グループの例…食べ物、エンターテイメント、自然、性格 等 「模造紙を見て、日本とパラグアイの良さについて気付いたことはありますか。」 ・どのグループにも、2色の付箋が入っていることに気が付きました。だから、日本にもパラグアイにも、食べ物や自然など良いところがあることがわかりました。 ・付箋がわくからはみ出るくらい貼ってあります。日本に良いところがたくさんあるのはもちろん、パラグアイにも良いところがたくさんあることに気付きました。	・児童が自分たちで良さに気付く意識をもてるように、教師が読まずに児童が一人1枚ずつ班の子に読む。  ・多くの意見が出せる環境をつくるために、余分に付箋を配付し、思いついたことからすぐに書いていくよう声をかける。 ・見つけた良さをグループ化して一般化するとともに、日本とパラグアイの良さから共通点や相違点をみつけられるように、模造紙は各班1枚だけ用意する。 ・他の班の模造紙からも気付きを得るために、黒板に全ての班の模造紙を掲示してから学級全体で交流する。 ・個人のまとめを書けるように、単元を通したワークシートを用意する。	・エピソードカード
まとめ 5分	6. 本時の学習から学んだことをまとめる。 <span style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">日本にもパラグアイにも良いところがたくさんあり、その中には、国はととても遠いけど、似ている良さもあることに気づきました。ほかにも似ているところはないか探してみたいです。</span>		
<b>評価規準に基づく本時の評価</b>	・日本と世界、または仲間同士の思いを受け止め、相手の立場や考え方を理解しようとする観点において、パラグアイの良さを実際に書き出すことで、良さを認識することができた。また、一人で考えるのではなく班や学級で交流することで、自分では気づけなかった良さにも気づくことができた。しかし、活動中に「やっぱり日本のほうが良い」というつぶやきがあった。どちらのほうが良いのかという比較ではなく、双方の良さや違いに気づける視点を与える必要があった。		

## [総括・まとめ]

<b>学習方法および外部との連携</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者同士で学び合える環境づくりのために、以下のような活動の工夫をした。             <ul style="list-style-type: none"> <li>①クイズラリーの答え合わせは、児童が一人1枚答えのカードを持ち、答えを発表して教える形式</li> <li>②3～4人班で付箋を貼りながら意見交流を促す形式</li> <li>③ロールプレイでは学級で協力して解決方法を考える形式</li> </ul> </li> <li>・対象児童は国際理解教育として授業を受けることは初めてだったが、仲間と意見を交流する中で共に問題解決しようとしている様子が見えた。</li> </ul>
<b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勤務校にて教師海外研修の報告をした(資料配付と説明)。</li> <li>・実践の一部を実践論文としてまとめ、勤務校の所属する市に応募した。実践論文集に掲載され、市内教員に紹介された。</li> </ul>
<b>苦労した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象児童の小学生にとって、世界という視点が身近ではないために、自分事として感じたり問題意識をもったりという、実感を伴う指導が難しかった。</li> <li>・授業を仕組む上で、単元全体の構成を教科書などの学びから離れないよう時間を確保することに苦労した。</li> </ul>
<b>改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に評価規準や単元との関係性をより明確化して実践に移す。</li> <li>・単発の授業にならないよう、前時との学びの連続性を意識した導入を行う(特に後半の授業実践において)。</li> <li>・テーマを絞って単元計画を立て、出口の行動に生かす視点を明確にする。</li> </ul>
<b>成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食料自給率に関する授業後に、食料以外の輸入品目についても関心をもち、新聞記事を見つけたたり冊子を読んだりする児童の姿があった。</li> <li>・世界の人々の設定で行ったロールプレイから、身近な人に対しても接し方を考えようとする事ができた。</li> </ul>
<b>学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「パラグアイという国を初めて知ったけど、私たちと似ているところや様々な文化を知ることができて楽しかった。」</li> <li>・「日本もパラグアイも、表し方は違うけど、やさしさ(人柄)やエンターテイメントが似ていておもしろい。」</li> <li>・「日本(食)っぽい大豆がほとんど外国(から輸入されたもの)で、しょうゆ、みそ、豆腐など輸入がなくなると大変なことが起こることが分かった。」</li> <li>・「できることを考えると思ったよりたくさん出てきたので、次は実行してみたい。」</li> </ul>
<b>授業者による自由記述</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回、初めて国際理解教育に関する研修を受講し、教師海外研修に参加した。多くの実践例がすでにある中で、実際に自分が見聞きしたことを授業で活用する良さを、児童の反応から感じた。しかし、教師の思いと児童の意識の違いを認識する必要性も同時に感じた。そのために、複数の教科を学級担任が担当する良さを生かし、様々な教科での学びを関連させながら単元を仕組むことを、今回は意識して実践を行った。これからも、児童の視点に立ち、実践を積みんでいきたい。</li> </ul>
<b>単元構想・実施における参考資料等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！考えよう！～』JICA地球ひろば/2013年</li> <li>・『Find the Link どうなってるの？世界と日本 第二版』JICA/2017年</li> <li>・『品目別食料自給率』農林水産省/2016年</li> </ul>

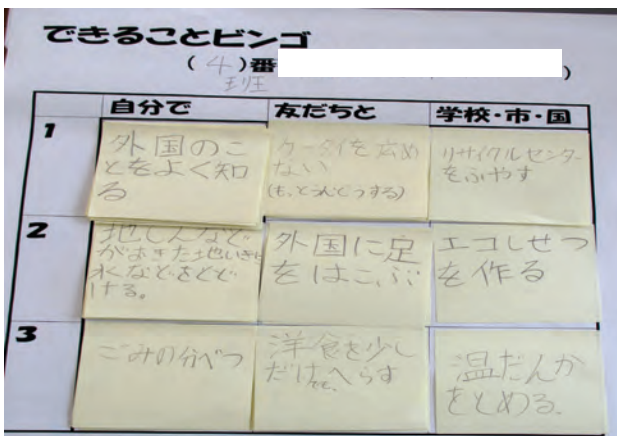
[ 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど) ]



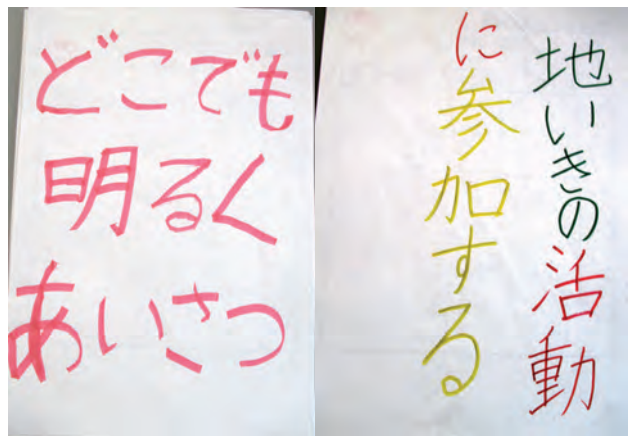
▲ 第1時終了時の児童の感想



▲ 第2時の良さ見つけのまとめ



▲ 第5時できることビンゴ



▲ 第5時できること宣言

**学びの足あと** ～自分にとって大きな学びとは～

自分たちが思っていたこととはちがうことが多くてびっくりした。だから、ほかの国について調べてみたい。

世界には日本人だけではなく、アメリカ、イタリア、パラグアイの人もいることを実感した。実際に行ってみてみたい。

世界と日本には、とても似ているところがたくさんあって、とてもちがうところもたくさんあるということがわかった。もっと自然、人、食べ物を大切にしていきたい。

自分が、だれかや社会のためにできることはたくさんあるので、小さなことでも考え、行動し、それを広めていきたい。

外国の人たちは（日本では）暮らしにくいのに、自分たちは楽しんでいるから、それはやめたい。

社会のことにくわしくなった。パラグアイの文化の面白さを知ることができた。

日本もパラグアイも大きな違いはないし、どちらもいい人が多い。

同じところもあるな おもしろいな

転入生（＝初めて関わる人）がきたときの受け入れ方（がわかった。）

社会では大変なことも起きているから、社会をよきよきしたい。

日本と外国のちがいを学べた。

世界と自分にはちがうこともある。

日本とはちがう国のことをたくさん知れた。

一人一人（仲間同士でも）思うことは違う。

**ちがいを発見！**

▲ 全授業後のふりかえりのまとめ

## 世界へ旅に出かけよう

<b>学校名</b>	愛知県名古屋市長滝川小学校		<b>授業者氏名</b>	高橋 泉名
<b>対象学年 (人数)</b>	小学校5年生(36名)		<b>実践年月 (時数)</b>	2018年9月～ 2019年2月(9時間)
<b>担当教科等</b>	全科			
<b>単元名 (活動名)</b>	世界の問題について考えよう			
<b>実践する 教科・領域</b>	総合的な学習			
<b>学習領域</b>	[A] 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流(○) / 多文化共生(○) [B] グローバル社会 … 相互依存( ) / 情報化(○) [C] 地球的課題 … 人権( ) / 環境( ) / 平和( ) / 開発(○) [D] 未来への選択 … 歴史認識( ) / 市民意識( ) / 社会参加( )			
<b>単元目標</b>	・多様な価値観や文化を肯定的に捉え、世界に関心をもつことができる。 ・自ら知ろうと行動し、多面的に物事を見ることができる。			
<b>単元の 評価規準</b>	<b>知識および技能</b>	・考えたテーマに沿って、資料やインターネットなどを活用し、世界の国々や日本の課題を理解し、その問題を解決するために自分自身ができることについて説明することができる。 ・パラグアイについて調べることで、その国独自の良さに気づくとともに、日本の良さについても理解できる。		
	<b>思考力、判断力、 表現力等</b>	・調べ学習を通して学習した世界の国々の課題の原因から、身近で実践できる、課題を解決するための方法を考えることができる。		
	<b>学びに向かう力、 人間性等</b>	・実社会の中から積極的に問いを見出し、日本人と外国人がよりよく共存するための方法を意欲的に考えている。 ・日本とは違う文化をもつ外国や、世界の国々を取り巻く課題に興味をもつことで、日本や自分自身には何ができるのかを意欲的に考えることができる。		
<b>単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材観 から)</b>	・本校は、転出入が多い学校で、愛知県以外で育った児童も少なくはない。また、海外で育ち日本に帰ってきた児童もあり、話し方や習慣が違うことに偏見をもつことは少ないように感じる。児童に、身近にいる外国人について尋ねた際には、「近くに大学がたくさんあって、留学生がたくさん歩いているよ」という答えが多く返ってきた。外国人を日常的に見かける機会があり、外国を遠い存在と感じている児童は少ないと考える。一方で、児童にパラグアイのイメージを尋ねると「学校に通えない子がいる」「貧しくて、土で作った家に住んでそう」など自身のイメージで国の様子を判断する発言が見られた。そこで、本単元では、相手のことを自ら知ろうとし、相手の良さを認めて人と接する大切さについて考えられるようにしたい。 そのため、パラグアイを例に取り、その国の良さを発見する活動を行ったり、パラグアイの課題や世界の課題について調べ学習を行ったりする。この活動を通して、自分たちは違う国で暮らしているからと、日本に住む自分自身の価値観で判断をしたり、「違う」ということに偏見をもったりするのではなく、違うからこそ興味をもち、理解しようという態度を養う。このことは、本単元のねらいである、「多文化を理解し受容する力」と「自ら知ろうと行動し、多面的に物事を見ることができる力」の2つの力を育成する上で、意義があると考えられる。			



## [単元計画 (全9時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・いろいろな価値観と出会い、身近な人や他国との違いを感じることができる。	・自分の身近にいる友達でも、価値観に違いがあることに気づくために、アクティビティ「四つの隅」を行う。 ・パラグアイの子どもたちが大切だと思っていることと、日本で生活している自分自身が大切に思っていることを、ビンゴゲームを通して知り、共通点や相違点を見つける。	
2	・文化や生活習慣が違う国について興味をもち、「違い」との出会いを楽しむことができる。	・パラグアイについてもイメージを整理し、自分自身がパラグアイに抱いているイメージを考える。 ・パラグアイに関する基礎知識を知る。	
3 本時	・文化や生活習慣が違う国について興味をもち、その国の独自の良さを認めることができる。	・パラグアイに関するものを実際に触ったり、使ったり、五感を使って日本の文化や生活との違いを感じる。	・パラグアイ BOX
4	・イメージと事実を比べることで、自ら知ろうとする気持ちが大切であることに気づくことができる。 ・パラグアイが抱える問題を知り、日本も同じように課題を抱えていることに気づくことができる。	・パラグアイに対して抱いていたイメージと、実際にパラグアイと出会ってみて感じたことを、ワークシートを活用して比べる。 ・問題を解決するために、多くの方が尽力していることを知り、現地の人の想いに触れる。 ・社会科で学習したことを基に、日本が抱える課題について思い起こす。	・パラグアイに関する写真
5	・世界の人々が抱える課題について興味をもち、もっと知りたいと思ったことを基にテーマを決めることができる。	・ニュースや新聞などで見た、世界が抱える問題について知っていることを整理する。 ・その中でさらに知りたいと思ったことを基に、調べていくことのテーマを一人一人決める。	
6	・テーマにそって調べ学習を行うことができる。	・本やインターネットを活用して、テーマに沿って調べ学習を行う。 ・発表をする際に、必要な資料を集める。	【資料】 「世界の子どもたち」 「世界の水問題」 「砂漠化する惑星」
7	・テーマにそって調べ学習を行うことができる。	・本やインターネットを活用して、テーマに沿って調べ学習を行う。 ・発表をする際に、必要な資料を集める。	
8	・世界の課題から、自分にできる課題を解決する方法について考え、発表原稿や資料に表すことができる。	・身近に取り組むことができそうな課題を解決するための方法について考える。 ・テーマに沿って効果的な発表をするために資料作りを行う。	
9	・世界の課題、課題を解決するための方法について、資料を効果的に用いて伝えることができる。	・資料を提示しながら、原稿を基に発表を行う。 ・友達の発表を聞いて、共感したり、興味をもったりした意見や、自分も協力できそうな課題を解決するための方法について知る。 ・単元のまとめを行う。	

## [本時の展開 (3時間目)]

ねらい	<p>・パラグアイに住む人々の様子や文化について調べ、日本との共通点や相違点に興味をもち、自国の良さや相手国の良さについて気づくことができる。(他者や社会とのかかわりに関すること)</p>		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
3分	<p>1. 前時に考えたパラグアイに対して、自分のイメージについて思い起こし、それを基に、めあてを立てる。</p> <p>(1) 大切な物ビンゴについて思い出し、自分のイメージとパラグアイの国の実際の様子が違っていたことを思い出す。</p> <p>(2) 自分のステレオタイプに気づき、知ることの大切さを実感したことを基に、めあてを教師とともに立てる。</p>	<p>・自分がどのようなイメージを抱いているのかを想起させるために、前時に使用したワークシートを手元に置いておく。</p>	
5分	<p>2. 教師とともに簡単なパラグアイの概要をつかむ。</p> <p>(1) パワーポイントを見ながら、パラグアイの基本情報をつかむ。</p> <p>(2) クイズを行うことで、調べ学習への興味付けを行う。</p>	<p>・活動3の興味関心を高めるために、クイズの答えは教師から伝えず、調べ学習で答えを探すように指示し、次の活動に繋げる。</p>	
15分	<p>3. パラグアイの特色について調べる。</p> <p>(1) <u>衣食住のブース</u>ホームステイや街並みの写真、パラグアイ料理に使われている香辛料、民族衣装、民芸品、パラグアイ音楽、お金</p> <p><u>仕事のブース</u>パラグアイ働く人クイズ、観光パンフレット</p> <p><u>自然のブース</u>パラグアイの植物や鳥の写真</p> <p><u>学校のブース</u>現地の学校の様子の写真、教科書などが置かれている各ブースを、ワークシートを持って周り、日本とパラグアイの共通点や相違点を見付ける。</p> <p>(2) 日本と似ていると思った点や、違うと感じた点を発表する。</p>	<p>・衣食住、仕事、自然、学校のブースがあることを伝え、全てのブースを個人で回るように指示を出す。</p> <p>・違う文化に触れることを楽しむことができるように、「旅行をしよう」と伝えたり、ワークシートをパスポートとしたり、教師の言葉掛けを工夫する。</p> <p>・違う文化を肌で感じるために、五感を刺激する教材を衣食住のブースに置く。</p>	<p>・パラグアイBOX</p> <p>・パラグアイに関する写真</p> <p>・伝統ダンスの動画</p>
17分	<p>4. 全体でまとめを行う。</p> <p>調べてみて、住みたいと思う国の魅力について意見交換をする。住みたいと思う国の国旗を名札に付けて、パラグアイと日本どちらに住みたいか、またその理由は何かについて意見交換をする。</p>	<p>・自国との「違い」を、相手国の魅力として考えた児童の発言を取り上げて、違うことの良さを伝える。</p> <p>・意見が偏らないように、名札に付いている国旗を見て、自分の発言が終わったら、違う意見をもった友達を次に指名するように伝える。</p>	
5分	<p>5. 次時の確認を行う。</p>	<p>・各国には良さがたくさんあるが、課題もあることについて触れ、次時は世界が抱える課題について考えていくことを伝える。</p>	
<b>評価規準に基づく 本時の評価</b>	<p>・パラグアイに住む人々が大切にしていることや、パラグアイの様子を写真や民芸品などの情報の中にある特徴から見つけ、日本との共通点や相違点に気づくことができる。 【ワークシート】(学習方法に関すること)</p>		

## [総括・まとめ]

<p><b>学習方法および外部との連携</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外青年協力隊員のインタビューの様子を伝えることで、世界の課題の解決に向けて行動をしている日本人について知り、ボランティアをする際に大切にしていることについて学んだ。ある専門家が言った「外国の課題を解決しているように見えて、実は日本のためでもある」という言葉に、世界のつながりを感じることができた。生の声なので、子どもたちも興味を高く示していたように感じる。</li> <li>JICAから発行されている、世界の課題やその課題を解決するための方法について書かれた冊子を活用して調べ学習を行った。難しい内容である世界の課題もイラストやまんがなどで書かれており、児童が理解できるような工夫がされていたため、とても効果的に活用することができた。</li> </ul>
<p><b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>総合的な学習の教科主任として、初任者に示範授業及び、校内への公開授業を行った。</li> </ul>
<p><b>苦勞した点</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師が異なる文化・生活・習慣などを、断定的に評価をして伝えることで、子どもたちを偏見や誤った理解に陥らせることがないように、国際的課題や実情の伝え方については大変慎重に考えた。</li> </ul>
<p><b>改善点</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童が調べた世界の課題を解決するために、行動できることを実践し、振り返る活動まですることができなかったため、自分の行動で世界を少しでも変えられるのかもしれないという思いをもつことが十分にできなかった。</li> <li>課題を解決するための方法を振り返る際に、「私たちと同じ年の子どもたちを救うためにも、行動していきたい」という記述があった。課題を解決していくことは私たちにもできるという意識は強くなったが、世界が課題を抱えていることを他人事として捉えている一面も見られた。</li> <li>テーマを設定する際に、環境、食料、教育、健康の課題からそれぞれ一つ選び調べ学習を行ったが、設定が広がったために発表の内容も様々で、同じ友達の発表を聞いて学びを得る活動が十分にできなかった。そのため、発表会は同じ課題を選んだ人でグループを作りその中で行うか、初めから調べ学習を行う課題を精選しておくべきであったと考える。</li> </ul>
<p><b>成果が出た点</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界の国々について、もっと知りたいという関心をもつことができたこと。</li> <li>日本での取り組みが世界の課題解決の第一歩となることや、課題を解決するための方法は、身近に行うことができることもたくさんあると気づく児童が多かったこと。</li> </ul>
<p><b>学びの軌跡</b>  (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</p>	<p>・9月の実践前に行ったアンケートでは、「自分たちの力で、世界を平和にすることができると思いますか」という質問に対して、「日本のほんの一部の人の行動では、そう簡単に日本全体には広がらないから」ということを理由に、「あまり思わない」と答えていた児童が、1月に行った実践後のアンケートでは「自分たちの声は世界に届かないし、自分が国に何かを言っても何も変わらないけど、募金など小さな行動をしたらそれが大きな行動につながると思う」ということを理由に「まあまあ思う」に変化をしていた。このように、自分たちの身近には課題を解決するための方法があることに気づき、その行動の意義について理解を深めた児童が見られた。</p> <p>【「自分たちの力で、平和な世界にできると思いますか」という設問のアンケート結果】5年2組 34名</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="422 1697 869 2027"> <p>自分たちの力で、平和な世界にできると思いますか？ (9月 実践前)</p> <p>0% 15% 24% 61%</p> <p>● とても思う ● まあまあ思う ● あまり思わない ● 思わない</p> <p>《9月 実践前の結果》</p> </div> <div data-bbox="893 1697 1340 2027"> <p>自分たちの努力で平和な世界にできると思いますか？ (1月 実践後)</p> <p>12% 30% 0% 58%</p> <p>● とても思う ● まあまあ思う ● あまり思わない ● 思わない</p> <p>《1月 実践後の結果》</p> </div> </div>

	<p>・「今まで、学校に通えない国の子どもたちのことをニュースで聞いて、ただかわいそうと思っていたけれど、この授業を通して、その国の何が問題でかわいそうだと思うのかということ詳しく説明できるようになった」と、知ることの大切さに気づいた児童もいた。</p> <p>・実践後の後期アンケートで「自分たちの力で、世界を平和にできると思いますか」という質問に対して、「あまり思わない」という解答をした児童もいた。記述には、「感染症、国同士の紛争の問題などはすぐに無くなっていくものではないから」とあった。課題を解決するための方法は多くあるということを知った上で、それでも世界の課題は根深いものであるということを理解したように感じる。</p>
<p><b>授業者による自由記述</b></p>	<p>・調べ学習の際に活用したJICAの資料が、まんがやイラストで児童に楽しく伝える工夫がされていたり、世界の課題が子どもにも分かるように分かりやすく公正に説明してあったりしたので、難しい内容を理解する際には大変効果的であった。</p> <p>・実践を通して、インターネットで調べ学習をしたり、発表会をしたりしたことで、情報モラルを守ることの大切さや、得た情報をまとめる力、相手に簡潔に意見を伝える力を伸ばすことができたと考ええる。</p>
<p><b>単元構想・実施における参考資料等</b></p>	<p>・『世界の水問題』『世界の子どもたち』『砂漠化する惑星』JICA冊子</p> <p>・JICA中部2017年度教師海外研修報告書</p>

### [ 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど) ]

<p>○ 大切なものビンゴや、パラグアイの友達と交流をしてみて、どうでしたか?</p> <p>場所が遠くはなれても考えることは同じなんだな、と思った、やはり手紙が大切だからくりから会ってみた。</p>	<p>○ 大切なものビンゴや、パラグアイの友達と交流をしてみて、どうでしたか?</p> <p>もど貧困だと思ってるけど、ゲームやけいおんなみたいなものをやって、以外と私たちの生活にしているんだなって思った。や貧困なところや、物がないところの差が、大きすぎた。</p>
--	---

▲ 【自分のイメージと違うこともあって驚きました。「知る」ことの大切さを実感しました】

○ **自分たちの努力で、平和な世界にできると思いますか?**

とても思う    まあまあ思う    あまり思わない    思わない

子どもたちだけでは、ほじりつなとかえんたい、しかしゴミひろいや、環境意のことだからできるかも!

---

○ **自分たちの努力で、平和な世界にできると思いますか?**

とても思う    まあまあ思う    あまり思わない    思わない

地球温暖化は、こみをへらして、二酸化炭素をへらすことで、お方止できるし、感せん症は、手洗いうがい、をすることで(みんなの力は努力)とめらけてから。

▲ 【世界の課題を調べてみて、私たちにも今から行動できることがあるということに気づきました】

○ 自分たちの努力で、平和な世界にできると思いますか？

とても思う    まあまあ思う    あまり思わない    思わない

痛げん体は、いつどこにいてもかかる、  
病気になるから。

○ 自分たちの努力で、平和な世界にできると思いますか？

とても思う    まあまあ思う    あまり思わない    思わない

私たちはまだ1歳の子どもを育てたいくさんの方が  
興味・関心を持っては世界が平和になると思う  
です。でもどうやらここに批判する人もいるのでどうかなと思う。

▲ 【世界には深刻な課題もあり、課題を解決しようとするのが簡単なことではない一面も知りました】

## 世界授業 “いいね！”、っていいね！

学校名	愛知県津島市立東小学校		授業者氏名	宮川 勇作
対象学年 (人数)	小学校1年生(29名)		実践年月 (時数)	2018年7月～ 2019年1月(9時間)
担当教科等	全科			
単元名 (活動名)	「せかいの 人と つながろう」・「せかいの 人と いっしょに」			
実践する 教科・領域	学級活動・道徳〈国際理解教育〉			
学習領域	[A] 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流(○) / 多文化共生(○) [B] グローバル社会 … 相互依存( ) / 情報化( ) [C] 地球的課題 … 人権( ) / 環境(○) / 平和( ) / 開発( ) [D] 未来への選択 … 歴史認識( ) / 市民意識(○) / 社会参加(○)			
単元目標	・自分と他者のちがいに気づき、肯定的に受け止め、認め合うことができる。 ・自国と他国の文化や環境のちがいを知り、課題に対して仲間と共にできることを考える。 ・日頃の生活の中で感じている当たり前のことには、たくさんの支えがあるということに気づく。			
単元の 評価規準	知識および技能	・世界的な課題とその原因が何かを理解することができる。		
	思考力、判断力、 表現力等	・世界的な課題を自分事に感じ、解決するために自分ができることは何かを 考えることができる。		
	学びに向かう力、 人間性等	・友達の考えを肯定的に受け止めながら、課題解決のために話し合うことが できる。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	・本クラスは、小学1年29名(男子16名・女子13名)が在籍している。4月から新入生として新たな 集団での学校生活が始まり、一人一人が小学校で学ぶことに期待と不安を感じている。発達段階と しても、自己を客観的に捉えることは難しく、いかなる場面でも自分の意見を主張したいという意思 が強い。 そこで、「共生」をテーマに普段の生活を振り返り、自分が他者との交界りのなかで生活をしてい ることや他者の考えに耳を傾け、「いいね！」を合言葉に、それを肯定的に受け止めることで自他共に 互いを認め合い、安心感と信頼を高められると考える。 また、自分を支えている人やものは、姿が見える身近なものだけではないことや、自らが豊かなく らしをする一方で、さまざまな課題を抱えながら生きている他者がいることにも気づけるようにしたい。 さらに、その課題を解決するための行動として、自分たちには何ができるかを考え、話し合い活動 を通して深め、共有し、それぞれを認め合いながら、児童の今後の生活に役立たせていきたい。 ・本単元のなかでねらいとする「他者を肯定的に受け止められる力」は、自国と他国の文化や風習の ちがいをそれぞれの良さとして捉えることができる多角的な視点を育み、今後、持続可能な世界を 築くために必要不可欠な感受性を育てることができるのではないかと考える。			

## [単元計画 (全9時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・1日の生活をふりかえり、自分が行動をたしかめる。	①毎日の生活の中で、朝起きてから、夜寝るまでの間にしていることを1項目1枚の付箋に自由に書き出し、グループで共有する。 ②書き出した付箋を〈1人でできること〉と〈1人ではできないこと〉に分類する。	
2	・日頃の生活の中で感じている当たり前のことには、たくさんの支えがあるということに気づく。	①〈1人でできること〉は、誰に支えてもらってできるようになったのか、また、〈1人でできないこと〉は、誰に支えてもらって行なっているのかを考え、A4用紙に書き出す。 ②書き出したものをグループで共有する。	
3	・自分の生活を支えてくれている存在に感謝の気持ちを持つ。	①日頃から自分を支えてくれている人やものに向けて、感謝の気持ちを込めて、グループごとにサンキューレターを書く。 ②書いたものを全体で発表する。	
4	・パラグアイの文化や習慣を知り、日本との共通点やちがいに気づくとともに、どちらにも良さがあることを理解する。	①パラグアイについて初めて知ったことや日本との共通点とちがいについて、気づいたことをグループごとに共有する。 ②私たちとパラグアイの繋がりを知り、パラグアイを身近に感じる。 ③世界の国々には、解決しなければならないたくさんの課題があることを知り、次時以降の実践に繋げる。	・パラグアイのプレゼンテーション(自作) ・一般的な写真(学校、家庭料理、街並み、子どもたちの様子など) ・パラグアイの国旗・民芸品など
5	・食べるものはどこから来ているかに興味を持ち、世界には食べものがなくて困っている国があることを知る。	①食べ物を捨てている国と食べるものがなくて困っている国があることを知り、飢餓をなくすために自分たちができることを帯状の白紙に個人で1つ書き出す。	・写真(飢餓に苦しむ国の子どもたちの様子や大量の食糧廃棄) ・JICA資料「世界の食料」
6	・食べものがなくて困っている国をなくすために自分たちができることを考える。	①書き出した考えをグループで共有し、「みんなで頑張りたい順」に並べながら、模造紙に貼る。 ②出来上がった模造紙を提示しながら、全体に発表する。	
7 本時	・世界には、学校に行けないたくさん子どもたちがいることを知る。 ・学校に行けるのは当たり前ではないことを理解し、世界中の子どもたちがみんな学校に行けるようにするには、どんなことが大切かを考える。	①ロールプレイを通して、文字が読めない不便さを気づき、世界には学校に行けない子どもたちがいることを知る。 ②どのような原因で学校に行けないのかを知る。 ③児童労働を取り上げ、谷川俊太郎氏の「そのこ」の動画を視聴する。 ④世界中の全ての子ども達が学校に行けるようにするために自分ができることを考え、グループで1枚模造紙に書き出す。 ⑤書き出したことを全体へ発表し、「いいね！」と感じた意見を友達に伝える。	・ペットボトル(ネパール語で「水」・「薬」・「毒」と書いたラベルのもの) ・JICA資料「学校に行けない世界の子どもたち」 ・動画「谷川俊太郎 そのこ」
8・9	・世界的な課題を自分事と捉え、その解決に向けて行動できることを積極的に考える。	①SDGsを知り、興味がある目標の一つを選んで、達成するために大切なことを考える。 ②これまでの単元学習をふりかえり、今後も世界に目を向けながら、どんな人の考えも肯定的に受け止めたり、自分にできることを考えたりして、他者と協力していくことを伝える。	・SDGsイラスト掲示物 ・ワークシート(自作)

## [本時の展開（7時間目）]

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界には、学校に行けないたくさん子どもたちがいることを知る。</li> <li>・学校に行けるのは当たり前ではないことを理解し、世界中の子どもたちがみんな学校に行けるようにするには、どんなことが大切かを考える。</li> </ul>		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 10分	1. 文字が読めない生活を体験する。(ロールプレイ) <b>【発問】</b> 「お母さんが風邪をひいてしまいました。風邪薬を買いに来たあなたの目の前には、3種類のペットボトルがあります。この中から風邪薬を選んでください。」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・指名した児童が風邪薬だと思うものを選び、選んだペットボトルを全体に見せる。</li> <li>・それぞれのペットボトルの中身は何かを全体に伝える。</li> <li>・文字の読み書きは、学校で学習するという事に気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラベルがネパール語で書かれた3種類のペットボトル(薬・毒・水)を用意し、母親のために薬を買うことを想定してロールプレイをする。</li> <li>・文字が読めないと手に取った品物が何なのか分からないことから、文字が読めない不便さを体験から感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペットボトル</li> <li>・ネパール語のラベル</li> <li>(出典:ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら)</li> </ul>
展開 25分	2. 本時のめあてを知る。 <b>【めあて】</b> <u>すべての子どもたちが学校へいけるせかいをつくらう。</u> 3. なぜ学校に行けない子どもたちがいるのかを知る。 (1) 世界には学校へ行けない子どもたちがどれぐらいいるか知る。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「世界がもし29人(本学級児童数)の村だったら」と仮定し、約5人に1人が学校へ行くことができていない現状を知る。</li> </ul> (2) 写真を見て、学校に行けない原因を考える。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような原因で学校に行けないのか、写真を見ながらグループで話し合う。</li> </ul> (3) 動画を視聴する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童労働について感じたことを発表する。</li> </ul> 4. 世界中の全ての子どもたちが学校へ行けるようにするために、大切なことを考える。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・本時で知ったことをもとに、グループで1枚の模造紙に自由に書く。                →もっと学校をたくさん作る。                →子どもが働かなくてもいいようにする。                →学校に行っている人に勉強を教わる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のめあてを掲示する。</li> <li>・世界中で学校に行けない子どもたちがどれぐらいいるか予想する。</li> <li>・学校に行けない原因を示した7種類の写真を黒板に掲示し、内容を伝える。</li> <li>・谷川俊太郎の「そのこ」を視聴する。</li> <li>・どんな意見も肯定的に受け止めるよう伝える。</li> <li>・5人グループで話し合う。</li> <li>・模造紙にそれぞれの意見を書き出すよう指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラスト</li> <li>(出典: JICA 資料 学校に行けない世界の子どもたち)</li> <li>・動画</li> <li>(谷川俊太郎 「そのこ」)</li> </ul>
まとめ 10分	5. 話し合った内容を全体へ発表する。 6. 本時の振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模造紙を提示し、グループで話し合ったことを代表者が発表する。</li> <li>・みんなで考えたことをふりかえる。</li> </ul>	
<b>評価規準に基づく 本時の評価</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学1年生の児童が扱う課題としては、難易度が高いと思われたが、自分たちと同年代の子ども達のが主題だったため1時間を通して意欲的に取り組む児童が多かった。</li> <li>・自分達の生活と比較すると実情がかけ離れすぎていて、想像が追いつかない児童もいた。</li> <li>・全体での発表ではなく、模造紙を回し読みしながら「いいね!」と思った意見に印をつけていくようなアクティビティを入れたほうが振り返りに繋げる上で効果的だった。</li> </ul>		



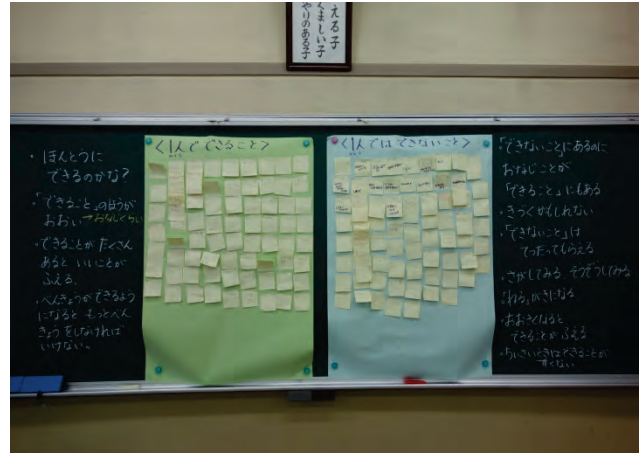
## [総括・まとめ]

<b>学習方法および外部との連携</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師による一斉指導の時間をなるべく削り、本単元のねらいでもある「友達の考えを肯定的に受け止める」ことに向けて、児童が自分たちで考え、表現し、反応する流れを大切に。また、発達段階を考慮し、シンプルかつ思考的にも視覚的にも有効なアクティビティを取り入れる必要があったため、【カード式分類法】・【リストアップ】・【ランキング】を行った。第7時では、主題とした課題を自分事として感じられるようにするため、【ロールプレイ】を行った。</li> </ul>
<b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内の取り組みとして、市教育委員会の学校訪問の際、公開授業として第7時の実践を視察していただいた。また、同学年の他学級にて一部同様の授業を実施した。</li> <li>・校外の取り組みとして、JICA 中部「開発教育・国際理解教育実践フォーラム2018」に参加し、教員や一般の方に向けての実践報告を行った。また、地元の青年教育者有志を募り、同様に本実践の報告会を行った。</li> </ul>
<b>苦労した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達段階を考慮した上で、各アクティビティが実践可能かどうかやどれぐらいの時間がかかるかという点で計画を立てるのに熟慮した。</li> <li>・主題とする課題によっては、肯定的に受け止めにくいものもあり、自分の生活からかけ離れた実情に対し、同情する児童もいたため、受容性を高め、転換させる点で困難があった。</li> </ul>
<b>改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的に前時との繋がりを実感できるような計画を立て、1つの課題に対してもっと多くの時間を費やしなが、深まりのある実践にするとさらに効果があると感じた。</li> <li>・課題解決に入る前に、他国の文化や習慣と肯定的に出会うことに、より多くの時間を割くべきであった。</li> <li>・視覚に訴えるものだけでなく、実物に触れるような体験的要素を盛り込めると良かった。</li> </ul>
<b>成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで知らなかった世界の国々と自分達の共通点や相違点、また世界的な課題やその原因を知ることでさらに児童の知的好奇心を広げることができた。</li> <li>・児童同士が、どんな意見でも「いいね！」と温かく肯定的に受け止めてもらえるという安心感を互いに持つことができた。普段あまり自己主張しない児童でも、本実践をきっかけに自分の考えを表現できるようになり、自己有用感を高めることができた。</li> </ul>
<b>学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の教科の学習活動において、学び合いの授業を実践した際、児童同士で「いいね！」と声をかけ合ったり、ノートに印を付けたりするようになった。</li> <li>・飢餓について授業を行ったことで、食べものの好き嫌いをする児童が減り、給食の残飯は0になった。</li> <li>・SDGsを知り、自分にもできることがあることを実感して、身近な行動から改善していこうとする気持ちが高まった。</li> </ul>
<b>授業者による自由記述</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師海外研修に参加して、他国と肯定的に出会う大切さを実感した。研修時に出会った現地の方々の使命感や人間性に触れ、「教師だからこそできること」を改めて深く考えることができた。授業実践の対象となる児童・生徒の学年や発達段階によって、それぞれに適した計画を熟慮しなければならないが、教師自身が教材となり、自分が肌で感じたことを伝えていくという点では一貫していると思う。また、研修を通して実体験で学んだことは、児童・生徒だけでなく、同じ教鞭をとる仲間にも自信を持って伝えることができる。国際理解教育を実践する上で、同じ思いに立つ仲間が増えることは最大の好循環を生むと感じている。</li> </ul>
<b>単元構想・実施における参考資料等</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『世界の食料』『学校に行けない世界の子どもたち』JICA</li> <li>・『そのこ』谷川俊太郎</li> <li>・『SDGs のうた』未来人 feat. SDGsオールスターズ (Youtube)</li> <li>・ワークショップ版『世界がもし100人の村だったら』開発教育協会</li> </ul>

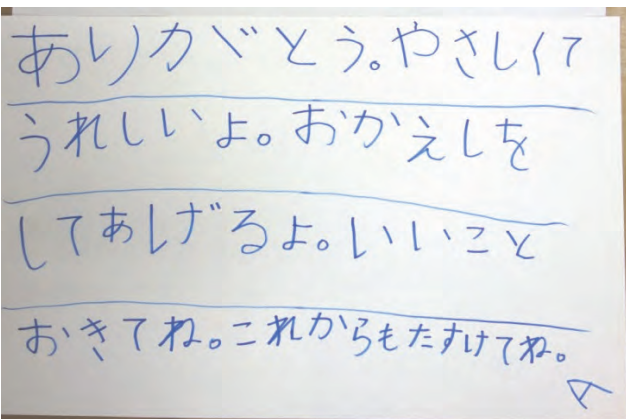
[ 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど) ]



▲ 一日の生活を付箋に書き出す児童の様子



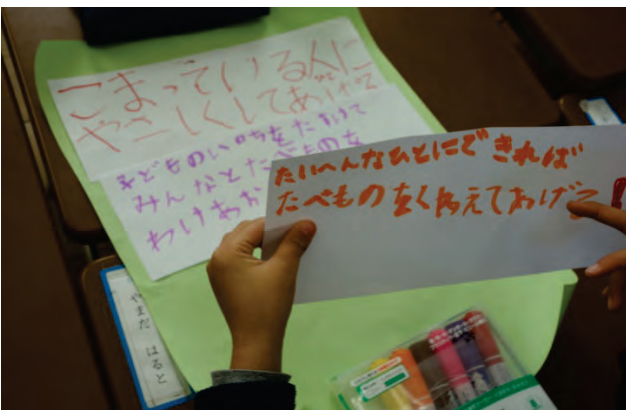
▲ 「一人ですること」「一人ではできないこと」



▲ 感謝の思いをサンキューレターに



▲ パラグアイってどんな国？



▲ 飢餓をなくすために大切なこと



▲ 大切なことランキングを発表



▲ すべての子どもたちが学校に行けるように②



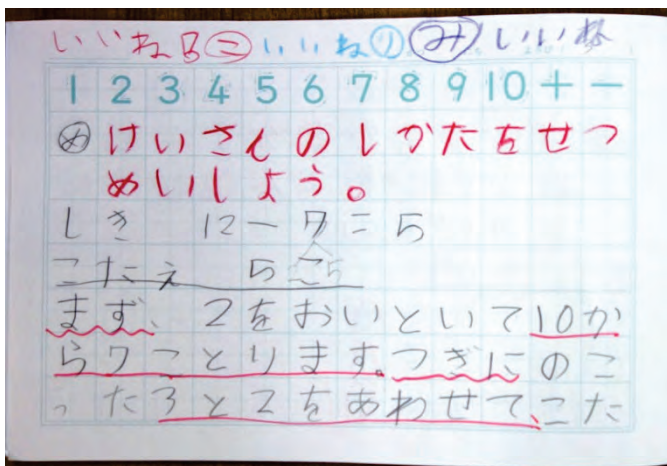
▲ すべての子どもたちが学校に行けるように①



▲ 未来のためにやりたいこと



▲ 毎日給食の残飯が0



▲ 「いいね！」はクラスの合言葉①



▲ 「いいね！」はクラスの合言葉②

## 「わたし」と「社会」はつながっている！

学校名	愛知県立瀬戸北総合高等学校		授業者氏名	村上 偉代
対象学年 (人数)	高校1年生(40名)		実践年月 (時数)	2018年12月～2019年2月 (7時間)
担当教科等	生物・生物基礎・科学と人間生活			
単元名 (活動名)	自分と社会のつながりに気づこう。			
実践する 教科・領域	理科(科学と人間生活)			
学習領域	[A] 多文化社会 … 文化理解( ) / 文化交流( ) / <u>多文化共生(O)</u> [B] グローバル社会 … 相互依存( ) / 情報化( ) [C] 地球的課題 … <u>人権(O)</u> / <u>環境(O)</u> / <u>平和(O)</u> / 開発( ) [D] 未来への選択 … 歴史認識( ) / <u>市民意識(O)</u> / <u>社会参加(O)</u>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身の考えを他者に表現する力を養う。</li> <li>・他者の考えに触れることで、いろいろな価値観、いろいろな良さがあることに気づく。</li> <li>・自分の持つ力に気づき、他者と協働し社会の課題解決のためにできることを主体的に考える。</li> </ul>			
単元の 評価規準	知識および技能	・活動を通じて得られた知識をさまざまな場面で積極的に活用しようとする。		
	思考力、判断力、 表現力等	・自己や他者・社会の現状について主体的に捉え、自分自身の考えを他者へ表現することができる。		
	学びに向かう力、 人間性等	・活動を通じて多様な考え方があることに気づき、自分の未来を主体的に創造しようとする。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<p>・本校には、教員に対して素直で人なつっこい性格の生徒が多い。その一方で、他者とのコミュニケーションが苦手で、授業内でグループ活動や発言をすることを避ける、目に見える結果が表れやすい事柄(試験の点数やアルバイトの賃金など)にとらわれやすく、授業という学びの空間に対するモチベーションが高まりにくいといった課題を抱えている。このような状況が続くことで、本人たちが未来への展望をポジティブに描くことを阻み、進路選択を消極的なものにしてしまっているのではないかと感じている。</p> <p>このような生徒の現状と課題を鑑みて、次のような意識と行動の変容を目指したいと考えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第一に、集団の中で自分の価値観や持ち味について共有する活動を通じて、他者との関わりへの不安を緩和すること。</li> <li>・第二に、他者とともに自分の良さを活かした社会を創造することで、未来に対する希望を持てるようになること。</li> <li>・第三に、現代社会の課題と向き合い、よりよい社会を作る上でどのような行動が必要かを考えられるようになることである。</li> </ul> <p>自分の存在、価値観や行動が他者や社会全体、ひいては地球そのものと繋がっていることに気づくことで、自分のこれまでの考え方や行動を振り返ることに繋がることを期待して、授業の実践を行った。</p>			

## [単元計画 (全7時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・地球と地球の生命が、さまざまな奇跡の連続で誕生したことに気づく。	・動画『地球・46億年の大変動 (1) 生命の誕生』を、解説を交えながら視聴する。	・動画『地球・46億年の大変動 (1) 生命の誕生』 ・動画視聴プリント
2	・地球と地球の生命が、さまざまな奇跡の連続で誕生したことに気づく。(前時の続き)	①動画『地球・46億年の大変動 (1) 生命の誕生』を、解説を交えながら視聴する。(前時の続き) ②感想をプリントに記入し、回収。	・動画『地球・46億年の大変動 (1) 生命の誕生』 ・動画視聴プリント
3 本時	・「大切なもの」というテーマについて、考え方の多様性に気づくとともに、自分や他者の大切なものを大切にしていくなために必要な行動を考える。	①私が大切にしているモノ・コトは何だろう？ ・授業プリントに、自分の考えを思いつくだけ書く。 ②私が大切にしているモノ・コト Best3を選ぼう！ ・①で書いた内容から最優先したい Best3を選ぶ。 ・なぜそれを選んだか、理由をプリントに書く。 ③クラスのメンバーにインタビューしてみよう！ ・ほかの人が大切に感じていることについて、インタビューをする。その際、理由も聞くようにする。 ④大切なものを大切にできなかったら、どんな未来が待っている？ ・グループに分かれ、【派生図】で思いつくままに広げていく。 ⑤大切なものを大切にするために、どんな行動が必要だろうか？ ・グループの中で話し合っ、必要な行動について考えて箇条書きする。	・授業プリント
4	・「カッコいい探し」というテーマについて、考え方の多様性に気づくとともに、課題解決に向けてパラグアイで活動する人々の話を聞いて、視野を広げる。	①冬休み中に目にした「カッコいい！」と思った人物を挙げよう。 ・授業プリントに、「カッコいい」と感じた人物(身近な人だけでなく芸能人でもOK)を書き出す。 ・その人の「カッコいいポイント」はどんなところかを書く。 ②隣の人に紹介しよう！私が「カッコいい！」と思う人 ・①で挙げた「カッコいい！」と思った人について、隣の席の人と共有する。 ・どんなことを感じたか、感想を共有。 ③パラグアイで先生が出会ったカッコいい人紹介！ ・授業者が体験した出会いを紹介し、話を聞いて共感できたところや感想をプリントに書く。	・授業プリント  ・パラグアイで撮影した写真
5	・「私に力(パワー)をくれるもの」というテーマについて、考え方の多様性に気づくとともに、力をもらえることや力を与えることの意味について考える。	①わたしは日々どんなものにパワーをもらっている？ ・授業プリントに、自分がパワーをもらえるものや人について思いつく限り書き出す。 ②パワーをもらえるとどんな気持ちになるかを考えよう。 ・①で書き出したことについて思いを巡らせて、自分の気持ちを振り返る。 ③隣の人に紹介しよう！私に力(パワー)をくれるもの ・①②で考えたことについて、隣の席の人と共有する。 ④「音楽の力」で子どもたちに希望を！カテウラ音楽団のハーモニーを聴こう♪ ・動画を観て、感じたことをクラスで共有する。	・授業プリント  ・カテウラ音楽団の動画

<p>6</p>	<p>・自分の長所や持ち味が活かせる場面を想像し、他者との共有を通してみんなで作る前向きな社会を創造する。</p>	<p>①わたしの持ち味・長所って何だろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の趣味や特技、長所を考えて、プリントに書き出す。</li> </ul> <p>②グループで共有！わたし・あなたの持ち味・長所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで各自が考えた長所などを共有。個人の発表のあとに、「いいね！」を言い合う。</li> </ul> <p>③それぞれの持ち味・長所はどんなところで活かせるだろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・共有した持ち味・長所について、それが活かせる場面をグループでイメージし、箇条書きする。</li> </ul> <p>④力を結集！みんなで「先生」になって学校を創っちゃおう♪</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループのメンバーそれぞれの良さを活かせる『授業』の【イメージ図】を作成する。</li> <li>・完成したイメージ図を黒板に掲示し、クラス全体で共有。</li> <li>・感想をグループで共有。</li> </ul>	<p>・授業プリント</p>
<p>7</p>	<p>・身近な「困りごと＝課題」をとらえ、社会の課題と関連づけながら気づくとともに、その解決に向けて、どんな行動ができるかを考える。</p>	<p>①身近な「困りごと」を考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の身の回りにある「困りごと」を思いつく限り付箋に書き出す。</li> </ul> <p>②グループで共有しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・①で挙げた「困りごと」をグループで共有し、分類する。【カード式分類法】</li> </ul> <p>③社会にはどんな「困りごと」があるだろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・②の結果から、社会の「困りごと＝課題」を考えて書き出す。</li> </ul> <p>④社会の課題を放っておくとどうなる？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・③で考えた社会の課題を放っておくとどうなってしまうか、【派生図】で考える。</li> </ul> <p>⑤社会の課題の解決に向けて、わたしたちにできることを考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題の解決に向けてできることを付箋に書き出し、「個人でできること」「仲間とできること」「社会全体でできること」に分類する。【カード式分類法】</li> </ul>	<p>・授業プリント</p>

## [本時の展開 (3時間目)]

ねらい	・「大切なもの」というテーマについて、考え方の多様性に気づくとともに、自分や他者の大切なものを大切にしていくなために必要な行動を考える。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 5分	1. 前時の振り返り ・前回までに視聴した『地球・46億年の大変動(1)生命誕生』の内容について簡単に振り返るとともに、クラスで出た感想の一部を紹介する。	・「地球は様々な偶然が重なった奇跡の惑星である」というところを全体で確認 ・生徒の感想に出てきた「大切」という部分を意識する。	
展開 40分 (5分)	2. 私が大切にしているモノ・大切にしているコトは何だろう？ ・授業プリントの所定の欄に、自分の考えを思いつく限り書く。	・思考の循環を良くするために、思いついたものはどんどん書き出すように助言。(ただし、自分の中にとどめておきたいことはこの限りではないことも付け加える)	・授業プリント
(5分)	3. 私が大切にしているモノ・コト Best3を選ぼう！ ・先ほど書いた内容の中から、最優先したい Best3を選ぶ。 ・なぜそれを選んだか、理由をプリントに書く。	・机間をまわり、生徒の進み具合を確認しながら声をかけていく。	・授業プリント
(8分)	4. クラスのメンバーにインタビューしてみよう！ ・ほかの人が大切だと感じていることについて、インタビューをする。その際、理由も聞くようにする。	・普段あまり関わっていないと思う人にも積極的にインタビューするよう声かけをする。	・授業プリント
(8分)	5. 大切なものを大切にできなかったら、どんな未来が待っている？ ・グループに分かれ、【派生図】で思いつくままにイメージを広げていく。	・【派生図】の取り組み方について説明をしてから始める。 ・机間をまわり、適宜声かけをする。	
(8分)	6. 大切なものを大切にしていくなために、どんな行動が必要だろう？ ・グループの中で話し合っ、必要な行動について考えて【箇条書き】する。	・机間をまわり、適宜声かけをする。	
(6分)	7. 感想 ・授業プリントの所定の欄に、ワークの感想を書く。		・授業プリント
まとめ 5分	8. 本時のまとめ・授業プリント回収	・各班で出ていた意見を紹介	
<b>評価規準に基づく 本時の評価</b>	・「自分の考えを思いつくままに書いてよい」という指示に対して、最初のうちは「こんな答えでもいいのかな？」と質問してくる生徒が多かったが、ワークが進むにつれて質問の場面は減っていった。 ・インタビューの際、「普段あまり話さない人にもインタビューしてみよう」と伝えたが、様子を見てるとなかなか一歩を踏み出せていない生徒が多かったようである。しかし、ほとんどの生徒が自席を立ててワークに取り組んでいたのも、その点は良かった。 ・時間の設定が甘く、まとめの部分が駆け足になってしまい、グループで出た意見を全体で共有する時間を取れなかった。生徒の思考のプロセスや活動にかかる時間の想定をもっと緻密に考えておく必要がある。 ・全体での共有はできなかったものの、授業プリントに書かれた個人の感想の中には「改めて自分のことを考え直すいい機会になった」「人の意見も聞けて、視野が広がった」などのコメントが見られた。 ・「友情」「家族」など人の存在や、「食べること」「寝ること」など行動の大切さが挙がる一方で、「アイフォン」「スマホ」などの回答も少なからず見受けられた。ヒトやモノとのつながりの手段としてスマートフォンが介在する、現代の高校生事情が垣間見えた。		

## [総括・まとめ]

<b>学習方法および外部との連携</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習方法で重視したことは、「大切なもの」「力をもらえるもの」など、自分の支えとなっている事柄を通じて、他者とポジティブに意見の共有ができるようなアクティビティにしたことである。誰にとっても身近な問いとなるよう意識し、インタビューやグループワークで各自の反応が自然と引き出されるようにした。</li> </ul>
<b>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員会議の一議題に入れていただき、海外研修と授業実践の報告をパワーポイントを用いて10分程度行った。</li> <li>・職員室に開発教育指導者研修実践フォーラムのチラシを掲示し、周知を図った。当日は職場から2名の参加があった。</li> <li>・愛知県高等学校国際教育研究会(AKK)にて海外研修と授業実践の報告を行った。</li> </ul>
<b>苦労した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・報告書に掲載した授業実践の前に、別のクラスで授業実践を行った際に、授業の内容(国際理解・課題解決など)や手法(ペアワークやグループワーク)に興味関心を示してもらえず、ねらいとは程遠い苦しい実践になってしまった。生徒の実態や集団の特性を捉えた上での活動計画が必要だと痛感した。</li> <li>・ねらいを達成するために、どのようなアクティビティを組み込むかがかなり難しかった。実践してみて、生徒の活動の様子を見て初めて「もっとこうすればよかった」と感じるが多かった。</li> <li>・グループワーク＝おしゃべりの時間と捉えてしまい、元気はあるものの活動の意図を汲めていない生徒が一定数おり、声かけに苦労した。</li> </ul>
<b>改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1時間で完結するワークの効果的な時間設定を再検討(今回はあれこれ詰め込み過ぎてしまい、最後がどうしてもバタバタしてしまった)</li> <li>・生徒の興味関心を引きつける言葉や、導入となる話題の選び方(「今日はこれやるから!」と押し付ける形になりがち)</li> <li>・生徒がもっと楽しんでアクティビティに参加できるような教材の準備と使い方(視聴覚教材や付箋・カードなどの素材をどのように活用していくか精選する必要がある)</li> </ul>
<b>成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もともとの集団の力でもあると思うが、クラスに「学び合い」の雰囲気が広がっているように感じることが増えた。以前、止むを得ない事情により授業が監督なしの自習になってしまった時に、「本時のミッション」と称して授業プリントを協力して完成させるよう指示を出したことがあった。授業の終了間際に急いで教室に戻ったら、完成されたプリントを各自が「うちら頑張ったよー!」と誇らしげに見せてくれた。</li> <li>・ワークを通じて、生徒が自分達で取り組むだけでなく教員も経験や考え方を語ることで、同じ話題を共有できるという信頼関係に繋がったと感じる。 ※報告書提出時点では、6時間目・7時間目の実践が終了していない。この2時間の取り組みを通じて、自分の長所を自分自身が肯定できるようになること、自分の長所を活かせる未来を創造できるようになること、自分の持つ力を確信した上で、社会の課題と向き合えるようになることを期待する。</li> </ul>
<b>学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</b>	<p>&lt;大切なものワークの生徒の感想&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで大切なものや大切にするための行動など、考えたことなかったけど、振り返ってみたら、割と生活の中に大切なことも多くあって、1つ1つの小さなことを大切にしようと思った。</li> <li>・改めて、何が大切なのか、そして、一人一人それぞれ違うので、視野が広がった。</li> <li>・めっちゃ大切なもの見つけられた。プリント楽しかった!</li> <li>・大切なものって言われると難しいけど日々生きていくためには、今、日常生活にあるものすべて大切だなと思った。</li> <li>・クラスの皆が、大切にしていることとかものとか、あまり会話の中では出てこないの、知るきっかけができてよかった。</li> </ul> <p>&lt;私に力(パワー)をくれるものワークを通じて&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「音楽の力」で価値観を伝えていくという、カテウラ音楽団の活動を、演奏の動画を交えて紹介</li> </ul>



	<p>した際に、生徒たちはじっと聴き入っていた。「演奏がすごく感動した」「ゴミから楽器を作るなんてすごい」という感想が寄せられた。</p> <p>・「自分が力をもらえると、周りの大切な人に力を与えたいって思ったりする。もしかすると周りに力を与えたいという思いが未来まで繋がったものが、仕事だったりするんじゃないかな」と話をしたところ、生徒の感想として「すごく大切な話を聞いた。進路選択する際に役立てたい」という反応があった。</p>
<p><b>授業者による自由記述</b></p>	<p>・授業実践を振り返ると、教師海外研修に参加したが、正直あまりパラグアイの話題を組み込めなかったな・・・という反省もかなりある。ただ、こうして振り返ってみて、パラグアイで私は、それぞれの現場で課題解決に向けて奔走する方々の使命感や、そこから仲間が増えていく人と人との「つながり力」や、大切なものを「大切に」「愛している」と当たり前のように口にできる現地の方々の愛の深さを感じて戻ってきたのだな、と改めて気づかされた。だからこそ私は、日々接している子どもたちに、自分自身が大切な存在であることや、思いを言葉にすることの大切さや、自分の良いところもダメなところもまるっと受け止めてそのまま進んで良いのだということを伝えたくて、この授業をやることにしたのだった。</p> <p>・生徒のモチベーションをうまく引き上げられなかったり、準備が甘かったりして、計画通りには進まなかった部分もあったが、それぞれのワークを通じて何かを感じ取ってくれた生徒も少なからずいて、「1人でも伝わる子がいれば、そこから広がっていくはず」と前向きになることもできた。参加型にこだわることで、子どもたちの表情の細やかさにも気がつくことができた。</p> <p>・教師海外研修に参加して得られた仲間や現地の方々とのかけがえのないつながり、密度の濃い研修の中で得られた数々の学びは、今後もずっと生きてくるものだと感じている。今回の実践をさらにブラッシュアップさせながら、次年度以降も意欲的に取り組んでいきたい。</p>
<p><b>参考資料等</b></p>	<p>・動画 『地球・46億年の大変動 (1) 生命の誕生』 ディスカバリー・チャンネル</p>

**[ 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど) ]**



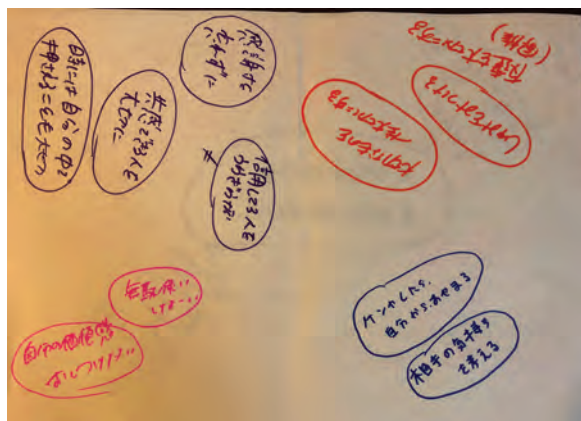
▲ 大切なもののワークの様子



▲ グループワークの様子



▲ 大切なものを大切にできないと・・・



▲ 大切なものを大切にしていくなために必要な行動は？

# IX. 研修全体のふりかえり・評価

## ● 研修受講者アンケート結果から

### 1. 研修の満足度について

研修受講者全員が、5段階評価の最上である「とても満足できた」に回答しており、満足度の高い研修であったことがわかる。【設問1】

設問1；研修は、あなたの期待（あるいは目標達成の支援）を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	8	100%
2	満足できた	0	0%
3	ある程度満足できた	0	0%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体（無回答1名除く）	8	100%

### 2. 開発教育・国際理解教育の実践について

#### （1）実践時間及び前年度からの変化

研修受講者の一人平均実践時間は9.5時間であった。最短3時間から最長24時間まで多様な実績が行われている。【設問2】

実践時間の前年度からの変化では、研修受講者の全員が「前年度よりも増加した」としている。【設問3】その理由の主なものは以下のとおりであり、研修に参加して関心が高まったり、開発教育・国際理解教育の手法がわかったりしたことが要因であったといえる。

設問2；開発教育・国際理解教育の延べ実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	1	13%
2	5～9時間	4	50%
3	10～14時間	2	25%
4	15～19時間	0	0%
5	20時間以上	1	13%
	合計実践時間数	76	時間
	1人当たり平均実践時間	9.5	時間／人

設問3；前年度に比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	前年度より増加した	8	100%
2	前年度と変わらない	0	0%
3	前年度より減少した	0	0%
	全体	39	100%

<実践時間が増えた理由（主なもの）>

- ◇ 研修に参加したことで、自分自身の関心が高まったから。
- ◇ 少しでも開発教育・国際理解教育や参加型学習を広めたいという思いをもったから。
- ◇ 国際理解教育をやるという意識で授業を行ったから。
- ◇ 国際理解教育の手立てが分かり、実践することに自信をもつことができたから。

**(2) 実践内容の深まりについて**

研修受講者のうち6人が「とても深まった」、残り2人は「ある程度深まった」としている。【設問4】

その理由の主なものは以下のとおりであり、研修に参加して関心が高まったり、開発教育・国際理解教育の手法がわかったりしたことが要因であったといえる。

**<実践内容が深まった理由（主なもの）>**

- ◇ パラグアイの学校との交流によって、児童が自分事として捉えられていたから。
- ◇ 教師海外研修で現地の方々との出会い、そのことを子ども達に伝えたいと思ったため。
- ◇ 研修を通して、開発教育・国際理解教育の実践に対する意欲が高まったから。
- ◇ 研修を通して、実践内容の見立てがある程度立てられたため。
- ◇ 参加型の授業により児童の意欲を高められた。その実践の手立てを知ることができた。
- ◇ 参加型の手法を学ぶことができたり、ファシリテーターとしてのスキルを学べたため。

設問4；前年度に比べて本年度の実践内容はどのようになったと思いますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	6	75%
2	深まった	0	0%
3	ある程度深まった	2	25%
4	あまり深まらなかった+深まらなかった	0	0%
	全体	8	100%

**3. 学習者のより良い変化について**

研修の学びを活かして学校で当該教育の授業実践を行った結果、学習者により良い変化があったかとの設問に対し、「とても変化があった」が3人、「変化があった」が4人、「ある程度変化があった」が1人であり、研修受講者全員が、学習者のより良い変化を感じ取っていることがわかる。【設問5】。

設問5；開発教育・国際理解教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	3	38%
2	変化があった	4	50%
3	ある程度は変化があった	1	13%
4	あまり変化はなかった+変化はなかった	0	0%
	全体	8	100%

より良い変化の内容として多かったのは、「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」が7人、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」が6人、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」が5人などとなり、多様な面でより良い変化があったことがわかる【設問6】。

設問6；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	7	88%
2	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	6	75%
3	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	5	63%
4	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にしようとする意識が高まった	4	50%
5	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	4	50%
6	自らの生き方や共生について考えるようになった	4	50%
7	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	4	50%
8	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	2	25%
9	その他	1	13%
	全体	8	100%

## 4. 研修内容への評価

### (1) 事前研修

事前研修の一つの重要なポイントである「学びの3つの柱に沿ったねらいごとの情報収集シートの作成」に対する受講者の評価を聞いた。受講者のうち5人が「とても役立った」、1人が「役立った」、2人が「ある程度は役だった」としている【設問 7】。その理由及びより良くするための提案は以下のとおりである。

設問 7：「事前研修」で行ったテーマ別の教材収集についてのシート作成や準備検討は、海外研修での学びに役立ちましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても役立った	5	63%
2	役立った	1	13%
3	ある程度は役立った	2	25%
4	あまり役立たなかった + 役立たなかった	0	0%
	全体	8	100%

#### <よかったこと>

- ◇海外研修のイメージが湧かず、個人的な目的しかなかったが、事前研修を通してチームで動く目的や役割がはっきりした。
- ◇受講者同士で研修に対する思いを共有することができた。
- ◇教材収集シートなどの事前準備があったため、教師海外研修で何を学びたいのかという一人一人の思いが一つにまとめられ、現地で迷うことなく学ぶことができた。
- ◇各訪問先に行く時には、何度も情報収集シートを振り返り、研修を進めることができた。
- ◇海外研修まで、現地で何をしないといけないかを明確にすることができた。
- ◇もしも可能であれば、前年度の研修参加者にも声をかけて頂き、その場で直にアドバイスを伺えるより良くなると感じました。
- ◇パラグアイというまったく未踏の国を訪問するにあたり、自分自身がどんなことに疑問を持ち、どんな学びを実現させたいと思っているのかということをも具体的にアウトプットできたことで、もやもやとした頭の中が整理できた。
- ◇他の参加者の思いも共有できたので、現地訪問先での質問内容を決めたり、ワークショップで意見を交わしたりする際にとてもスムーズだった。

#### <より良くするための提案>

- ◇教材収集のための観点を明確にしたことは良かったと思いますが、結局はっきりとテーマ分けできない内容・重複する内容等もあり、そこに時間をかけるべきなのか疑問に思うこともあったため。リストアップ形式だけでもよかったかもしれません。
- ◇メンバーが効率よく教材収集することは可能だと感じたが、実際に現地での研修の中で、聞きたい内容などに変化もあるため、そこに囚われすぎなくても良いのではないかと感じた。そのため、詳細な質問というよりは、大まかな分類くらいの把握でも良いと考える。

**(2) 事後研修**

事後研修の重要なポイントである「ねらいを達成するための実践プログラムの作成・評価」に対する受講者の評価を聞いた。受講者のうち6人が「とても役立った」、2人「役立った」としている。【設問8】。その理由及びより良くするための提案は、以下のとおりであった。

設問8：「事後研修」で、授業実践プログラムの作成・評価を行ったことは実践に役立ちましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても役立った	6	75%
2	役立った	2	25%
3	ある程度は役立った	0	0%
4	あまり役立たなかった + 役立たなかった	0	0%
	全体	8	100%

**<よかったこと>**

- ◇研修仲間や研修スタッフからのご意見は非常に参考になった。実際にその多くを取り入れて授業実践を行い、全体としては生徒にとって気づきや学びの多い授業ができた。
- ◇教師海外研修で学んだことがたくさんあったため、子どもたちに考えさせたいこともたくさんできた。そのため、授業実践プログラムをどのように作成したらよいのか混乱してしまったが、受講者や研修スタッフの方々からのアドバイスを参考に流れが作成できたので、自信をもって実践を進めることができた。
- ◇教師海外研修で得た教材をどのように活用したら良いのか、とても悩んでいたため自分の考えを整理したり、様々な方法を提示してもらえたりしたため、実践をスムーズに進められた。
- ◇授業実践プログラムの作成にあたり、他者の意見が聞けたのが良かった。
- ◇具体的な展望をもてたことが実践に役立った。プログラムの評価の中に、授業としての児童の評価の視点も必要かなと思った。
- ◇海外研修ではインプットが非常に多く、研修の内容をより深く自分の中に落とし込むためにも早くアウトプットしたいと思っていました。事後研修のタイミングはとても良く、事後研修で立てたプログラムが本年度の実践のたたき台になったので、とても役立った。
- ◇現地研修の記憶と感覚が鮮明なうちに、「これを伝えたい!」という現地から持ち帰ってきたまっすぐな気持ちを、実践プログラムの作成という形で表現することができた。また、他の参加者と共有をし、新たに提案や質問をもらえたことで、プログラムが実際どのように受け止められるのかというシミュレーションができた。

**<より良くするための提案>**

- ◇自分自身が、いざ実践という段階で生徒の実状と計画した実践の内容がはまらず、かなり苦しいスタートになってしまった。時間的内容的に可能であれば、実践クラスの実態や、それに対する授業者の課題観や彼らに何を伝えたいかななどを最初に共有できるとよい。それにより、計画を立てる上で「こういう活動の方がはまるかも」、「これだと少し飛躍しすぎかな?」といった視点を持って組み立てができる気がする。

## 5. 教師海外研修の良かったところ、より良くするための提案

「教師海外研修の良かったところ」と「より良くするための提案」の主な回答は以下のとおり。

### <良かったところ>

- ◇最初は日程がハードかなと思っていましたが、国内での研修(事前、事後ともに)も全て含めて、このままで良いと思う。
- ◇現地での貴重な体験や学び合うことのできる仲間ができたことは、私自身の一生の財産になった。
- ◇今年度は、学びが多く、自分自身の中でも変化の多い一年になった。学び合える仲間も増え、今後の実践への意欲が湧いた。
- ◇現地では、短い時間の中でより充実した研修となるように、特に現地同行スタッフ、同行ファシリテーターがスケジュールとファシリテーションに関して尽力いただいた。また、訪問先の方々には、快く私たちの訪問を受け入れていただき歓迎していただいた。快く私たちの質問に答えていただいたり、プロジェクトなどの説明を熱心にしていただいたりした。通訳の方は、訪問先での正確な通訳のみならず、場合に応じて背景知識を説明していただき、パラグアイの現状についてより深く理解することができた。
- ◇パラグアイで関わった全ての人々が、私をパラグアイと肯定的に出会わせていただいた。
- ◇実際に海外でたくさんのお話を聞いたこと。現場を知っている、現状の良さも困難さも経験している人からお話を聞いたことは、自分自身にとっても授業を実践していく上でもとても良かった。
- ◇なんといっても『生きた学びができる』ということだと思う。現地の人々、環境、文化や習慣、価値観などに直接触れることができるのは、大きな学びであった。
- ◇同行ファシリテーターのお陰で、学びが深いものとなった。研修後に、バスの中でアウトプットの時間を取ってくれて整理することができた。また、体調のこともかなり気を使ってくれ、異国での研修でも心強かった。
- ◇参加者同士や訪問先の方々との固い絆を感じられた。どの人とも初めて会ったのに、昔から知っているような感覚になれたのは、「よりよい社会を作りたい」「こどもたちに希望をもって生きてほしい」「後世に思いを伝えたい」といった共通の信念がどの人にもあるということを感じられたからだと思う。
- ◇JICA 及び研修スタッフの素晴らしいサポートのおかげでとても有意義な研修となった。

### <より良くするための提案>

- ◇研修後に一日の終わりに提出するワークシートは、課題の範囲が広いため、終わりの基準がなく困りました。どのワークシートも、「児童に伝えたいこと、言葉」や「この研修を生かした授業構成」など、絞っていると、もう少し書きやすかったように感じた。研修の際に聞いてメモに取った研修シートですすでに自分の考えや研修の内容をまとめて書いており、提出用ワークシートにまた同じようなことを写す作業になるようなこともあった。
- ◇ワークシートは、訪問先でメモしたことを文章化していた人が殆どかと思うが、訪問先ごとのメモ欄の下に振り返りができるようなスペースがあれば合理的だと思う。
- ◇実践を意識した研修にすることで、研修で情報を取捨選択する自分なりの基準もはっきりすると思う。自分なりに実践を意識できるとよいのですが、私の力不足で研修のまとめをすることと、健康に過ごすことで精一杯だった。
- ◇現場を知っている、現状の良さも困難さも経験している人からお話は、私にとってはその内容や経験したことの意味を解釈していく時間がもう少し必要だった。

## ● 実践内容の評価

※実践報告書の内容について下記の指標から評価を行った結果をまとめた。

評価は、3人の評価者が、実践度合いを「全くなし」0点～「特にあり」5点まで点数化しその平均値で行った。

### ● 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

**指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。**

- ① 訪問国を身近に感じられるようになる。
- ② 自分たちとは異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ!それもアリ!と思える。
- ③ 自分の当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。
- ④ 自分の中のステレオタイプ/思いこみに気付く。

**指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。**

- ⑤ 多様な中にも人々の暮らしや感情・希望には多くの同一性があることに気付く。
- ⑥ 人、ものなどを通し、日本と訪問国がつながっていることに気付く。
- ⑦ 訪問国と相互に依存しあい、途上国から様々な恩恵を受けていることに気付く。
- ⑧ 海外で頑張る日本人の想いや活動内容から、生き方・働き方について考える。

**指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。**

- ⑨ 訪問国には誇りがあると同時に、残念なことがあることに気付く。
- ⑩ 各課題の原因を知り、日本や自分たちとの関わりに気付く。
- ⑪ 各課題の現状を知り、放っておくとその国の人や自分たちにどんな影響があるか考える。
- ⑫ 課題解決のためお互いの国が学び合い、協力し合えることに気付く。
- ⑬ 訪問国の課題から、翻って日本の課題を考える。

### ● 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

**指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。**

- ◇ 学習者の年齢・関心の程度に応じて、その意識の流れに沿ったプログラムとなっているか。
- ◇ 学習者が、「知る、気づく」に留まらず、気づきを基に、「自分にできることを考える、実際に行動できるようにするためのスキルを身につける」ことができるようなプログラムとなっているか。

**指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。**

- ◇ 学習者が内発的に気づいたり、主体性に考えたりできる問いかけや参加型手法を使っているか。
- ◇ 知識伝達のみ・予定調和の答えではなく、学習者が学びあう中で答えを見つけたり、新しい発見ができるようなプログラムとなっているか。

**指標⑥ 現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。**

- ◇ 現地に行ったからこそ得られる素材や情報(教材)を活用できているか。
- ◇ 教材の活用として、単に現地について知ってもらうために見せたりするだけでなく、教材をもとに、「想像する」「読み取る」「対比する」「表現する」などができるような加工や問いかけの工夫があるか。

## 1. 学びの3つの柱についての実践度

教師海外研修では、3つの学びの柱に沿って、現地での情報収集や実践プログラムづくりを行った。各授業実践に、3つの学びの柱がどれだけ盛り込まれたかについて、受講者の実践報告書の評価を行った。その結果は下表のとおりである。

各柱の実践度を見ると、「柱3：共通の課題について共に考え・共に越える」の実践度が高く、次いで「柱1：訪問国に肯定的に出会う」、「柱2：日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」の順となっているが、いずれも取り入れた実践がほとんどであった。

学びの3つの柱からみた実践内容の評価結果

学びの柱	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	特にあり 3.3点以上	あり 1.6点以上 3.3点未満	なし 1.6点未満
柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。	5 63%	2 25%	1 13%
柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。	4 50%	4 50%	0 0%
柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。	7 88%	1 13%	0 0%

## 2. 参加型、収集教材活用の実践度

本研修では、開発教育・国際理解教育を通して、世界における共通の課題解決に向けた行動につながるプログラムの作成、学習者の主体的な学び合いを支援する参加型手法の活用ができる指導者育成をめざしている。また、海外研修においては、現地で得られる教材を活かして実践をすることも求めている。受講者の実践において、関連する3つの指標について評価した結果は下表のとおりである。

3つの指標ともに、すべての受講者が実践していると評価できた。

参加型・現地教材活用の実践度からみた実践内容の評価結果

参加型・現地教材の活用	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	特にあり 3.3点以上	あり 1.6点以上 3.3点未満	なし 1.6点未満
プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。	7 44%	1 6%	0 0%
学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。	7 44%	1 6%	0 0%
現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。	6 38%	2 13%	0 0%



## 2018年度 教師海外研修報告書

発行 2019年3月

発行者 独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA中部）

〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7

Tel : 052-533-0220 (代表) Fax : 052-564-3751

<http://www.jica.go.jp/chubu/>

---

